

蚕糸史話序説

赤とんぼ

夕焼け小焼けの赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か
山の畑の 桑の実を
小籠に摘んだは まぼろしか・・・



蚕糸科学研究所

蚕糸史話序説 目次

前言	1
第Ⅰ章 日本製糸点描	
1. 南アフリカ大使の願い	3
2. 殖産興業・富国強兵	4
3. 定織自動繰糸	5
(1) 繭糸の特性 ー繭糸織度曲線ー	5
(2) 定粒繰糸の織度時系列	5
(3) 定織生糸の織度時系列	5
(4) 定織自動繰糸機	8
第Ⅱ章 最古の絹出土 ー羅ー	
1. 五千五百年前の絹網	12
2. 羅の使い道 ー狩猟具ー	13
(1) 中国の記録 ー一網打尽 ^{いちもうだじん} の薄網ー	13
(2) 日本の記録 ーかすみ網ー	14
(3) 上流社会の高級夏物衣料	14
第Ⅲ章 馬王堆漢墓出土の素紗禪衣	
1. 素紗禪衣の生産推測	17
(1) 織糸は繭七粒合糸の定粒生糸	18
(2) 紗は薄く透き通った生絹	19
(3) 禪衣は重さ五十グラム以下	19
2. 錦と紗 ー花嫁衣装の伝える婦人の徳ー	20
(1) 錦	20
(2) 花嫁衣装はファッションの先駆け	20
3. 古代技術は戦俘血涙の結晶	21
第Ⅳ章 千古絶唱の璇璣図	
1. 蘇蕙と竇滔の生い立ち	22
2. 新婚生活	24
3. 晋代回文詩織錦 ー璇璣図ー	24
4. 回文詩	25
第Ⅴ章 幻の繩を尋ねて ー内織りの自家用紬ー	
1. 日本の史書に初めて記された絹 ー繩ー	27
(1) 山幸彦	27

(2) 弟橘比売命	27
(3) 仁徳天皇	27
2. 古代絹の代表 ー 絁 ー	28
(1) 日本書紀・続日本紀にみられる絁	28
(2) 絁は調貢絹織物の代表品	28
3. 絁は古代の貨幣	29
(1) 絁の相場	29
(2) 絁は貨幣	29
4. 絁と綿紬 ー 内織絹 ー	31
(1) 絁の文字	31
(2) 「あしぎぬ」の呼び名	31
(3) 絁の歩み	31

第VI章 染色文字 ー 絹染めで定義 ー

1. 赤は命の色	33
2. 社会的要請と染色技術	34
(1) 礼の社会 ー 礼記 ー	34
(2) 殷代三原色の原理を認知	34
(3) 澄朱法 ー 鉍石染材の採取 ー	35
(4) 古代の染色 ー 緋・・・ 纁 ー	37
3. 緑衣 ー 姜夫人の悲しみ ー	38

第VII章 砧のうた ー 班婕妤の悲歌 ー

1. 繭糸と砧	40
(1) 繭糸	40
2. 班婕妤の擣素賦	42
3. 中国の擣素賦	44
(1) 玉台新詠	44
(2) 万戸衣を擣つ	45
4. 日本の砧の和歌、俳句	46
(1) 和歌	46
(2) 俳句	47

第VIII章 糸文字(1) ー 古代繰糸の絵姿 ー

1. 『孫子算経』 ー 繭糸の太さは長さの最小単位 ー	48
(1) 忽 ー 繭糸は究極の細糸 ー	48
(2) 絲 ー 生糸の太さは繭糸十本合せ ー	49
(3) 甲骨文・金文 ー 糸文字は三千年前に出現 ー	49
2. 『説文解字』 ー 五忽の糸は最も細い織物原糸 ー	49
3. 糸文字は殷代繰糸の絵姿	51

第IX章 糸文字(2) 股代繰糸の姿 ー糸偏文字の伝えるー	52
1. 輸出生糸の繰糸	52
2. 糸偏技術用語の招集	52
(1) 素 ーほどよい煮繭 <small>にまゆ</small> の目印ー	52
(2) 乱 ー正緒繭ー	53
(3) 緒 ー繭糸の端緒ー	53
(4) 繰 ーカイコの巢からの糸とりー	55
(5) 給 ー接緒ー	55
(6) 紀 ー粒付け管理ー	56
(7) 統 ー繰糸工程の管理ー	56
3. 股代の繰糸法 ー古代の技術語の語るー	56
第X章 糸文字(3) 生糸は古代産品の首位 ー糸偏文の独り言ー	
1. 糸偏文はシルク文字	58
(1) 純	58
(2) 紙	58
(3) 索	59
(4) その他	59
2. 生糸は古代産品の首位か	60
第XI章 七夕(1) ー乞巧奠ー	62
1. 乞巧奠	62
牛郎	62
仙女飛来	62
美しい妻	63
機織り	63
離別	64
再会	64
牽牛星と織女星	66
乞巧奠	66
2. 七夕物語は三千年以上の昔から	66
第XII章 七夕(2) ー中国の七夕歌ー	
1. 迢迢たる牽牛星 ー枚乗ー	68
2. 燕歌行(抄)	69
3. 七月七日夜 ー牛女を詠むー	69
4. 七夕歌	70
第XIII章 七夕(3) ー日本の棚機ー	

1. 万葉集の時代 —和風・漢風混在の棚機—	73
織女と彦星	73
棚機は日本の風俗歌 —妻問婚—	74
万葉集時代の棚機の歌	74
2. 古今和歌集の時代 —万葉かなからひらがなへ—	76
3. 新古今和歌集 —「たなばた」表示は「七夕」に統一—	76
第 XIV 章 桑葉の薬効(1) —桑は仙薬の上首—	
1. 栄西権僧正	79
2. 喫茶養生記	80
3. 序文	80
4. 卷上 五臓和合門	80
5. 卷下 遣除魍魅門	81
第 XV 章 桑葉の薬効(2) —桑葉の作り方—	
1. 悪病と薬草の効能	84
(1) 飲水病 —糖尿病—	84
(2) 中風	85
(3) 不食病	85
(4) 瘡病	85
(5) 脚気	85
2. 桑葉の作り方	85
(1) 桑粥の作り方、食べ方	85
(2) 桑煎の作り方	86
(3) 桑抹茶の作り方と飲み方	86
(4) 桑の実の服用	86
(5) 桑木の服用	87
第 XVI 章 桑葉の薬効(3) —魍魅魍魎—	88
1. 桑樹は天魔も避ける霊木	88
2. 桑の杖	88
3. 桑の箸	89
4. 乾椹飢餓を治める	89
5. 桑樹の薬効成分	91
参考文献	92
あとがき	93

前 言

明治以降日本の蚕糸業を支えてきた製糸業法・蚕糸業法は、平成九年五月二十三日の衆議院本会議で廃止されました。このことは、生糸輸出に係わる様様な処置と「お国のために」と務めてきた人々の精神的なよりどころの消滅を告げるものでした。それまでの「国策」のように蚕糸業のよりどころになる大義が他に無いか。二法の廃止以来、頭から離れない「思い」となりました。

絹の宗国中国の史書は、出土品から、人と絹のかかわりは六千年以上の昔から、と伝え「養蚕と絲（生糸）織は世界の人々の物質的生活面（文明）と精神的生活面（文化）へ深く影響を及ぼした」と述べています（図 0.1～0.4）。

その跡をたどると、中国では四千二百年以上前の原始社会、すでに細い生糸づくりの繰糸法が整えられ、夏王朝では「衣服は体の保護ばかりでなく、むしろ自己表現の手段として都合の良いもの」であることに気付き、絹の衣裳は奴隷主や王侯貴族の上流社会で権力や富の象徴に用いられたようです（篠原昭信大名譽教授）。柔らかで暖かく、軽くしなやかな美しい絹はそうした歩みを通して人々のファッション心理を目覚めさせ、人と絹のかかわりを深め遠い古代王朝の時代から独特な^{いこい} 憩の文化を築いてきたようです（図 0.5）。

物質・エネルギーそして情報へと科学的手法の概念が拡大し、時間的ゆとりの失われつつあるなか、絹の文化が人々の心を癒す一端を担うことができるなら、絹は再びこれからの時代に貴重な役割を果たす存在になると思うのです。

ここでは長い絹の歴史の流れから文化を築いてきた礎石を汲みとり、本願寺の^{かくによ} 覚如上人の「流れを酌んで^{なが} 源^くを尋ねる^{みなもと} 酌^{たず}流^{しやくりゆう} 尋^{じゆん}源^{げん}の教に学び（大江憲成（2016）酌流尋源. 在家佛教 65, 768 号）」、ご批判を頂き絹文化に関わる情報を集積したいと思います。

蚕糸史話各項と参考文献は元蚕糸科学研究所客員研究員の嶋崎昭典が、蚕糸史話序説へのまとめは同所の清水重人が担当しました。

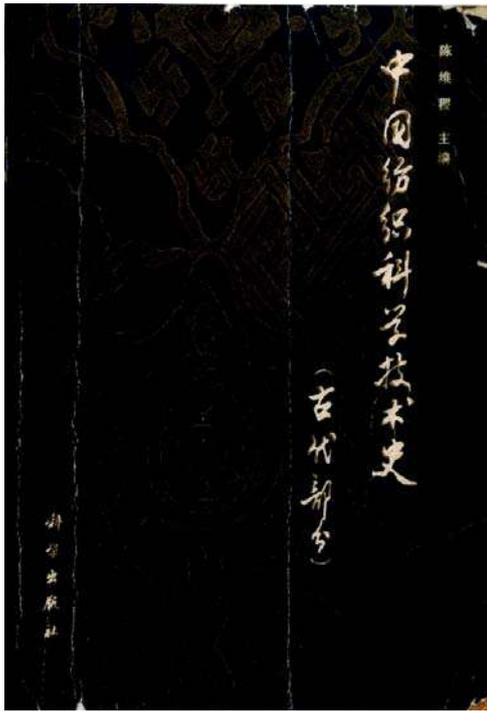


図 0.1 陳維稷主編(1984) 中国紡織科学技術史(古代部分). 科学出版社. 北京. 蚕糸史話全体にわたる主参考書.

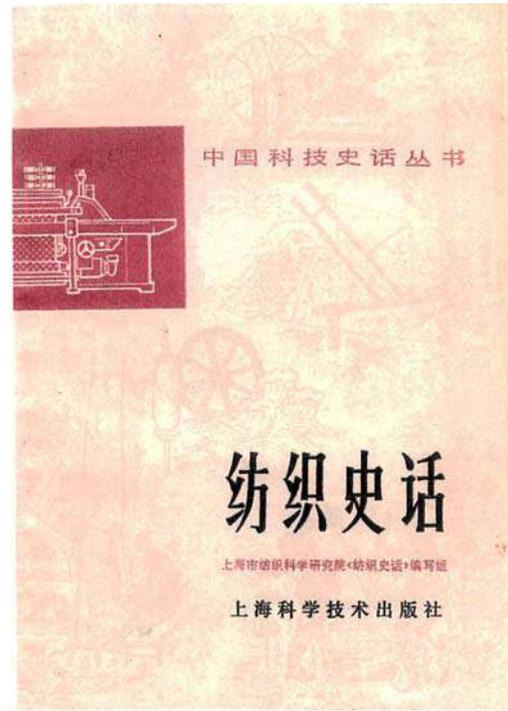


図 0.2 上海市紡織科学研究所『紡織史話』編写組(1978). 紡織史話. 上海科学技术出版社. 上海. 歴史上の話や逸話など話題の参考書.

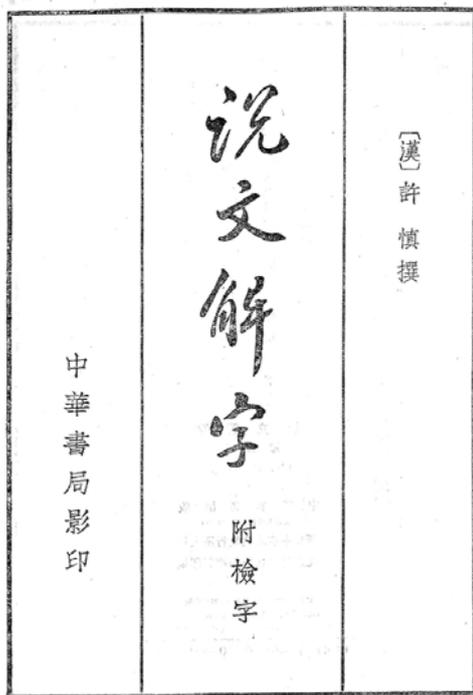


図 0.3 說文解字
許慎(西曆 1987 年. 中華書局出版)

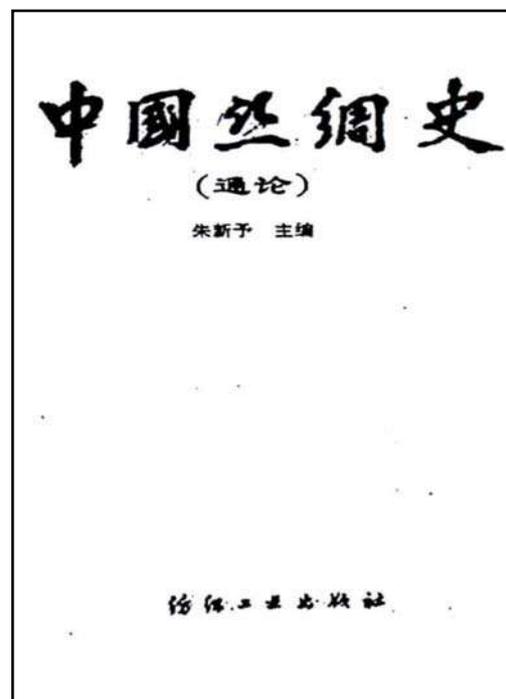


図 0.4 朱新予編(西曆 1992 年), 中国絲綢史(通論・專論), 紡織工業出版社. 北京

绪 论

我国是世界四大文明古国之一。几千年来，我国各族人民创造了光辉灿烂的古代科学文化。指南针、造纸、印刷术和火药是举世公认的我们祖先对人类的重大贡献。养蚕、丝织、种茶和制瓷等许多技术，也都起源于我国。这些对世界文明，对各国人民的物质生活和文化交流，都曾起过巨大的作用。我国各族劳动人民的纺织生产实践，在世界各民族中，可以说是起源极早，范围极广，对人民的物质生活和精神生活影响最深的。因此在我国各族人民共同创造的中华民族文化中，处处可以看到纺织生产及其科学技术的渗透，对于世界文化，也有相当的影响。

图 0.5 養蚕製糸は人々の物質的生活（文明）と精神的生活（文化）に影響を与えた。
(图 0.1 の緒論)

第I章 日本製糸点描

安政六年七月一日（1859）、横浜開港で輸出品目の主役になった生糸を生産する蚕糸業は、国の保護を受け、他産業と異なる歩をしました。その様子は大日本蚕糸会出版（1935）の『日本蚕糸業史第一巻』にはじまる史書など、多くの名著に詳しく記載されています。ここでは、「蚕糸史話」の初めに当たり、身近な事柄を通して日本製糸の一端を点描したいと思います。

1. 南アフリカ大使の願い

十数年以上前のことになりま
す。

「日本が生糸から製糸、そして織物と、自国の天然資源を活用して産業化していった過程を学びたい」。在京南アフリカ大使のングバネ氏は、昼食会の席上、重々しい声でそう言った。そこには、いつまでも天然資源の輸出に依存し、真の工業化の芽が育ちにくいアフリカの国の苦悩がにじみ出ていた。

と、小倉和夫氏は「名を残さぬ人々の育て方」の信濃毎日新聞、平成十六年十一月十五日の夕刊「今日の視角」欄で述べています（図 1.1）。生糸の輸出入に関係なかったと思われる南アフリカの大使による、戦前の日本の生糸輸出に関わる発言は、驚きと共に改めて蚕糸先人の果たした偉業に思いを致しました。

2. 殖産興業・富国強兵

明治政府は、先進列強の植民地政策や経済的植民地化に抗し、真の独立国家の地位を固



図 1.1 小倉和夫(2004). 名を残さぬ人々の育て方. 信濃毎日新聞夕刊

めるため、殖産興業・富国強兵策を進めました。資本力の乏しい小・後進国日本の出来ることは、国民が心を一つにして勤勉に励み辛苦に耐え国策に応えることでした(図1.2)。

蚕糸業も幾多の困難を越え、四つの技術革新期を経て世界の蚕糸業を先導し、また明治四十二年から昭和十六年までの長い間、生糸輸出世界一の座を占有し、日本の近代化に貢献するのでした。

北海道開拓使に十年間二千万円近い巨額を投じたということも、また、いきなり洋式造機や造船工業などを直輸入したり、模範奨励的な工場を設置したりしたことも、明治政府の強兵富国の根本要求からはじめて理解できよう。すなわち、ひとつには外国資本の介入の危険がつけねにあつて、それを国家的な力で予防しなくてはならなかったということと、ひとつには、いちはやく政府が近代的軍事制度を採用しようとしたために、早急な軍事関連産業を建設することはもちろん、その基本条件となる経済の高度化の要請にせまられたということ、そのことにあつたらう。(中略)

しかし、それらは期待した実効をもたらさなかつた。けつきよくは、豪農富農層による在来産業の改良努力、生産努力にまたなければならなかつた。そして、その本命をなしたものは、西洋種の商品作物や牧畜などではなく、伝統産業として生きた生糸と茶業であつた。

それは、明治十六年までの、わが国輸出総額の六割以上を占めていた。つまり、この二品目によって日本はこの時期、不十分ながら外貨を獲得していたのであり、こうして得た外貨があつてはじめて、官営工場における機械や原料の輸入も、大量の外人技師団を雇うこともできたのである。俗に「絹は明治経済の防波堤」といわれるのはその意味であろう。(中略)

誰の力によつてか？ 日本人民の世界無比の勤労によつて……。

高い政治意識と国際的緊張感と愛国心に燃える中間層としての豪農・中堅官僚・知識人などの奮闘によつて……。

図1.2 色川大吉(1966). 日本の歴史 21. 近代国家の出発. 中央公論社.

3. 定織自動繰糸

カイコは無防備な蛹の時期、雨露を防ぎ天敵から身を守るために細く長く強い繭糸を吐いて巢(繭)をつくり、その中に隠って成虫の蛾になります。製糸は、その繭から、一本の繭糸を吐糸された順に巻き戻しつつ幾本か合わせて編物や織物の材料糸(生糸)に加工します。繭糸の太さ(繭糸織度)は、カイコの品種、飼育環境、雌雄、個体、また繭糸の吐糸位置により変化します。繰糸技術の第一はそれらの繭から太さのそろった目的織度の生糸を繰り取る方法にしばられます。

具体的方法は、中国の殷代から、繰糸繭数（粒付数）を与えられた数に保って終始繰糸する定粒繰糸法で、三千年来変わることなく行われてきました。戦後、日本の製糸業は、走行生糸の太さを計測し、生糸の目的織度を維持する「最細接緒織度を感知すれば粒付数に関係なく繭糸一本を接緒する」定織繰糸法を開発し、それを組み込んだ定織自動繰糸機を実用化し、定粒繰糸から定織繰糸への革新技術時代を迎えました。特殊な技術の問題になりますが図絵を中心にその概要を紹介します。

（１） 繭糸の特性 ー繭糸織度曲線ー

繭糸のような長繊維の太さ（織度）の単位は、「長さ九千メートルの重さが一グラムの糸を一デニール」と定義されています。繭糸の平均織度はおよそ二デニールから三デニールです。技術的に大切な繭糸情報は、図 1. 3A に示す糸の吐かれた順に織度が山なりに変化する繭糸織度曲線の姿です。図 1. 3B の繭集団から無作為に一粒の繭をとり出し、逐次連続一粒繰糸したモンテカルロ法の繭糸織度の時系列図を図 1. 4 に示します。またその周期性を統計解析したコレログラムを図 1. 5 と 1. 7 に示します。図から一粒繭糸織度時系列には平均繭糸長を周期に強い周期性のあることが知られます。

（２） 定粒繰糸の織度時系列

前項と同じ方法で、三粒付生糸の織度時系列の構造を図 1. 6 に示します。三本の繭糸織度曲線が互いに合成、干渉しあうので、生糸織度時系列の上下振動は増大しますが、周期性は図 1. 4 より分かり難いので三粒、五、七粒付生糸織度時系列のコレログラムを求めますと図 1. 7 のようです。周期性は粒付数に関わらず一粒付と同じであることが知られます。

東京高等蚕糸学校の三戸森確郎の理論を加えて要約しますと、 K 粒付定粒生糸の平均織度は一粒生糸の K 倍、織度偏差は \sqrt{K} 倍、生糸織度の周期性は接緒繭を無作為に行う限り粒付数に関係なく一粒繰糸の周期性と同じであることが知られます。

（３） 定織生糸の織度

昭和五年、東京蚕糸高等学校の中川房吉教授は『絲條斑向上製糸法』（明文堂）のなかで、「繰糸中の生糸が細限織度値に到達すると、粒付数に関係なく一本の繭糸を接緒する」細限接緒繰糸法（定織繰糸法）を提示しました。その方法で繰製される繭糸織度曲線と定織生糸織度時系列の関連図を図 1. 8 (A, B) に示します。繭糸織度曲線と定織生糸の織度時系列の理論解析が行われ、繰糸技術で定織生糸の平均織度は自由に調整でき（図 1. 9）、織度偏差は定織生糸の太さが十四デニール以上なら粒付数に関係なく一定値となり（図 1. 10）、周期は平均繭糸長を平均粒付で除した値で太さむらの小さい揃った生糸の生産されることが知られます。

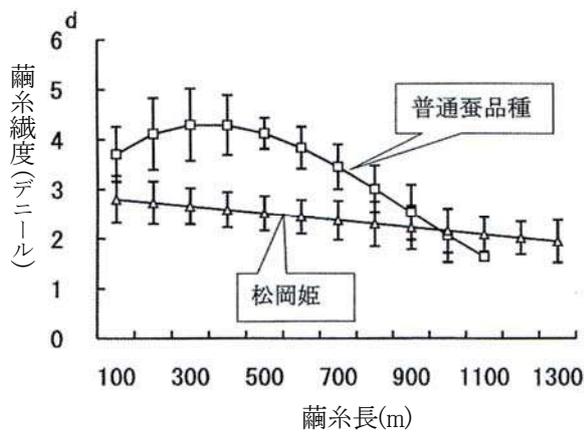


図 1.3A 代表的繭糸繊度曲線図

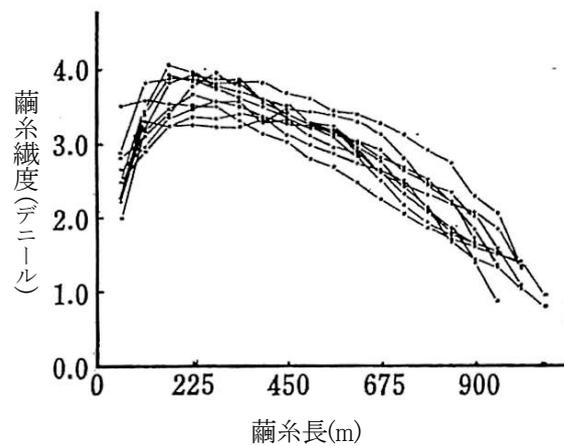


図 1.3B 個々の繭糸繊度曲線群

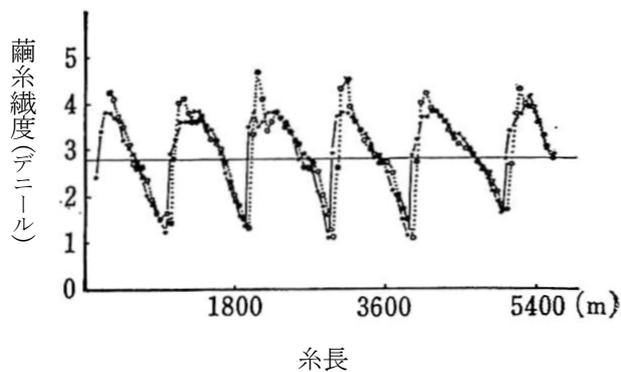


図 1.4 1粒繰り繭糸繊度時系列
(嶋崎昭典, 管理工学入門)

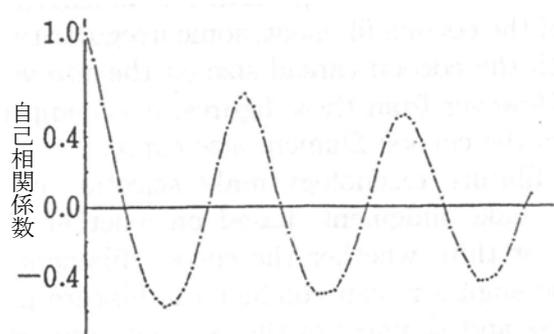


図1.5 1粒繰り繭糸繊度時系列の周期性
(コレログラム)

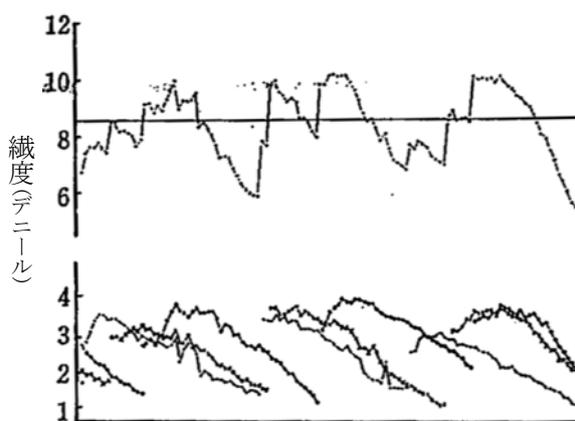


図 1.6 繭糸繊度と3粒定粒生糸の
繊度時系列

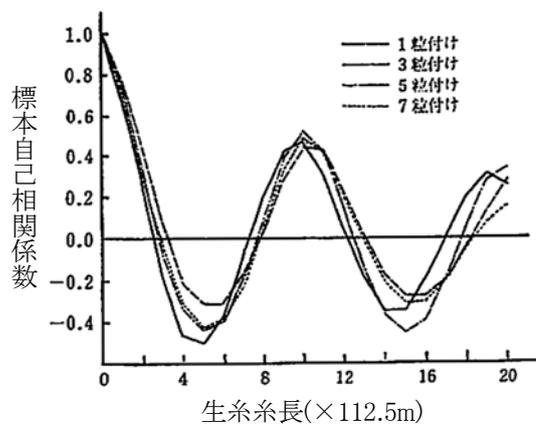


図 1.7 粒付け数別定粒生糸繊度時系列の
周期性

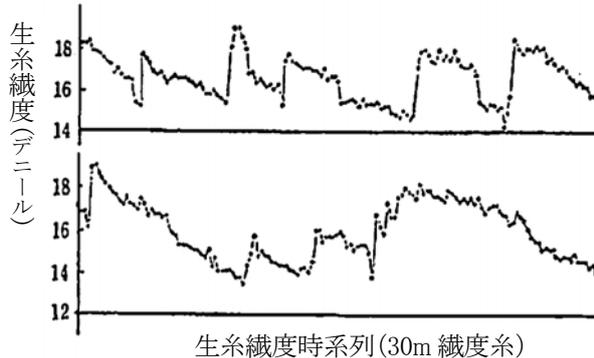


図 1.8A 定粒生糸と定織生糸の織度時系列
(1粒繰糸、30メートル織度糸検査)

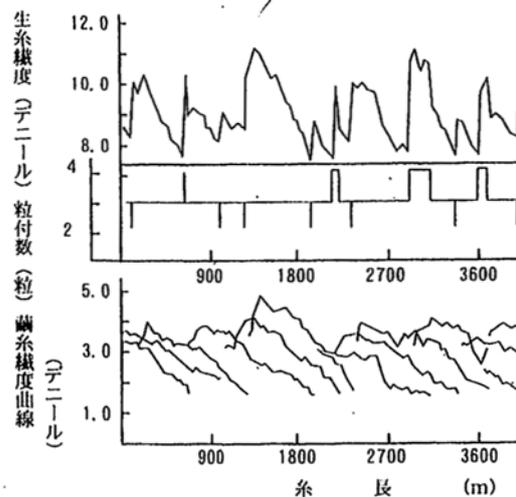


図 1.8B 3粒目処の定織繰糸の構成図
(30メートル織度糸検査)

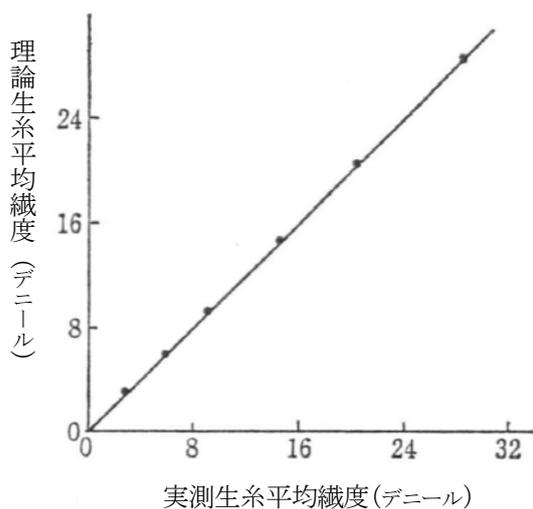


図 1.9 定織生糸の実測値と理論平均値の
関係(管理工学入門).

黒丸. 定織生糸の織度偏差 \approx 平均繭糸織度 / $\sqrt{12}$. 嶋崎式, 続絹糸の構造. 北條舒正編(1980)

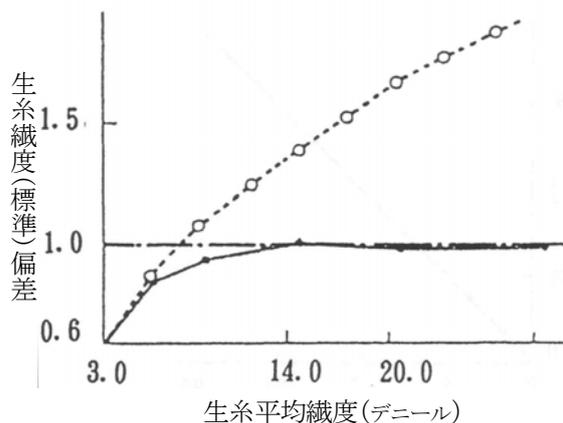


図 1.10 定粒(白丸)、定織(黒丸)生糸の平均織度と織度偏差の関係

定粒生糸の織度偏差 $= \sqrt{\text{粒付数}} \times \text{繭糸織度偏差}$ (三戸森式) (管理工学入門)

(4) 定織自動繰糸機

片倉工業は、大宮研究所で繰糸中の生糸の太さを計測し、目的太さの生糸を自動生産するK 8型定織自動繰糸機を開発し、一号機を昭和二十六年片倉石原工場に設置し逐次傘下工場に拡大しました。続いて恵南産機、プリンス自動車(ニッサン自動車)、グンゼなどが参加し日本製糸は自動繰糸時代を迎えました(図 1.11)。その結果、繰糸能率は十五倍、繭の糸くち探しの屑物は半減し生糸の織度むらの少ない、原料繭特性の影響を受けること

の少ない、技術主体の生産体制が確立されました。そのため定粒繰糸の多条繰糸機は昭和三十九年で統計から姿を消し日本は定織生糸時代（図 1.12）となり、この技術は世界へ拡大するのです。定織生糸は革新的生糸づくり法なので、日本各年次の生糸検査全国データを用いてその実態推移を求め、図 1.12 に年次別推移を示し、各図の標題説明をします。

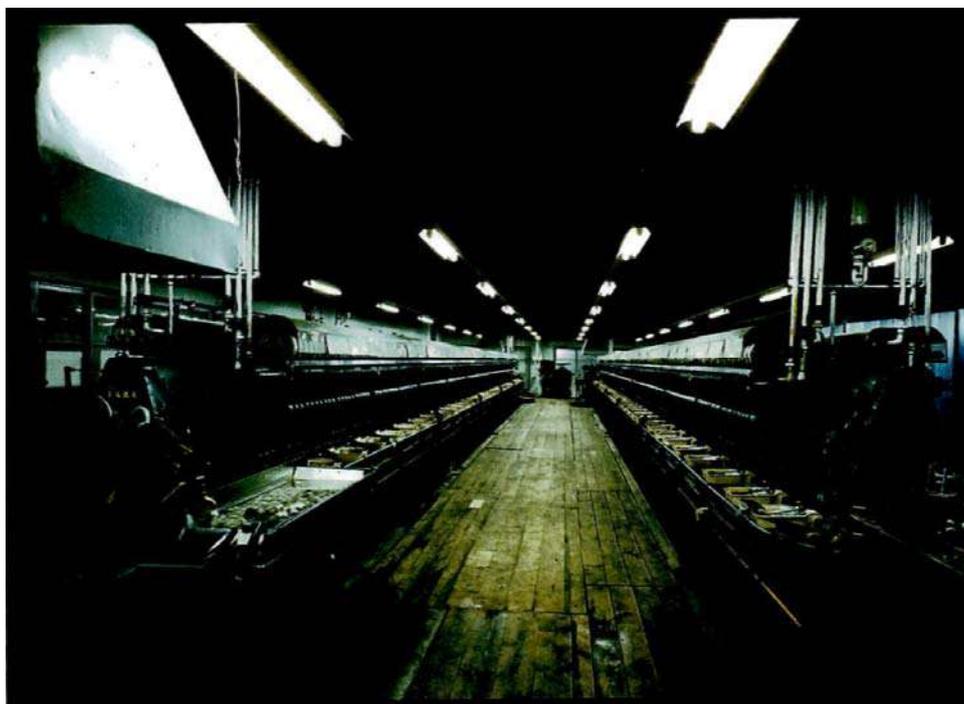


図 1.11 自動繰糸機 1 人 200 緒受持ちの初期自動工場
(プリンス自動繰糸機タマ 10 型)

◇定織繰糸の織度・粒付数時系列

定織繰糸課程の粒付数と定織生糸織度の時系列のモデルを忠実したモンテカルロ法による構造を標題図に示しました。自然落緒、不時落緒にかかわらず細限接緒点に走行生糸が到着し 1 粒正緒繭を接緒すると、その時点で生糸織度は正緒繭の太さだけ飛躍し、そのあとは多くの織度は低下します。

◇対俵キビソ量の推移

初代多条繰糸機時代以降の生糸一俵当りのキビソ量（繰糸工一人一日生糸生産に対する生糸一俵（60Kg）あたりのキビソ量（平均 Kg 単位））の全国平均値です。表から生糸一俵生産に対するキビソの量は 6.0Kg 以上が漸次低下し、1975 年は半分の 3.0Kg まで低下します。その後の増加は外国産原量の増加によるキビソ量の増加で、定織自動機の導入で対俵キビソは半減するのです。資料は蚕糸局報告値です。

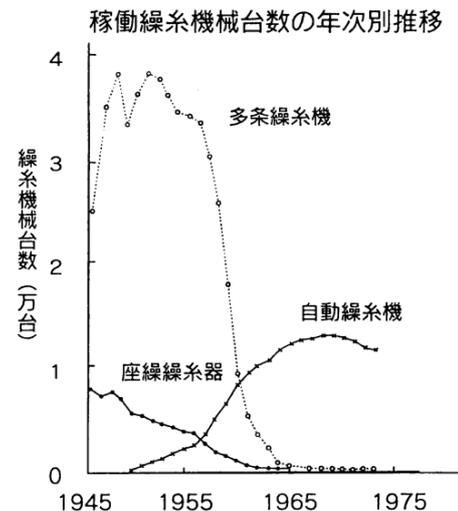
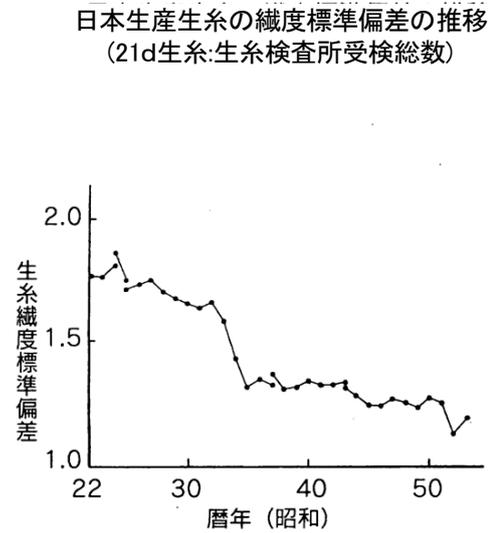
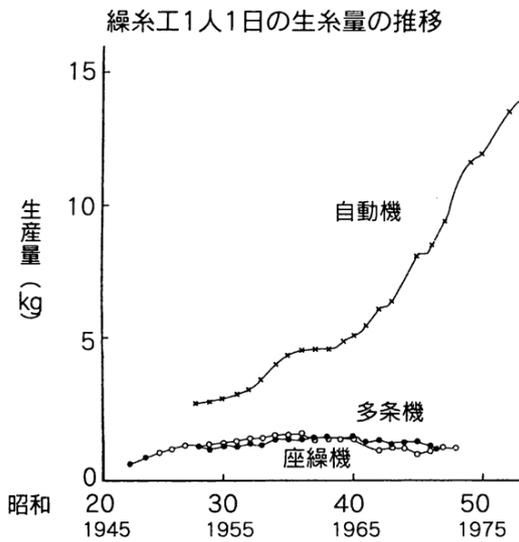
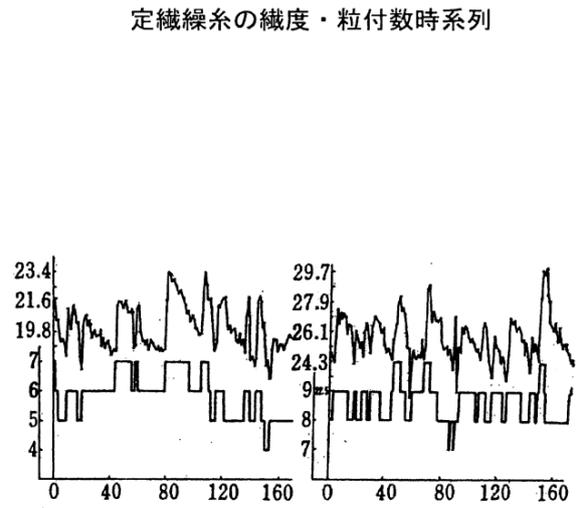
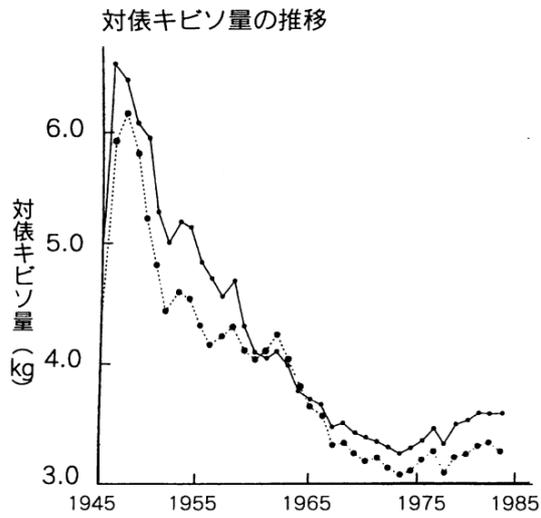


図 1.12 自動繰糸導入期の生糸検査成績の推移
(資料 生糸検査, 年間データ)

◇繰糸工一人一日の生糸量の推移

繰糸工一人一日の生糸生産高は、多条機、座繰糸が一日約 1Kg の生糸生産であったものが、定織自動機の生産高は繰糸工一人当り 15Kg に至るのでした。生産能率は約 15 倍増になりました。

◇日本生産生糸の織度標準偏差の推移

生糸織度偏差の推移です。定粒生糸の織度偏差は、原料繭の平均繭糸織度を μ 、織度偏差を σ 、粒付数 k とすると、 $\sqrt{k} \sigma$ で与えられます（三戸森の式）。粒付数を多くし太糸にすると、生糸の織度偏差も増加し太さむらの大きい生糸になります。

定織生糸の織度偏差は $\mu / \sqrt{12}$ （デニール）となって生糸の太さに関係なく接緒繭糸の太さだけ飛躍する太糸繰糸向きの繰糸といえます。ブラタク製糸（ブラジル）の生糸は織度感知器の管理がよく行われ、生糸荷口の織度偏差は 0.8 デニール以下の太さむらのよい生糸といわれています。

日本生糸も終戦直後の定織生糸の織度偏差が 1.8 デニールであったものが、定織自動繰糸機が普及した昭和 35 年ごろの生糸検査所受検荷口全体の織度偏差は 1.3 デニールと減少し、以後年毎に偏差は縮小し、昭和 50 年以降にはさらに 0.8 デニール以下へと、ブラタク製糸の成績に近づいてきました。

特に感知器管理や糸故障管理のよい日本の定織管理工場では、生糸織度偏差 0.5 デニール以下の工場も出現してきました。

◇生糸節成績の推移

小節成績は原料繭の影響が強く原料繭の繭検定成績の向上により、生糸検査項目から除去されるなど、変化があるので節成績と繰糸技術から除く必要があります。定織自動生糸の節成績は、ずる節、大中節に力点が移ります。繰糸工程の繭移動、トビツキ切断による糸故障の減少から煮熟繭は硬目煮繭に移り、定織繰糸は節成績を向上させました。

◇稼働繰糸機台数の年次別推移

繰糸機の変遷です。糸歩・能率・品位の向上をもたらした定織生糸により、定粒生糸は昭和 39 年には統計から外され、日本生糸は定織自動繰糸機の時代に入りました。

定粒繰糸法を含めた繰糸法の詳細については蚕糸科学研究所出版の「製糸技術検討会」による「よい糸づくりのための煮繭技術（2012）、繰糸技術（2013）、セリシンと製糸精練技術（2014）」の各著書を参照されたい。

第Ⅱ章 最古の絹出土 一羅一

世界最古の絹糸を編み結びした出土品「羅」に、人と絹の係わりの跡を尋ねたいと思います。

1. 五千五百年前の絹網

一千九百八十一年より八十七年にかけて、中国河南省青台村新石器時代第七層（紀元前3,500年-同3,300年）の遺跡調査で、最古の出土絹といわれる編物「羅」の残片が出土しました（図2.1）。高漢玉らの報告によると、原糸は、横断面の三角形状に始まり絹糸フィブロインの特性を示し、羅は、絹糸（練糸）を並列して束ねた無撚りの太糸づくりとのことです。また羅は、図2.2、2.3にみられる隣り合うタテ糸の絞り結びによる四角な目のある網で、絳（深紅色）の先染め品とのことです。

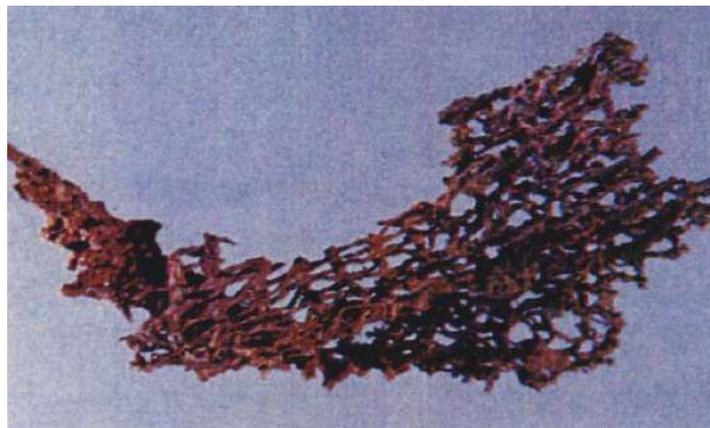


図2.1 五千五百年前の初出土の絹(羅) (中国絲綢通史)



図2.2 吊糸式編造り (紡織科学技術史)

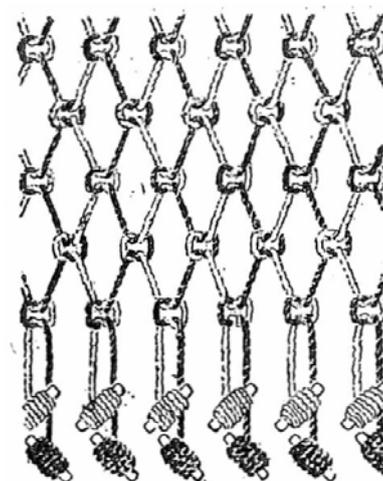


図2.3 原始羅の編み結び図 (紡織史話 P113. 上海)

出土品を技術的に見ると、五千五百年もの昔、繭を煮て繭糸相互の接着力を弱める煮繭法、繭殻の糸層からの繭糸抽糸法、繭糸表面の接着セリシンの除去法（精練）、鉍石から染料を採取する顔料の精製法、染色法、網み結び法といった一連の技術がすでに社会に定着していたらしい、驚くべきことを伺わせます。

2. 羅の使い道 ー狩猟具ー

難しい編み結びの羅を古代人が製作したいわれを尋ねたいと思います。

(1) 中国の記録 ー一網打尽の薄網ー

中国最古の辞典『説文解字』(西暦 122 年)は羅を「あみがしら」に分類し「糸をもつて鳥を罾するなり。網に従い維に従う」と狩猟具の一つとしています。『紡織史話』は、

羅は遠い狩猟時代、小鳥や動物を捕まえるために絹糸で同じ四角の編目に編んだ網をいう。雀などの小鳥が飼を啄む場所へ鳥好みの飼をまき、補足用の羅を張り、草むらに潜み、小鳥が集まったところを見計らって一斉に「らー！」と大声をあげる。鳥が驚いて飛び立ち羅の網目に足を掛け逃げられないところを一網打尽に捕まえる (図 2.4)。

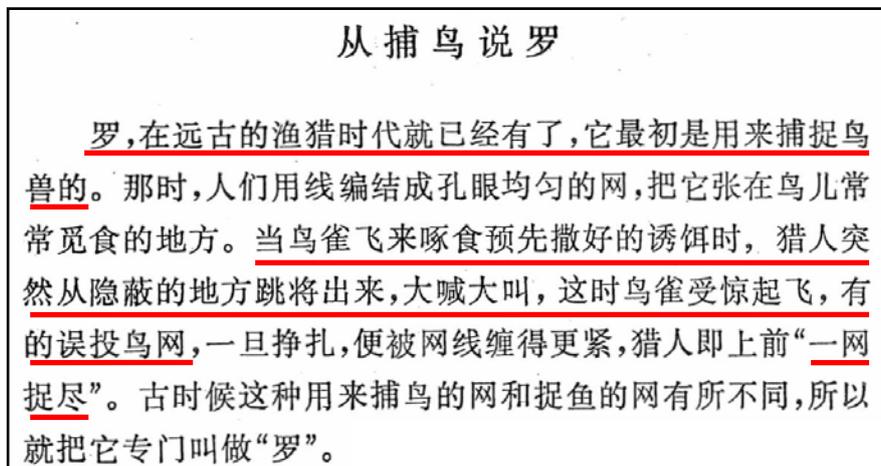


図 2.4 羅は古代の狩猟具(紡織史話・上海 P. 112)
嶋崎昭典(2011). 糸の街岡谷. みやび企画 P. 1-154 参照

と記しています。また

羅文字は絹糸(糸)づくりの網で小鳥を好捕する象形文(図 2.5)で、呼び名の「ら」は大声の「らー！」による。

と説明しています。食糧事情の厳しかった太古の時代、小鳥や小動物を効率よく捕獲する羅は大切な狩猟具だったようです。



図 2.5 羅の象形文(紡織史話. 上海. P122)

(2) 日本の記録 一かすみ網一

寺島良安著 (正徳 2 年、西暦 1712 年)
『和漢三才図會』には羅を「絹布類」と「魚獵具」の二カ所で説明しています。

魚獵具

羅は「和名 止利阿美」(日本名、鳥網)。羅を仕掛け、そばに罟おとりを置き、鳴き声に誘われた鳥が網の細糸に足の爪を引っ掛け逃げられないのを捕まえる。

と説明しています(図 2.6)。また網かけた羅の図と一緒に細長い棒の先に羅の網袋を着けた、いまの虫捕網(罎ひつ)を併記し「飛んでいる小鳥を捕える網」と説明しています。また兎捕りにも使われたようで「うさぎ網」ともいうと述べています。

白川静(1984)の『字統』(図 2.7)は『説文解字』や『和漢三才図會』を引用し「羅はかすみ網のよう張りめぐらすもの」と説明しています(図 2.8)。日本でも羅は小動物の効率よい狩猟具だったようです。

(3) 上流社会の高級夏物衣料

一千九百七十六年、河南省安陽県の殷代の女性墓から、いまから三千二・三百年前の四経絞素羅かなんしやうあんようけん いんだいというタテ糸四本が互に絞りあい、ヨコ糸で網目を固定したS撚り生糸づくりの技術的に高度な機織はたおりの羅が出土しました(図 2.9)。小動物捕獲具にはぜいたくな、手の込んだ、女性好みの優れた感性に込められた羅でした。



図 2.6 日本の羅 (和漢三才図會 P335, P357)

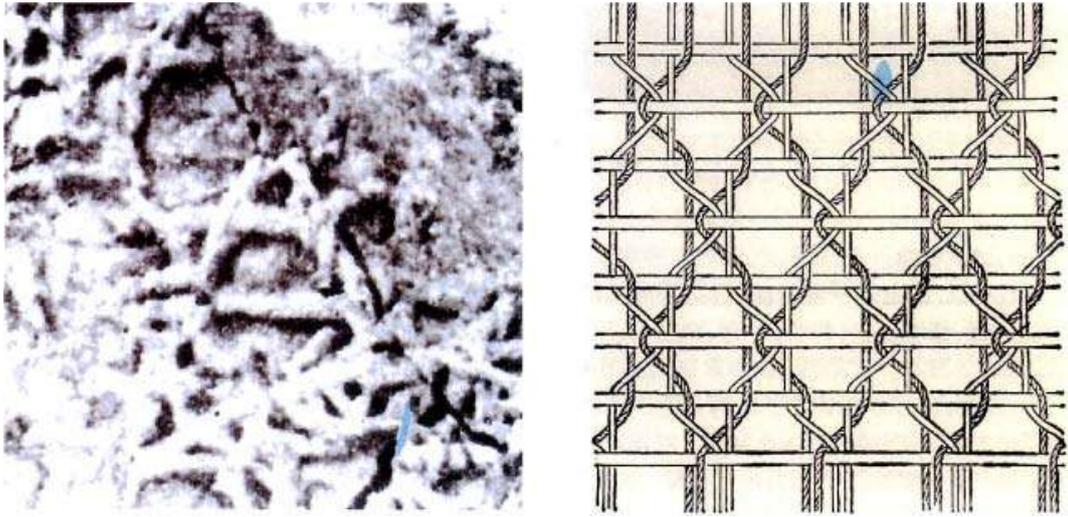


図 2.9 四タテ織り素羅出土品局部と構成図（趙豊、『中国絲綢通史』P. 60）

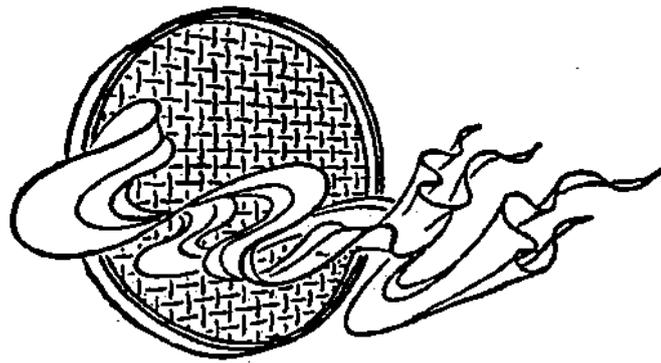


図 2.10 絹篩の出現(紡織史話. 上海. p. 112)

第三章 馬王堆漢墓出土の素紗襌衣

一千九百七十二年七月、中国新華社は一月十四日から六十日間にわたる困難な発掘を行った長紗市馬王堆一号漢墓の成果を国の内外に公表しました。弾力のある女性の出土と二千年以上前の上流社会の生活を現物で伝える一千余点の保存の優れた副葬品は「北京原人以来の一大発見」といわれ世界の注目を集めました。(侯良編著 (1990)、神奇的馬王堆漢墓・中山大学出版)。

副葬品中の軽く薄く方形の織目のある生糸づくりの「素紗襌衣」(図 3.1) は、世にも稀な珍品で「薄きこと蝉翼の如く 軽きこと烟霧の若し」とうたわれた薄絹の初出現と伝えられています(図 3.2)。ここでは古代人のそうした薄絹に寄せた跡をたどりたいと思います。



図 3.1 素紗単衣 (湖南省博物館)

1. 素紗襌衣生糸の生産推測

素紗襌衣は撈み織りが作る方形の空隙が基盤目状に配列され薄く透き通った生絹の単物で、二枚出土しています。素紗の調査報告から原料繭性状や繰糸状況の逆推定を試みません(図 3.2)。

薄如蝉翼的素纱禅衣

马王堆汉墓出土的素纱禅衣，是一件稀世珍品。这种衣服出土前放在一个大衣筒里，一共有两件，衣长128厘米，袖长190厘米，重量仅有48克，另一件是49克。50克为一市两，所以两件衣服都不足一两重，如果把袖口和领口镶的锦边去掉，我想可能只有半两重了。所以上海纺织研究院的一些丝绸专家看到后十分惊喜。他们认为其轻薄程度可以和现代生产的高级尼龙纱相媲美，古人这样形容这种衣服：“薄如蝉翼、轻若烟雾。”过去我们没见到过实物，说不清楚它是一种什么样的丝织物，现在亲眼看了，才知古代文人的描述恰到好处。

图 3.2 素纱单衣 (侯良編著(1990). 神奇的馬王堆漢墓. P. 27. 中山大学出版社)

身丈 128 センチメートル. 袖全長 190 センチメートル. 重さ 48 と 49 グラム. 飾の錦を除くと禅衣一着の重さは半分の 24 グラムの軽量衣. “薄きこと蝉翼の如く、軽きこと烟雾の若し” 注. 引用文献は馬王堆漢墓と略.

(1) 織糸は繭十粒合糸の定粒生糸

中国は戦国時代から秦漢にかけて蚕糸技術が進歩し、長紗地方は桑の木を一步の間隔(1.659メートル)で植樹した桑園で揃った繭を生産する地帯でした。繭糸の織度は0.九六デニールから一.四八デニール(糸の長さ9,000メートルの重さ1グラムの糸を1デニールと定義)で、現在の繭糸の半分以下ほどの細糸でした。織糸(生糸)の平均織度は10.2から10.3デニールで、繭糸十本合わせの定粒生糸であることを窺わせます(図3.3)。

法来栽培优良“黑鲁桑”品种的方法。桑与桑距离为“率一步一树”。这个时候，家蚕的品种也得到了改良，据说已能养“四眼二化蚕”了。正是由于栽桑、养蚕技术的改进和提高，才可能产生高质量的蚕丝。有些丝织品通过切片投影和X射线衍射等方法鉴定，证实所用原料全是家蚕丝，因为丝纤维的纤度为0.96—1.48旦(每9000米长的单丝重一克为一旦)。单丝显微实测截面面积为77—120平方微米，说明蚕丝极细。这一切都足以证明当时长沙地区不仅桑叶质量有了提高，而且养蚕技术已大有改进，否则不可能生产出这样高质量的蚕丝。

图 3.3 素纱单衣原料繭糸の特性 (侯良編著(1990). 馬王堆漢墓. P. 29)

注: 旦. デニール. 長沙地区. 当時桑園され良繭生産.

繭糸織度 0.96-1.48 デニールで現在の太さ 2.0-3.0 デニールの半分以下の細糸.

(2) 紗は薄く透き通った生絹

紗はヨコ糸一本の打ち込み毎に隣り合う二本のタテ糸を捻り、左右その位置を交代し、この部分で搦み四角の碁盤状の空隙をつくる生絹です(図 3.4、3.5)。織密度はタテ・ヨコ共に一センチメートルに生糸六十二本で光の透過度七十五パーセントの薄粗・編織の生絹です。

しゃ(紗, Plain gauze) ①JIS用語図「2本の経糸が緯糸1本ごとにモジリ目を作る組織の織物で、搦み織の1種」。②縞(オリモノ) 経緯糸は生糸を用い、紗組織に織上げた透し目のあるもの。緯糸の打込1本毎に、相隣接する経糸を捻じり、左右その位置を交代して緯糸と組織させ、経糸はその交代の部分で搦むもの。緯糸1本打込む毎に2本の経糸を交叉させたものが多く、夏の衣服として用いられる。

図 3.4 紗の定義(井上孝編(1940). 現代繊維辞典. センイジャーナル(株).)

(3) 禅衣は重さ五十グラム以下

二枚の禅衣(図 3.1)は裏地のない一重物で背縫から裾までの長さ、身丈^{みたけ}一百六十と一百二十八センチメートル、重さ^{せぬい}四十八グラム、^{すそ}四十九グラムの、驚くほどの軽さで、さらに襟口、袖口の錦の飾り^{えりぐち}を除くと、半分の二十五グラム前後の重さだろうといえます。衣装各部の寸法を表 3.1 に示します。

素紗禅衣の出土は、このように繰り繭十粒の定粒生糸を用いた、等しい方形の織目をもった機械織りへと紗織り技術の進展したことをまたうかがわせる、貴重な情報を与えています。

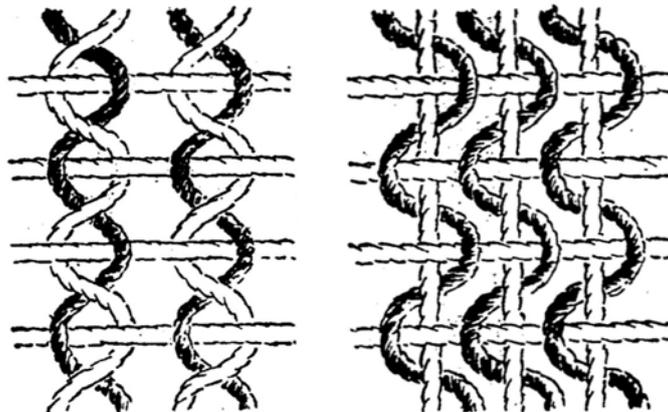


図 3.5 原始絞紗法. 紡織史話(1978). 114 頁

表 3.1 素紗単衣各部位の尺寸表(単位センチメートル).

(資料出所は、湖南省博物館・中国科学院士考研究所編(1973). 長沙馬王堆一号漢墓上集. 文物出版社. 北京) 注. 引用文献は長沙馬王堆一号漢墓上集と略.

番号	名称	身長	通袖長	袖口寛	腰寛	下裾寛	領縁寛	袖縁寛	各注
329-5	素紗単位	160	195	27	48	49	7	5	重 48 克
329-6	素紗単位	128	190	30	49	50	5.5	5.5	重 49 克
329-7	白絹単位	140	232	25	50	75	20	32	

2. 錦と紗 —花嫁衣装の伝える婦人の徳—

錦は天然色模様の精美・重厚な絹織物、紗はその豪華さを押える薄絹で、二つ相まって花嫁衣装は嫁ぎゆく婦人の徳を伝えているといえます。

(1) 錦

漢代錦は、必要な色糸を重ねてタテ糸一筋に組みこみ、製織過程で必要な色糸を引き上げて表に出し、他の色糸はその裏に隠して織り上げるタテ錦です。後漢の『釋名』は、

錦は金也。之を作るに功を用いる重し。その価金の如し。故にその制字帛と金に従う。

と錦は金と同じ重さで取引され、上流社会や国間の貴重な贈り物で、社交会で注目を浴びる存在でした。

(2) 花嫁衣装はファッションの先駆け

錦は中国の春秋時代(西暦前 830-同 403 年)ごろから織られていたようで王侯貴族の花嫁衣装の必需品だったようです。

衛の莊公(西暦前 757-同 735 年)が齊から美しい姜姫を迎える輿入れの様子をうたった『詩経』に『碩人』の詩があります(図 3.6)。

豪華な錦の花嫁衣装に薄く透き通った褌の衣を掛け大勢の供に付き添われ姫の一行が織りの盛んな衛の国に向かう詩です。『毛伝』はそれを補足し、

譚公は維れ私なり	邢侯の姨にして	東宮の妹にして	衛侯の妻にして	齊侯の子にして	錦を衣て褌の衣をきる	碩人は其れ碩く	碩人すぐれたおんかた
----------	---------	---------	---------	---------	------------	---------	------------

図 3.6 花嫁衣装はファッションの先駆け (吉川幸二郎注. 詩経国風上. P24-26)

婦人の徳は盛んにして尊し。嫁する時には則ち錦衣に褰襜を加う。

と説明しています。婦人の徳は美しさや教養の高さを抑え奥床しさを示すもの。それを形に表す花嫁衣装は絢爛豪華で重厚な錦を着、その上に薄い打ち掛けを装い、錦の豪華さをかすかに透かしてみせるものでした。

錦と紗の演出する花嫁衣装に、衣装に思いを託すファッション心理の先駆けを見る思いがします。

3. 古代技術は戦俘血涙の結晶

中国は夏王朝から春秋時代を奴隷時代（西暦前 21 世紀-同 476 年）と呼び、諸産業が顕著に発展した時期といます。古代技術を代表する錦を『説文解字』は「襄邑の織文」と述べています。いまの山東省の西北から河南省の東北一帯を占める衛国は平原沃土に恵まれ農業、糸織業が発達し、特に襄邑中心の錦は「衛錦」の代表といわれ宮中御用を受けていました。

それらの生産は戦俘（戦争捕虜）の奴隷の労働によっていたようです。彼らの生命は奴隷主に握られており明日の命の保証はなく、彼等は昼夜を分たぬ厳しい皮鞭に血涙を流す労働に耐え錦織りに励むのでした（図 3.7）。そのなかで、他の人に出来ない技術のコツを命をかけて取得し、コッソリ我が子に伝えるのが親が子にできる唯一の方途でした。そうした父子相伝の蓄積のうえに古代技術は構築されたと伝えていきます。華麗な錦の底流にある古代技術の理解に戦俘血涙の悲史の大切さを学びました。

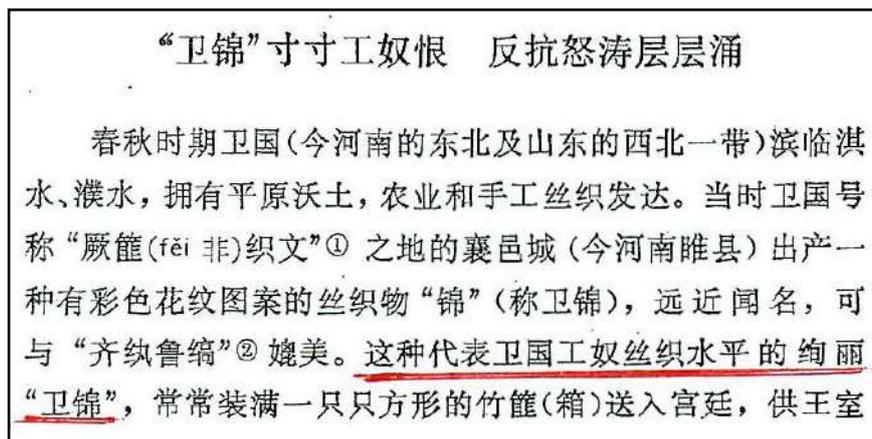


図 3.7 衛国錦一寸一寸に隠る工奴の涙. 錦は戦俘（戦争の捕虜）の皮鞭に耐え生産される奴隷血涙の結晶でした（紡織史話. 上海. P179）

第IV章 千古絶唱の璇璣図

五胡十六国の一つ前秦苻堅王朝で才女とうたわれた蘇蕙（西暦 359 年-386 年）は文武に秀でた若き秦州刺史（長官）となる竇滔と結ばれ、秦州（現甘肅省天水市）で幸せな日々を送るのでした（図 4.1）。しかし「歌舞の妙、右に出る者なし」といわれた趙楊台を匿っていることが知られ、家庭は破れ、十七歳の蕙は嫉妬心に苦しみ悩む日を送るのでした。時が過ぎ反省心も加わり、幸せだった思い出や愛惜の念をこめた八百四十字の回文体詩を五色の錦に織った「璇璣図（図 4.2）」を遠く離れた襄陽の夫に送るのでした。璇璣図を一見し、妻の苦しい胸中を察し迎えの駕を届けるのでした。蕙が着いた時、夫は東晋との大戦に出陣したあとで竇滔はそこで戦死するのでした（一説）。滔・蕙夫妻十二年の哀歎を告げる璇璣図は千古絶唱の名作といわれ、則天武后、李白、白居易、蘇軾等多くの著名人に研究され受け継がれるのでした。その璇璣図が中国絲綢織綉文物複製中心で復元され岡谷蚕糸博物館に収蔵されましたので、少し立ち入って紹介したいと思います。

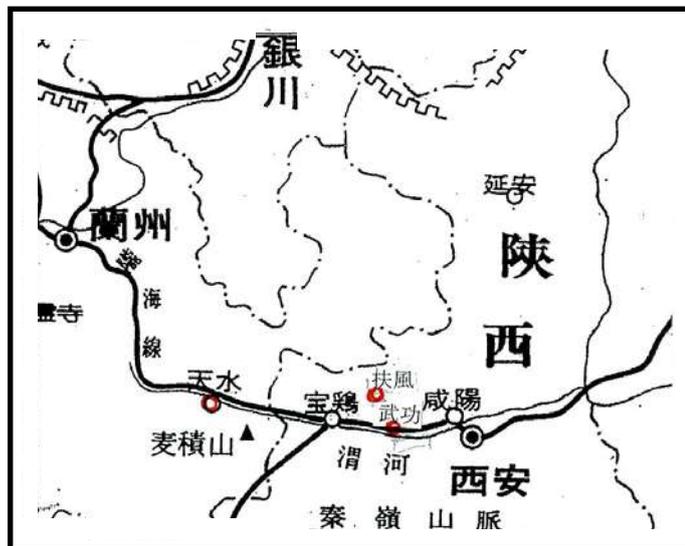


図 4.1 甘肅省天水市の位置図

1. 蘇蕙と竇滔の生い立ち

璇璣図の作者蘇蕙は、中国長安（西安）の近く、いまの陝西省咸陽市武功県の人で陳留（現河南省洛陽市）の令（長官）蘇道質の三女として前秦永興三年（西暦 359 年）出生。生れつき資質聡慧で三歳で文字を学び、五歳で詩、七歳で画、九歳で刺繍、十二歳で織錦を学び、及笄の年（髪を長くし簪をさす、女子十五歳）を幸せに迎えた容姿豊艶の美しい女子でした（図 4.3）。

竇滔は、祖父の真が右將軍を務めた武門の家柄で父朗の次男として蘇蕙の古里に近い、いまの陝西省扶風県の出身で、幼いときから志を立て文を学び武を練り「人柄優れて傑

出、四書五經に通じ、文武を兼ね備えた美丈夫^{びじょうふ}」と伝えられています。前秦皇帝苻堅は天下統一を志し、部下の才覚を重視し、竇滔を建元十一年（西暦 375 年）秦州刺史に任じました（図 4.4）。

仁智懷德聖虞唐眞妙顯華重榮章臣賢惟聖配英皇倫匹離飄浮江湘津
 傷嗟情家明葩榮志庭蘭亂作人讓佞奸凶吉我忠貞桑凶慈雅思恭基河
 慘嘆中無鏡紛爲篤明難受消源禍因所恃恣極驕盈檢頑孝和淑自爲隔
 懷懷傷君朗先誰終榮苟不義姬班女婕妤辭輦漢城薄浸休家貞記孝塞
 慕所路房容珠感誓城傾在戒后孽變趙氏飛燕寔生景讓遠敦貞敬殊
 增離曠韓帥懼思穹焚猶炎盛興漸至大伐用昭丹青昭愚謙色節所是山
 憂經遐清華英多蒼形未慎深慮微察遠禍在防萌西滋蒙疑容持從梁
 心荒淫忘想感所欽岑幽巖峻嵯峨深淵重涯經網羅林光流電逝推生民
 堂妃蘭飛衣誰追何思情時形寒歲識凋松愆居歎如陽移陟施爲祗差士
 空后中奮袞爲相如感傷在勞貞物知終始咎獨懷何潛酉不何誰神無感
 惟自節能我容賢將自孜孜君想願衰改華容是爲女賤矚目日激與通者曠
 思興厲不歌治同情寧孜孜夢仁賢別行上念誰賤鄙駢白無憤將上採悲
 咏風焚嘆發觀羽繩龍旆容衣詩情明顯怨哀情時傾英殊衰殊身節菲路
 和周楚長雙華宮憂虎彫節始璇璣圖義年勞歎奇華年有志飭忘葑長
 音南鄭歌高流微殷繁華觀曜終始心詩興感遠殊浮沉時盛意麗哀遺身
 藏邵衛咏齊曜清多文曜壯顏無平蘇氏理在憂歲異浮惟必心華惟下徵
 摧伯女志興榮商患藻榮麗充端此作麗辭日思暮世異逝條遠榮感骸憫
 悲窈河遐頌翠感生盟漫丁寃詩風興鹿鳴懷悲哀誰遊倏無一俯憂作已
 賢窈廣路人祭我艱是漫是何桑翳感孟宣傷感情者頽然盈体仰情者處
 發淑思遙其感情惟憂何恨生時盛昭業傾思永我我流君不忠容何成猶
 西姿歸遙頌蕤悲苦懷思苦我章微恨微玄悼嘆感知沙馳虧離儀皆辟房
 秦王懷土思舊鄉身加象愁悴少精神遐幽曠遠離鳳麟龍昭德懷聖星入
 商遊桑鳥揚仇傷榮身我乎集殃愆辜我因備嘗苦辛當神飛文遺分歸賤
 絃西翳雙激好摧君深日潤浸愆思罪積愆其根難尋所明輕殊孤華鴈爲
 激階陰巢水悲容仁均物品育施生天地德貴乎均勻專通身榮妾殊翔女
 楚步林燕清思發離濱漢之步飄飄離微隔喬木誰陰一感奇節散聲應有
 流東桃飛泉君歎殊心改者感曙親聞遠離殊我同衾志精浮光離哀傷柔
 清湘休翔流長愁方禽伯在誠故遺舊廢故君子惟新貞微雲輝群悲春剛
 琴芳蘭凋茂熙陽春牆面殊意惑故新霜水齋潔志精純望誰思想懷所親

図 4.2 璇璣図（三才図會）出所。諸橋徹次（1958）. 大漢和辞典

前秦建立于公元 351 年。苏蕙生于这个政权建立后的第九个年头，即前秦永兴三年（公元 359 年）。当时社会相对稳定。据梁福义《法门寺纪事》中说，苏蕙从小天资聪慧，仪容秀美。她 3 岁学字，5 岁学诗，7 岁学画，9 岁学绣，12 岁学织锦；及笄之年，已是姿容美艳的书香闺秀，提亲的人络绎不绝，但所言皆庸碌之辈，无一被她看上。大约前秦苻坚建元十年（公元 374 年）左右，苏蕙 16 岁时，跟随父亲西游周原名刹阿育王寺（今陕西扶风县法门寺），在寺西池畔看到一位英俊的青年，只见他仰身搭弓射箭，弦响箭出，飞鸟应声落地；俯身射水，水面飘出带矢游鱼，真是箭不虚发。池岸上则见一柄出鞘宝剑，寒光闪闪，压着几卷经书，苏蕙顿生仰慕之心。后由双方家长作主，俩人结为夫妻。

図 4.3 蘇蕙の生い立と結婚（図 4.3～図 4.7 の出所。李蔚(1996) . 詩苑珍品璇璣図。東方出版。北京）主旨。本文中に記載

与苏蕙结褵的青年，姓窦名滔，出身门第也很高。窦滔的祖父窦真[㊦]系右将军。父亲名朗。滔系窦朗的第二子。窦滔家在扶风郡美阳县（今陕西省扶风县）周秦坡。他自幼立志向学，经常来阿育王寺院内习文练武。由于刻苦努力，终于成为一时人才。史载他“风神秀伟，该通经史，允文允武，时论尚之。”

図 4.4 蘇蕙夫竇滔の生い立ちの人柄

2. 新婚生活

蘇蕙十六歳の時（西暦 374 年）、父親は今の陝西省扶風県法門寺へ蕙を連れ名所見物に出かけました。池の端で飛ぶ鳥を射落し、池の魚を一矢で射とめる若い一人の美丈夫に心を引かれるのでした。両家の家長が相談し二人はその年結ばれ、滔の任地秦州（天水市）で新生活を送りました。天水市は二千年以上の歴史のある城下町で、ちょうど蘇州市に似た風格があり、街路樹に囲まれ古木天をつく、静かな「織錦台」が新居でした。幸せ一杯の生活、蕙の忘れ得ぬ思い出の一時期でした。しかし思いがけない事で一瞬にして家庭は崩れるのでした。夫滔は多才多芸、風流に富み、妻の他に「歌舞の妙、その右に出る者無し」といわれる趙陽台を愛して匿まうのでした。それが蕙に発覚し、苦勞知らずに誇り高く成長した十七歳の身には容認出来ず、夫を避け独り嫉妬心に苦しみ悩む日を送るのでした。建元十五年（379 年）、安南將軍に任ぜられ襄陽に赴くとき、蕙の同行を求めたが応じず夫は趙陽台を連れ赴任し、二人の仲は一層遠のくのでした（図 4.5）。

他，诏拜安南将军，接替梁成，镇守襄阳。
 滔赴任时，提出要苏蕙同去，苏蕙怒氣未消，不愿偕行。于是，滔只好携赵阳台前去。

図 4.5 蘇蕙夫妻の疎遠 夫安南將軍に出世. 蕙は不義の夫を避け同行を拒否.

3. 晋代回文詩織錦 一璇璣図一

時は過ぎ、蘇蕙に悔恨の思いが生まれ、それを回文詩に託し自らを慰めるのでした。

回文詩は、詩句の文字を碁盤目状に配列し、初めから読み下しても、終わりから逆読みしても平仄も韻も適う、詩の別体を指します。

蘇蕙は、そうして作成した二百余の回文詩を整理し夫に届けることを思い立ちますが、詩文は三言、四言、五言、六言、七言あり、句も四句、六句、十二句と様々でした。蕙はそれらを一行、一列二十九、合計八百四十一の各区画に一文字を配した回文詩体を五色の錦「璇璣図」に織り襄陽の夫に届けるのでした（図 4.6）。親しい人が難しい璇璣図の理解

を危ぶむと、蕙は微笑して無言。夫は一見して妻の長年の苦衷を察し、迎えの駕を送るの
でした。が、蕙到着の時、夫はすでに東晋との大戦に出陣した後で、しかもそこで戦死と
伝えられています。

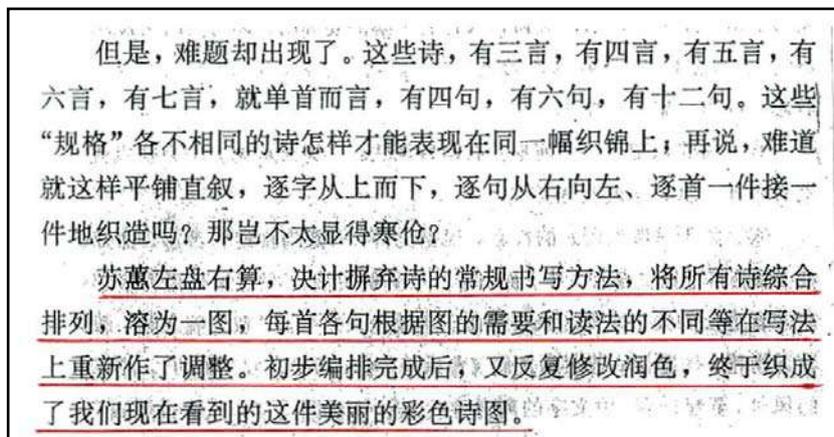


図 4.6 蘇蕙後悔し苦しい思いを回文詩に託す。

璇璣図の原物ははやくに散失しましたが『晋書・烈女傳・竇滔妻蘇氏』は「職錦回分施
図詩、詞焦凄惋、凡八百四十字」とあり、図中心の一区画は空であったことを伺わせま
す。一般に空区画に「心」を入れて八百四十一字の図も流伝しています。諸橋轍次 (1958)
『大漢和辞典』に八百四十一字の『三才図會』から引用の本文が示されています。近年の
璇璣図は中国の現代漢字なので、旧漢字の『三才図會』の璇璣図をここでは載せました (図
4.2)。

4. 回文詩

璇璣図から解読された回文詩数は李蔚 (1996) 『詩苑珍品璇璣図』の一万四千五首といわ
れています。それらの詩意の一端として、原文二行七列目の「游」に始まる三言十二区の
回文詩を図 4.7 に、詩意を次に述べます。

夫を想いながら西側の階段を降り東側の渡り廊下を歩む。美しい桃林に休み、
涼しい桑樹の陰に憩うも胸の苦しさは癒やされない。番の鳩は巢にこもり、燕
は天空に飛ぶ。清泉は緩やかに流れるも、時に激しい飛沫を揚げる。憤恨の情、
好悲こもごも君を思いて長し。ああ、愁嘆の思いおこり、心乱れ容姿また憔悴す。

と回文詩は蕙の哀愁の思いに満ちた文で埋まっています。憂いに沈む蘇蕙を哀れんで詠
まれた詩歌も多く、そのひとつ李白 (西暦 701 年-762 年) の樂府題「烏夜啼」を図 4.8 に、
また次にその詩意をのせます。

たそがれ時の雲のかかる城壁のあたりで、烏がねぐらにつこうと飛帰りカァカァと枝の上で鳴いている。機はたの前で秦川の女性が、夫を思い錦を織っている。織る部屋の緑の薄いカーテンは煙霧の如くかかる、女性はそれ越しに何ごとかを語る。織機織る手をとめて溜息をつきながら、遠く離れたいとしい人の身を思う。人気のない部屋のひとり寝に、涙は雨のように散る。

と伝えています。五色の糸で織られた蘇蕙と竇滔夫妻十二年の悲しい人生の璇璣図は、死をもって終わる中国千古絶唱の文学名作品といい伝えられています。蘇蕙は夫の後を追う自らの命を絶ったようです。享年二十七才でした。繊細で美しい艶のある絹糸があつて、はじめて織られる夫妻の悲しい一生を伝える千古絶唱の璇璣図でした。

游	西	階	步	東	廊	西階ニ游ビ東廊ヲ步ンテ
休	桃	林	陰	翳	桑	桃林ニ休ム陰翳ノ桑
鳩	双	巢	燕	飛	翔	双鳩ハ巢ニ飛燕翔ビ
流	泉	消	水	激	揚	流泉消シテ水激シク揚ゲル
仇	好	悲	思	君	長	仇ナス好悲君ヲ思イテ長ク
愁	嘆	発	容	摧	傷	愁嘆発シテ容摧傷ス

図 4.7 回文詩「君を思いて長し」（詩意は本文に記す）

獨	宿	空	房	淚	如	雨	獨宿空房淚如雨
碧	紗	如	煙	隔	牕	語	碧紗如煙隔牕語
機	中	織	錦	秦	川	女	機中織錦秦川女
歸	飛	啞	啞	枝	上	啼	歸飛啞啞枝上啼
黃	雲	城	邊	烏	欲	棲	黃雲城邊烏欲棲

獨宿空房淚如雨
 碧紗如煙隔牕語
 機中織錦秦川女
 歸飛啞啞枝上啼
 黃雲城邊烏欲棲

図 4.8 李白の樂府題「烏夜啼」
 （前野直彬注解（1980）. 唐詩選上. 岩波文庫）

第V章 幻の繩を尋ねて —内織りの自家用紬—

^{あしぎぬ}繩は、日本の史書に初めて登場した絹ですが、平安後期には歴史から名が消え幻の絹になるのです。ここではそうした繩の跡を史書に尋ね、絹文化の一面を眺めたいと思います。

1. 日本の史書に初めて記された絹 —繩—

最初の史書といわれる『古事記』には繩の記述が三カ所ありますが、振仮名は「きぬ」です（倉野憲司校注（1963年）. 古事記. 岩波文庫）。

(1) 山幸彦

一つは、^{うみさちひこ}海幸彦と^{やまさちひこ}山幸彦の物語です。兄の釣り針をなくした山幸彦が、その針を捜しに^{わたのかみ}海神の宮殿を訪れ、その^{とよたまひめ}姫、豊玉比売と結ばれます。その床は繩が八重に敷かれていたといえます。

^{みち}美智(あしか)の皮の^{たたみやえ}畳八重を敷き、亦^{またきぬたたみ}繩畳八重をその上に敷き、その上に^ま坐せて、^{もとり}百取の^{つくえしろ}机代の物を^{そな}具へ^{みあへ}御饗して、^{まぐはい}すなわちその女豊玉比売を^{まぐはい}婚せしめき。

(2) 弟橘昆売命

その二は、^{けいこう}景行天皇の御代、皇子の^{やまとたけるのみこと}倭建命が^{はしみず}走水（いまの浦賀水道）を渡ろうとしたとき、^{わたのかみ}渡神が浪をおこして進めません。后^{きさきおとらばなひめのみこと}弟橘比売命は皇子の^{みこと}命の身代わりに^{じゆすい}入水します。そのとき^{ひめのみこと}比売命は浪の上に^{きぬたたみ}繩畳を敷き、その上に身を投じられたとのことです。

「^{あれ}妾、御子に^{かは}易りて海の中に入らむ。御子は遣はさえし^{まつりごと}政を遂げて^{ふくそう}覆奏したまぶべし」とまをして、海に入りたまはむとする時に、^{すがたたみ}菅畳八重、皮畳八重、^{きぬ}繩畳八重を波の上に敷きて、その上に下りましき。ここに^{あらなみおのすか}暴浪自ら^な伏ぎて、御^え船得進みき。

(3) 仁徳天皇

その三は、^{にんとく}仁徳天皇のところでは、^{おうじん}父応神天皇の遺命で弟の^{うじのわきいらつこ}宇遲能和紀郎子が皇位につくのに反対した兄の^{おおやまもりのみこと}大山守命が兵をおこします。天皇側は山頂に^{きぬがき}繩垣を作り、偽りの^{ぎよくざ}玉座を設けて大山守命の軍を誘い平定するところです。

いくさ 兵 ひとを河の辺に伏せ、またその山の上に、きぬがき 縄垣を張り ひきまく 帷幕を立てて、いつは
とねり みこ て舎人を王にして…。

このように、『古事記』の語る縄は、高貴な方々の身边に使われるもので、しかも敷物と幕地といった厚地の絹をうかがわせます。

2. 古代絹の代表 ー縄ー

三世紀ごろの日本の生活を伝えるといわれる中国陳寿（西暦 233 年-297 年）の『魏志倭人伝』は、卑弥呼の時代（西暦 239 年）、日本も蚕飼を行い、真綿の縑（絹）、錦まで織っていたと伝えています。そうした古代の様子を縄を通し眺めてみます。

（1）日本書紀・続日本紀にみられる縄

最初の国史といわれる『日本書紀』（書記という）は、愛すべき古事記といわれる『古事記』より記録性に富んでいるが謎が多く、そのままのみにできないといわれます。しかし国体や政治に直接関係しない絹にかかわることはそのまま受け止めてよいかと思いません。神代から持統天皇（西暦 686 年）までを記した書記には、縄にかかわる事が二十七ヶ所あります。一方それに続く文武天皇（西暦 697 年）から桓武天皇延暦十年（西暦 791 年）までの『続日本紀』（続紀という）は、奈良時代の重要事項を隠すことなく書き並べているといわれます。そこには縄の記事が一百十四ヶ所あります。この数は、正税の稲の九十八より多く、絹、綾、羅などより段違いに多い数です（表 5.1）。このように、縄は古代特別の役割を担っていたようです。

表 5.1 日本書紀、続日本紀に見られる絹製品の件数

	綿	縄	絹	錦	糸	綾	羅	紬	合計
書紀	31	27	17	16	9	8	5	0	113
続紀	105	114	11	7	34	8	3	0	282

※ 昔は真綿を綿（生糸づくりの絹織物）といいました。

（2）縄は調貢絹織物の代表品

書記や続紀に表れる絹織物は税としての調貢品が多いです。物づくりに必要な道具や高

い技術を必要としない真綿と並んで繩の数は断然多く、両者は書紀で半数、続紀で八割を占めています。繩は真綿と共に各地で普通につくられ調として大量に納められた古代を代表する絹織物のようです（表 5.1）。

正倉院の聖武天皇（西暦 724 年-749 年）遺品中の繩の一センチメートル平方の織密度はタテ糸四十二本、ヨコ糸三十二本の粗いものからタテ糸五十四本、ヨコ糸四十五本の密なものまであり、絹織物との細粗差はないとのこと。ただ松本包夫氏によると「正倉院に調納されている八世紀の平織絹は、すべて「繩」と墨書されており、糸の太さや織密度は千差万別』とのことで絹が繩に一括されていた可能性があります。

3. 繩は古代の貨幣

古代の絹は、生糸作りの目の積んだ平織生絹を指し、繩は生糸にできない下繭を煮て一粒の繭から幾本もの繭糸を一度に紬き出し手撚掛けした太糸づくりの平織り絹を指しているようです。

(1) 繩の相場

書紀にみられる最初の繩は、推古天皇十一年（西暦 603 年）の冠位十二階の詔で、位階により染め分けられた繩を各冠に着けるところです。二番目は大化二年（646 年）正月元旦の改新の詔です。

旧の賦役を罷て而田之調を行。絹、繩、絲、縣は郷土の出す所に随へ。田一町に絹一丈。四町にて疋と成す。長さ四丈。広さ二尺半。繩は二丈。二町で疋を成す。長さ広さ絹に同じ。

この詔から繩は生糸の半値であることが知られます。それが大宝元年（701 年）の令では「調として正丁一人、絹、繩ともに長さ八尺五寸、幅二尺二寸」と絹と繩が同格になります。

(2) 繩は貨幣

手紬の太糸づくりの繩は、丈夫で皺になり難いので、貴族の普段着や官人の出勤着に使われていたようです。その他の用途は表 5.2 のようで、恩賞・布施・賑給（庶民への施）といった御下賜品です。王侯から一般官人の俸禄を定めた初めての給与基準といわれる和銅四年七月二十三日勅の支給は繩が中心です。その実態は、例えば青木和夫氏による遣唐使の手当表（表 5.3）にみられるようです。古代の繩は、今の貨幣の役割を果たしていたのです。

このように、繩は大化の改新（645 年）に始まる日本の中央集権体制を陰で支え、古代国家の形成に大切な役割を果たすのでした。

表 5.2 日本書紀, 続日本紀に見られる絁の用途

	贈答	恩賞・下賜	布施・賑給	政策	合計
書紀	2	14	8	3	27
続紀	12	74	12	16	114

表 5.3 遣唐使の構成と手当 (*印は他に夏服・冬服の現物支給がある)

	職 名	絁 綿 布		
		疋	屯	端
使人	大 使 (長 官)	60	150	150
	大 副 使 (次 官)	40	100	100
	判 官 (判 官)	10	60	40
	録 事 (主 典)	6	40	20
	史 生 (書 記)	4	20	13
	雑 使 (庶 務)	3	15	8
	僊 人 (従 者)	2	12	4
船員	知乗船事 (船 長)	5	40	16
	船 師 (航海長?)	4	20	13
	柁 師 (操 舵 手)	3	15	8*
	挾 杪 (柁師配下)	2	12	4*
	水 手 長 (水 夫 長)	1	4	2*
	水 手 (水 夫)		4	2*
	主 神 (神 主)	5	40	16
	卜 部 (主神配下)	4	20	13
	医 師 (医 者)	5	40	16
	陰 陽 師 (易・天文学)	5	40	16
	画 師 (画 家)	5	40	16
	射 手 (射 手)	4	20	13
	音 声 長 (?)	4	20	13
	音 声 生 (?)	3	15	8
	船 匠 (大 工)	3	15	8
	玉 生 (技 師)	3	15	8
	鍛 生 (同 上)	3	15	8
	鑄 生 (同 上)	3	15	8
細 工 生 (同 上)	3	15	8	
訳 語 (唐語通訳)	5	40	16	
新羅・奄美等訳語	4	20	13	
随員	留学生・学問僧	40	100	80
	僊 徒 (従 者)	4	20	13
	請 益 生 (短期留学)	5	40	16
	還 学 僧 (帰 朝 者)	20	60	40

4. 絁と綿紬 ー内織絹ー

(1) 絁の文字

後漢の辞典『説文解字（西暦 122 年）』には「絁」の文字がありません。魏の張揖編の『廣雅釋器』に「細い」の意に絁が使われていますから、西暦二百年ごろに絁の文字はつくられたのかも知れません。宋の徐鉉らの『校定説文解字』（986）は「纏」の注に「俗にいう絁なり」とあります。『説文解字』に「纏」を求めると「粗緒也」とあります。煮繭から幾本もの繭糸（粗緒）を抽きだした太糸で織られた粗絹を指すといっています。

(2) 「あしぎぬ」の呼び名

絁の呼び名は「悪しき絹」によるといわれます。倉野憲司校注『古事記』は「絁」でした。新訂増補国史大系の『日本書紀』の冠位十二階の詔は「絁」、大化改新の詔は「絁」です。また同じ大系の『延喜式』（西暦 927 年）「神祇一」に初めて（あしぎぬ）のルビが付きませんが、続く「神祇二」は（きぬ）、「主計上」で再び（あしぎぬ）となっています。このように西暦九百年代に（あしぎぬ）の呼び名が出てきますが、固定しておらず『延喜式』は項目によりまちまちです。承平年間（西暦 931 年-938 年）源順編『和名類聚抄』には、絁を「阿之岐沼」と万葉仮名で記しています。絁は、中国読み「し、Shi」が（きぬ）から（ふとぎぬ）さらに技術の進んだ平安初期に「悪し絹、あしきぬ」となり今日に至ったようです。

(3) 絁の歩み

大化の改新で「調納はそれぞれの国の特産品」とされた絹製品も、『延喜式』では「東国十ヶ国の籠糸国は絁、中糸国は絹、上糸国は生糸を調納」と指定しています。そのなかで「北九州六国は綿 絁」と新たに指定し絁の文字が初めて記述されています。煮繭を開繭して紙状に広げ重ね合せた真綿から絁がれる太糸の絁糸は、セリシンがかなり除かれ柔らかく温かく艶あり、絁の丈夫さと精練された絹（帛）の柔らかさと光沢を兼ね備えた皺になり難い絹織物でした。一千九百五十六年、国の無形文化財に指定された茨城県結城絁の由緒書は「奈良時代の常陸国久慈の絁を起源とし、鎌倉時代の常陸絁を経て、江戸の慶長年間（西暦 1596 年-1615 年）から結城絁と呼ばれるに至った」と記しています。綿絁は絁と呼ばれ商品として発展し、絁は調納制の弱体化と共に歴史記述の世界からこぼれ落ちるのでした。

戦前は、年頃の娘さんのいる農家では、はや目に屑繭を集めて手紬ぎの絁糸を抽きだし繰りため、冬の手仕事に絁や斜子を織って、娘の嫁入支度を整えておくのは祖母や母親の務めでした。「内織り」と呼ばれる、自家生産の絹織物は丈夫でいつまでも使えました。嫁に行く娘の母親達の思いが込められている、また母となっても着るたびに、ふっと実家や年老いた母の面影が頭をよぎる、そうした親子のきずなみたいな役を演じるのも内織り

紬の縄でした（図 5.5）。

外国貿易の窓口であった九州地区に始まった真綿原料の綿紬は四国・中国地方から近畿地区へと生産基盤を拡大し発展するのでした。一方紬は、その呼び名「悪し絹」が示すように商品の地位を綿紬にゆずり農家の自家生産品として内織^{うちおりあしぎぬ}紬として親子の心の絆となって絹文化を伝えてきた、その分岐点は平安末頃のようにです。



図 5.1 冬の夜なべ（加藤大道）

第VI章 染色文字 一絹染めで定義一

赤、青、黄、紫、朱と中国の染色名は一文字表示です。日本の呼び名は、^{あおくちば}青朽葉、^{さびしゅ}錆朱、^{からくれない}韓紅などその数二千余种あり、「^{わび}侘、^{さび}寂に通じる見立の美学」と伝えていきます（浦野範雄（1992）：日本伝統の色見本帖 日本の色と紋様。毎日新聞社）。自然界の多彩な色は、古代人の審美観を助長させ、人と絹の精神的関わりを深める^{みずさきあんないにん}水先案内人の役を果たしたようです。ここでは幾つかの例を通してその様子を見たいと思います。

1. 赤は命の色

ロシア、イルクーツク市郊外、二万年以上前の^{たてあな}竪穴式住居跡の凍土から出土した男子は赤鉄鉱の赤い砂を枕にしていたそうです。蘇生したときの血液にとの親心といわれています。中国でも^{さんちやうどうぶんか}山頂洞文化遺跡の洞窟から二万年近く前の赤鉄鉱の粉末と^{せきしゅ}石珠（玉）、^{じゅうが}魚骨、^{じゅうが}獣牙などで作られた赤色の装飾品が出土しています（図 6.1）。赤の^{がんりょう}顔料には赤鉄鉱のほかに朱砂がみられます。また、原始部落出土品の色は白、黒を除くとほとんどは赤（紅・朱）色で、それは赤が血液、太陽、火にみられる「命の色」によるとのことです（図 6.2）。旧石器時代の終わりころ、赤色は信仰心や、おしやれ感覚と結びつき人々の精神的文化生活との関わりを深めさせたようです。

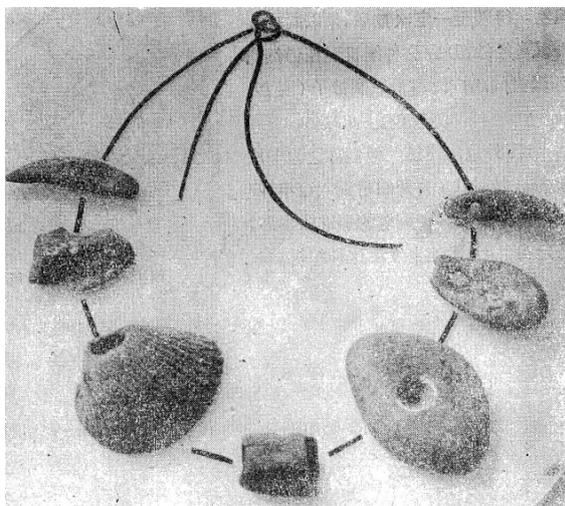


図 6.1 山頂洞人の赤色装飾品
（陳維稷主編（1984）. 中国紡織科学技術史. 科学出版社. 北京. 略陳維稷（古代部分））

第二节 最早用于着色的颜料

人类最早用于着色的颜料是矿石和炭黑，这是很自然的，因为它们是直观的有色物质，人类能直接地从自然界取得^①，不须经过复杂的处理就可使用。使人感兴趣的是，人类最早利用的矿石，几乎都是红色的。有人作过调查，在一些现存的原始部落里，除了黑和白以外，红是最先出现的色彩名。原始人对于红色给予特殊的注意，不仅是因为红色能给人强烈的、鲜明的感受，很可能与他们对太阳、火、血液（象征着生命）的崇拜有关。我国考古发掘中发现最早的着色颜料也是红色的，除了赤铁矿外，还有朱砂。青海乐都柳湾原始

図 6.2 最初の着色顔料

注 紅色は人々に強烈な鮮明な感覚を与えるが、それは太陽、火、血液の命の色を表す信仰心に関わる色彩である。古代出土品には赤鉄鉱、朱砂での着色品が多い。

2. 社会的要請と染色技術

武力によらずに徳をもって天下を治めるのが理想の政治といわれます。中国の黄帝は三皇五帝の神話伝説の時代、文字を創設し、暦、度量衡、貨幣に舟、車などを開発し礼節をもって天下を治めたので中国の祖先神といわれ崇められています。礼節の世界では下位の人が上位を超えることは許されません。ひと目で見分けできる色は、階級の識別色として古代社会を律する大役を担うのでした。

(1) 礼の社会 —礼記—

中国の「礼」を記した『礼記』の玉藻第十三には、例えば「玄冠に朱組の纓は天子の冠なり、緇布の冠にくわいずる・・は諸侯の冠なり」と冠の定めがあります。黒い冠に朱の絹糸の長く垂れた組紐をつけたのは天子の冠。赤黒の麻布の冠に色糸の冠紐を長く垂れ下げた冠は諸侯の冠と記し、冠の色や冠に着けた組紐の色で地位を示しています(図 6.3)。さらに官人には服飾品から小物に至るまでの身分による微妙な差の色調が指定されています。下位が上位を超えることのできない礼の社会の厳しさから、色合いを峻別する固有の名前が定義されその要求に応えうる染色技術の存在を『礼記』はまた伝えています。

(2) 殷代三原色の原理を認知

いまの漢字の姿を伝える最も古い文字は殷代の甲骨文(西暦前 1300 年-同 1100 年)の解説文一千七百文字、また青銅器に鑄造された多くの金文(西暦前 1066 年-同 221 年)があります(阿辻哲次(1989): 図説漢字の歴史、大修館)。その甲骨文にはすでに青・赤・黄・緑などの染色文字が、また金文には紅の文字がみえます(図 6.4)。さらに染色文字の語釈を『説文解字』に求めると(図 6.5)、

- 緑 帛(練絹)を青と黄で染めた帛の色
- 紫 帛を青と赤で染めた帛の色
- 紅 帛を赤と白で染めた帛の色
- 紺 帛を深い青と明るい赤で染めた帛の色

○始冠緇布冠。自諸侯下達。冠而做之可也。玄冠朱組纓。天子之冠也。緇布冠纓綏。諸侯之冠也。玄冠綦組纓。士之齊冠也。侯之齊冠也。玄冠綦組纓。士之齊冠也。

○始めて冠するには緇布冠もてす。諸侯より下に達す。冠して之を做つるも可なり。玄冠に朱組の纓は天子の冠なり。緇布の冠に纓綏は諸侯の冠なり。玄冠に丹組の纓は諸侯の齊冠なり。玄冠に綦組の纓は士の齊冠なり。縞冠に玄武は子姓の冠なり。

図 6.3 黒絹の冠に朱色の組紐は天子の冠。

(『礼記』(竹内照夫(昭和 52). 礼記中. 明治書院))

と記しています。中間色の染色文字は、上述のように、赤青黄の三原色に白黒を加えた五色の染剤で絹染めした練絹の色で定めるので、糸偏文字が多いということです。これらのことから、殷代、古代人は三原色の原理を認知し、社会の求めに応じる技術を取得していたようです。

(四) 染色文字

染(練) 甲骨文有“𦉳”、“𦉴”、“𦉵”等象形字。④ 丁山曰：“象染指于鼎形，当即许(慎)书所谓‘盥，抒白也’之盥”。⑤ 董彦堂曰：“按殷契类纂存疑第十三叶有‘𦉶’字中从𦉵，‘𦉵’象绳索，‘𠂔’象一物下垂，疑是网罟之属，又从‘𦉶’象两手牵而举之之形。”商承祚：“𦉶，正象两手操此器操作之形，𠂔为器身，其为工具字，字象器形。”甲骨文中“𦉵”指丝帛，“𠂔”指手在染液中操作，“𦉶”指染色用的釜鼎。

黄(𦉷) 甲骨文有“𦉷”、“𦉸”、“𦉹”等13字⑥。金文有𦉷(賈殷)、𦉷(师餘殷)、𦉷(×黄殷)、𦉷(蔣殷)、𦉷(黄君殷)、𦉷(趙曹鼎)、𦉷(休盘)等字。郭沫若曰：彝铭中锡命服之例多，以市黄对言。如“赤市朱黄”、“赤市幽黄”、“赤市恩黄”、“介市金黄”、“戴市同黄”、“赤市同巽黄”。凡四十二例，均一律用黄字，无一例外。黄为颜色之名、象黄土的色彩。

赤(𦉺) 甲骨文有“𦉺”、“𦉻”、“𦉼”、“𦉽”等字。⑦ 金文邾公华钟作“𦉺”，已似从炎它器，则与契文小篆并同。如“𦉺”(留鼎)、“𦉺”(桓侯鼎)、“𦉺”(颂鼎)、“𦉺”(颂簋)、“𦉺”(麥鼎)等字。罗振玉曰：从大火与许书同。按说文，赤，南方色也。从大从火。𦉺，古文从炎土。契文亦从大从火。卜辞：赤为颜色之名。赤象炎火的色彩。

绿(𦉾) 甲骨文有“𦉾”字。⑧ 杨树达曰：“字左从糸，右从录，乃绿字也。”⑨ 契文同杨说。绿为颜色之名，丝帛的色彩之一。

青(𦉿) 甲骨文有“𦉿”、“𦉿”、“𦉿”、“𦉿”等字。金文作“𦉿”(吴尊)字。王襄释为“青，青室同于《礼记·月令》，青阳太庙之说。”(见《董彦堂礼三叶上》)卜辞：“丁亥史其酒告青室。”盖宗庙之一室也。青为颜色之名，象青天的色彩。

红(紅) 金文有紅字。⑩ 见周鄒专鼎、无棣鼎：“官嗣紅王遐侧虎臣。”紅为红异体，古文糸字有诸形，𦉿为正形，“𦉿”、“𦉿”、“𦉿”为变形，而亦有省作𦉿，古音红工同部，故借红为司工之工。

红为颜色之名。象白绛(大赤)的混和色彩。

図 6.4 甲骨文、金文の染色文字(陳維稷主編『古代部分』P419-P420)

(3) 澄朱法 — 鉍石染材の採取 —

澄朱法は、朱砂などの染材の原石を粉沫にし、澄んだ清水に分散し精製する顔料の採取法です。美しい朱紅色をうるために赤鉄鉍や朱砂を石臼で碎き研磨し微粉沫化すると、次第に付着力、被覆力、着色性が向上し顔料といわれる良質染料がえられます。このこと

表 6.1 三千年以上前の朱砂の粒子の大小分布

(出展. 陳維稷主編『古代部分』P32)

关于研磨粒子的细度，有人曾用显微镜观察了北京平谷刘家河商代墓葬中朱砂粒子的大小^④，也许能作为推测原始社会中研磨效果的参考。

粒子长度	30 μ 以上	10--30 μ	5--10 μ	3--5 μ	3 μ 以下
粒子数	0	14	54	120	很多

在当时条件下，仅有石臼、石杵和石砚，把粒子磨得这样细，所下的功夫是惊人的。新石器时代多种类型文化遗址中出土众多的研磨工具和涂彩文物，证明这种技术已经普遍与成熟。自此之后，研磨就成为制造颜料必需的加工工序，为后人广泛利用矿石作为着色材料打下了基础。

我国先秦时代对朱砂的特别眷爱不是偶然的。朱砂色泽比赭石浓艳得多，光牢度又好。只是当时产量低，只有上层人物的服饰才能用它。由于朱砂的重要地位，我国古代匠人在朱砂的制造和提纯方面，下了不少功夫。因为一些矿物颜料的色泽，单纯从化学成分是不能确定的，它们粒子的分散度也有重要影响。在制作朱砂过程中，会出现多种红色，上层发黄、下层发暗，中间的朱红色彩最好。陕西茹家庄出土的朱砂恰恰为朱红，说明西周时已成功地掌握了朱砂的制作技术。

图 6.7 澄朱法の原理 (出典. 陳維稷主編『古代部分』P77)

(4) 古代の染色 — 緜・經・纁 —

中国は、奴隷社会（西暦前 21 世紀-前 476 年）から封建社会（西暦前 475-西暦 1840 年）にかけ、階級色として社会の秩序に貢献してきた染色法は、顔料の選択、精製、調合技術、また植物染料では媒染剤、処理液の濃度、染色温度、時間に至る技術体系が整えられました。また『説文解字』は染め方について「一染これを緜という。再染これを經（纁）という。三染これを纁という」と伝えています。初めは薄色に染め、二染、三染と染色を繰り返す中で濃くし、微妙な色調を染め分ける重ね染め技術を伝えています。染工には家伝といわれる父子相伝の秘伝があり、その上に技術を蓄積し高度化してきたようです。昔の染奴は、その仕事の腕で明日の命の保証される奴隷で、その多くは戦俘（戦争俘虜）でした（図 6.9）。生命を守り、子にしてやれる父親にできるただ一つの道は、新しい技術をつくり、密かに子に伝えることでした。技術に命をかける奴隷の悲願が古代の絹加工、特に染色技術を築きあげたようです。中国では近年まで酒造りや染色法は、我が子でも娘には教えない父子相伝の秘宝だったようです。染色技術はまた悲しい奴隷の運命を語るのでした。

3. 緑衣 — 姜夫人の悲しみ —

階級色の存在は、自然と色に尊卑の思想を生みます。第三章. 素紗禪衣のところ錦に包まれ幸せを願って衛の莊公に嫁入りした齋の姜姫の結婚は幸せではなかったようです。

『春秋左氏伝隠公』3年の項に、「衛の莊公、齋に娶る。莊姜という。美なれど子なし」があります。『詩経』邶風の「緑衣」は、「子無きがために正妻の私は日蔭の身、この悲しみは・・・」と悩み悲しむ姜夫の詩といわれます(図6.10)。

「緑衣」の詩意は、

中間色の緑の上衣に裏地は正色の黄色。
反対ではないか。心憂うる。いつこの憂はなくなるか。緑の上衣に黄色の裳。心の憂うる。いつこの憂の心を亡れることができるか。

『毛伝』は「緑は間色、黄は正色」とあります。上衣の色は低位の中間色で裏地は上位の正色、本末転倒ではないか。緑の上衣に黄色の裳。「緑衣」は子が無いために第二夫人、第三夫人の僭上に涙を飲む莊公の正夫人。私は緑の衣。この悩み、この憂いの心はいつ終わりいつ忘れることができるだろうか。とその胸のうちを示した莊姜の詩といわれます。

絹染めの色で決められた糸偏文字、三十種以上の染色文字はこのように古代社会の精神生活の深化にまた貢献したようです。



図6.8 (出展. 宋応星原著藪内清訳注(1971). 天工開物. P324. 平凡社)

第一节 夏至战国的社会生产和科学技术概况

奴隶社会较原始社会进步，是因为它提供了较高的社会生产力。奴隶制保全了作为奴隶主要来源的战俘的生命，从生产角度看，就是保存了使社会前进的生产力。 奴隶制扩大了农业、手工业和畜牧业之间的劳动分工，并且逐步出现了从事体力劳动的广大群众同管理劳动、经营商业，管理国家以及从事科学和文化的统治阶级和知识分子之间的分工。这种分工乃是文明社会赖以发展的基础。

図6.9 古代の染色技術書は戦俘(戦争俘虏)といわれる奴隶

緑 <small>りよく</small> 衣 <small>い</small>	詩經 <small>こころも</small> 邶風 <small>はいふう</small>
緑兮衣兮	緑の衣よ
緑衣黄裏	緑の衣に黄色なる裏
心之憂矣	心の憂うる
曷維其已	曷 <small>い</small> つか維 <small>こ</small> れ其 <small>そ</small> れ已 <small>や</small> みなん
緑兮衣兮	緑の衣よ
緑衣黄裳	緑の衣に黄色なる裳 <small>きもの</small>
心之憂矣	心の憂うる
曷維其亡	曷 <small>わす</small> つか維 <small>こ</small> れ其 <small>そ</small> れ亡 <small>な</small> れん

図 6. 10 緑衣(正夫人姜姫の悲しみ)
 (出典. 吉川幸次郎(1980). 詩経国風上. 岩波書店)

第VII章 砧のうた ー班倅仔の悲歌ー

「砧」も忘れられつつある言葉のひとつです。「賦を作り 自らを傷む。その辞 極めて哀婉」と『漢書』にある班倅仔の砧の悲歌は、漢詩に、さらに日本の和歌や俳句に影響を与え、絹文化の一端を担うのでした。ここでは、砧うたの世界にみられる絹の側面に注目したいと思います。

1. 繭糸と砧

はじめに、砧にかかわる繭糸の性状に触れ、砧打ちの必要性について述べます。

(1) 繭糸

繭造りを始めるカイコの体内は、絹物質の入った二本の絹糸腺で満たされています(図 7.1)。その糸こんにやく状の後部糸腺からは絹糸の主成分フィブロインが分泌され漸次吐糸口に向かい移動します。中部脂腺からは二本のフィブロイン糸を接着して一本の繭糸(図 7.2)に、また吐糸された一本の繭糸(図 7.3)が固い繭殻(繭層)を形づく(図 7.4)ために繭層繭糸を膠着させる、セリシンと呼ばれる湯に溶けやすい接着剤を分泌します(図 7.5)。一本の繭糸は、天然繊維の中で最も長い一千五百メートルほどの長さを持ち、また九千メートルの長さが三グラムにも足りない自然界に入手できる最も細い糸です。絹織物はその繭糸を合糸しセリシンで接着した撚りの無い太糸(生糸)で織られます。生糸やナイロン糸のような長繊維の太さの程度(織度)の単位は、九千メートルの重さが一グラムの糸を一デニールと定められ、繭糸は三デニール以下の細糸がほとんどです。繭糸七本合糸二十一デニール生糸で織物一反を織るには三十八万メートルの生糸を必要とします(水出通男)。

繭糸本体のフィブロイン糸は、しなやかで強く美しい光沢がありますが、その表面はセリシンで覆われています(図 7.2)ので生糸の織り物(生絹)の手触りは粗く堅目で、湿り気を与えた後太めの棒に巻き、こん棒でたたいてセリシンの一部を除いて生絹を柔らかく艶出しする砧打ちの仕上げ処理を行います(図 7.6)。

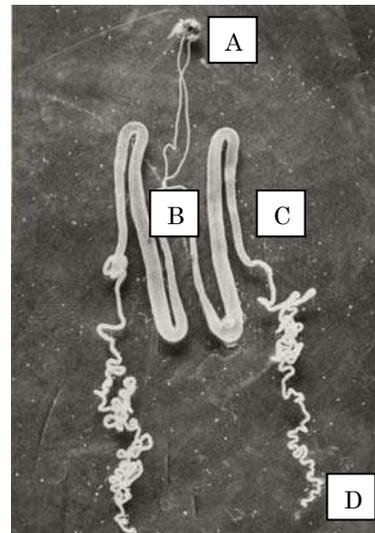


図 7.1 熟蚕の絹糸腺(小松計一)

A~B: 前部糸腺,

35mm, 0.05~0.03mm φ

B~C: 中部糸腺,

60mm, 1.2~2.5mm φ

C~D: 後部糸腺,

200mm, 0.4~0.8mm φ

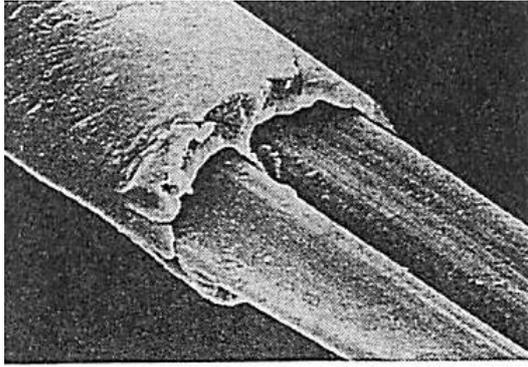


図 7.2 繭糸拡大写真(水出通男)

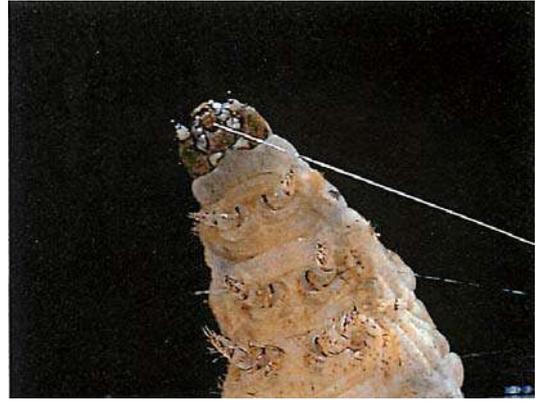


図 7.3 繭糸の牽引 (木内信)

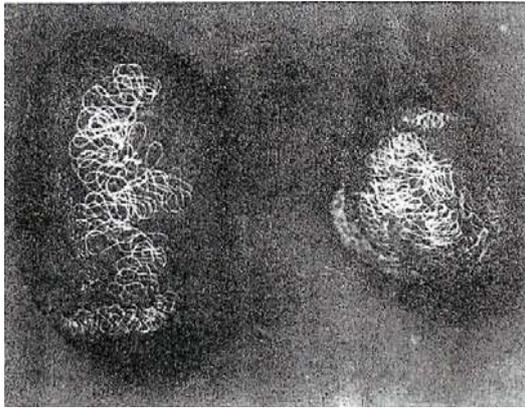


図 7.4 蚕の営繭曲線(鈴木式煤煙法による)(鈴木純一氏原図)



図 7.5 繭糸の断面図 (小松計一)



図 7.6-1 一勇国芳作砧打ち図
(信州大学繊維学部千曲会蔵)

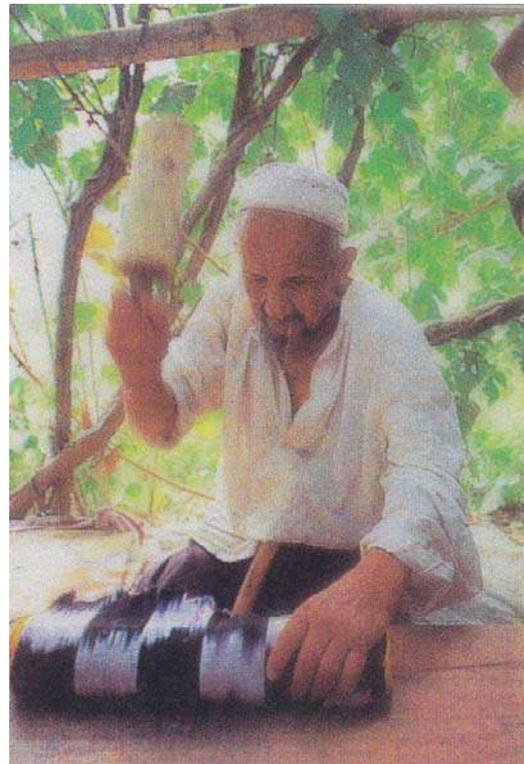


図 7.6-2 中国ホータンの^{きぬた}砧打ち

2. 班婕妤の擣素賦

班婕妤は、中国前漢の人で、父は越騎校尉の班況で『漢書』の著者班固のおおばに当り、若いときから才学の誉れ高く、漢十代成帝（在位西暦前33年-同8年）の寵を受けます。帝は婕妤のために婕妤という新しい后妃の位を定め与えたといいます。その後帝の愛が「歌舞を学び体軽きをもって飛燕という。成帝宮に入れ婕妤となす。許后廃されるや飛燕皇后となり妹昭儀と共に蠱惑を事とす」（漢書）の趙飛燕に移ると婕妤は退いて皇太后に仕えるのでした。成帝の死後は、帝の陵を守り、「太后の長信宮に侍し、賦（感じたままに歌う詩）を作り、自らを傷む。その辞 極めて哀婉」とうたわれた「擣素賦」を図7.7に、古代の砧打ちの様子を図7.8に、また詩意をつぎに示します。

擣素賦詩意 班婕妤 『芸文類聚』

広い家の階段に月がかかると、木々は光り川はキラキラと輝いて流れる。身支度を整え、近くの者達に命じ白絹を巻いて庭へ下りる。薄く長い裳裾を曳く姿は美しく、腰につけた珠は澄んだ清い音をだす。黒目がちの瞳。目配りして仕事に入れば、立ち振るまいは多様に変わり、ほっそりした体に羞らみを含み身嗜みもまた綺麗。絹に香を入れ杵で美しい砧を打つ。その声は集まり鳳凰の鳴き声のよう。梧の杵は中空部がこだまして遠くへ、桂の砧はしっかりと硬く響きは沈重。絹をうつ音は盛んに軽やかに浮かれて散っていく。節は流暢で明るく、調べや音には一定のリズム感やきまった音程はない。二人の杵もつ手は交互に落下し、吹きまく風によって、遠く近くに、連打が続くかと思うと急に止まったり、また間延びしたり様々（図7.8）。

袖丈は好きなだけ長めに裁ち、半月紋様を襟に刺繍する。細い指先に心をこめて丁寧に縫う。その跡をみて、変わらぬ私の気持ちを知って欲しいと心をこめる。しかし、一度崩れ去った路を修復して再び通じさせることは何とむずかしいことか。心をこめて縫いあげたこの衣服を成帝に届ける術とて立たない。私の帝への変わらぬ思いがほかの人にもれたら、もし嫉妬心の強い飛燕にでも知られたら、ただではすまされまい。そう思うと恐ろしく帝への手紙を書いたが、また書き直したり、着物を入れた箱の紐を結んだがまた解いたりして迷うのであった。

擣素賦は優しく美しい帝を思う班婕妤の、悲しい思いを綴る賦ですが、漢代の絹の仕上げ過程をまた生き生きと伝えています。

とうそふ 擣素賦	班婕妤
もしこうじよ 若乃広除に月懸れば	かがや 木輝き流れ清し

けいるあした りょうきんゆうべ
 桂露朝に満ち 涼襟夕に軽し
 ようしよく あいめい そうはく
 容飾を改めて相命じ 霜帛を巻き庭に下る
 らくんひ きび しゅはいふ こ
 羅裙曳く之れ綺靡 珠珮振る之れ精明
 も しふんらい どうようたち
 若乃盼睐姿に生ずれば 動容多致
 じゃくたいはじ ようふうびれい
 弱態羞を含み 妖風靡麗
 ここ らんせい あつめ ほういん
 是に於いて香を投げ杵砧を叩く 鸞声を擇て鳳音と争う
 こ しらべ けい てい ひびきおも
 梧は虚に因り調遠く 桂は貞に因り響沈し
 さんしげ ふしう あか
 散繁く軽く而つ浮捷 節疏にして亮るく而つ清深
 しらべじょうりつ あら おんていおん
 調常律に非ず 音定音無し
 らくしゅ まか さんさ ふうひよう きんえん
 落手に任す之れ参差 風飄に従う之れ近遠
 れんじゃく のぼ ちようけん
 或は連躍し更に投げ 或は暫らく舒し長巻す
 ちようしゅう ほしい けんべい らんきん
 長袖は侈まま奸袂にし 半月蘭襟に綴る
 びほう しよく こいねが
 織手微縫を表わし 織を見て心知ること庶う
 しゅうろなん はるか ふんほうもれやすき
 修路避ぞ夔なるを計り 芬芳泄易を恐る
 はこすで かん
 書既に封ずるに重ねて題す 笥已に緘せるを更に結ぶ

図 7.7 漢代班婕妤の砧打ちの詩

(砧打ちの漢代仕上げ工程の証拠例・岡谷蚕糸博物館紀要第4号.P26-33)

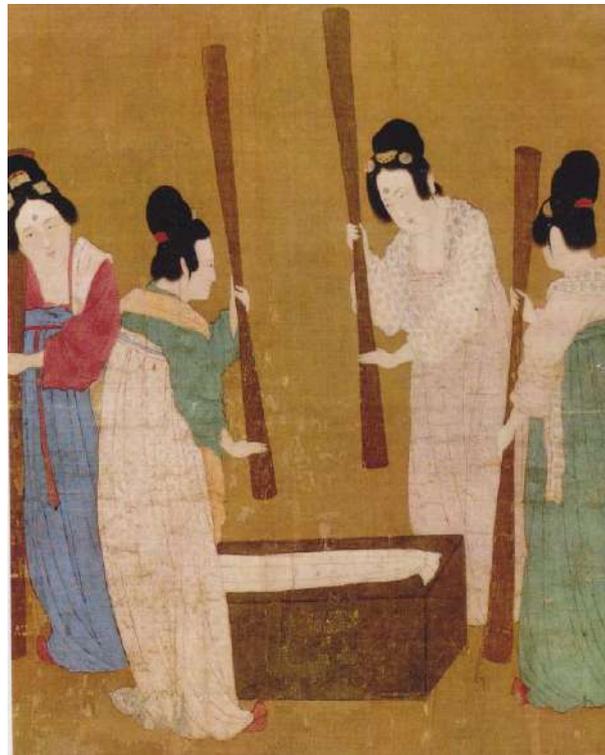


図 7.8 古代の砧打ち

ぼちようぎとうれんずかん そうぎそうこうてい
 (摹張萱搗練図卷. 宋徽宗皇帝(西暦 1082-1135))

3. 中国の擣素賦

中国詩には、班婕妤の擣素賦の流れを汲むと思われる優れた詩歌が沢山あります。ここでは、その幾つかの読み下し文を掲げます。

(1) 玉台新詠

漢から梁にかけての詩歌を集めた徐陵（西暦 509 年-583 年）撰の『玉台新詠』には砧にかかわる沢山の詩歌があります。そのなかの二首の読み下し文を次に掲げます。

謝惠連 一擣衣一

謝惠連（西暦 397 年-433 年）の擣衣の読み下し文を図 7.9 に示します。ここでは遠く離れた夫を思ううたになっています。最後の四句「小箱に収めるは私のこの手でします。ひそやかな封はあなたの開くのを待ちます。腰まわりは昔のままにしました。いまもそれでよいでしょうか」やるせない息づかいの伝わる詩といわれます。また「一途に砧を打つ佳人の額にはうっすらと汗がにじみ、両袖からはかすかな芳香がこぼれる」には上品なエロチシズムが漂い、作者の優れたきらめきを示しているといわれます。

擣衣	謝惠連
こうきどとど	きうんたちまうなが
衡紀は度を滴むる無く	晷運は倏ち催すが如し
はくろえんぎくしげ	ていかい
白露園菊に滋く	秋風庭槐を落とす
しゆくしゆく	さけい
肃肃として莎雞羽ふるい	烈烈として寒蟬啼く
ゆういんくうばく	しょうげつちゅううけいこう
夕陰空幕に結ぼれ	宵月中閨に皓たり
しょうふくいまし	たんちよくあいしょうけい
美人裳服を戒め	端飭して相招携す
ぎよくしん	
玉を簪として北房を出で	金を鳴らして南階を歩む
らんかうしてちんきよう	えい
欄高うして砧響発し	楹長うして杵声哀し
びほうりょうしゅう	けいかんそうだい
微芳両袖より起こり	軽汗双題を染む
がんそすで	
紈素既己に成るに	君子行きて未だ帰らず
た	しちゆうとうぬ
裁つに筥中の刀を用い	縫いて万里の衣と為す
きようみ	ゆうかん
篋に盈たすは予が手よりし	幽緘君の開くを俟つ
ようたいちゆうせき	
腰帯は疇昔に準ず	知らず今の是非を

図 7.9 謝惠連. 擣衣詩

曹毗 一夜擣衣を聴く一首一

曹毗は魏の曹操の血を引く東晋（西暦 317-420 年）の人で、砧を詩として詠った最初の人といわれます。その「夜擣衣を聴く一首」を図 7.10 に掲げます。五言

詩です。「寒気がやってきた。衣替えの白絹ころもがを用意しなくては、と美しい人が衣装の手配をします。冬の夜は長く空気は澄んでいます。月光が座敷の隅まで照らしています。ほっそりした手で軽い生絹きぎぬを畳み、美しい杵きねで砧を叩く。澄んだ風が響きを流し、吹く風は彼女の微かな唄を振りまき、別れてからの月日の速い歩を嘆き、心に積る悲しい思いたいを悼むかのように心を打つ。」

昔を偲び寂しさに打ち勝とうと砧を打つ姿の浮かぶ詩です。

『玉台新詠』には王僧孺の「構衣おうそうじゆ」、謝眺しやちやう、梁武帝の「構衣りやうぶてい」、皇太子簡文「秋かんぶん」、閨夜思しゅう 費昶「華光省にて中夜城外の構衣を聞く」などみられますが、共通しているのは佳人哀愁の情景です。

夜 <small>とうい</small> 構衣 <small>こうい</small> を聴く一首	曹毗 <small>そうひ</small>
寒興 <small>かんおこ</small> りて紈素 <small>がんそ</small> を御せんとし	佳人 <small>かじんい</small> 衣裳 <small>いさん</small> を理 <small>おさ</small> む
冬夜 <small>とうや</small> 清 <small>か</small> く且 <small>かつ</small> つ永 <small>えい</small> く	皓月 <small>こうげつ</small> 堂陰 <small>どういん</small> を照らす
織手 <small>せんしゆ</small> もて軽素 <small>けいそ</small> を畳み	朗杵 <small>ろうしよ</small> もて鳴砧 <small>めいちん</small> を叩く
清風 <small>はんせつ</small> 繁節 <small>はんせつ</small> を流し	回颿 <small>かいひやう</small> 微吟 <small>びぎん</small> を灑 <small>そそ</small> ぐ
此 <small>おうん</small> の往運 <small>すみ</small> の速 <small>すみ</small> やかなるを嗟 <small>なげ</small> き	彼の幽滞 <small>ゆうたい</small> を悼 <small>いた</small> む
二物 <small>にぶつよ</small> 余 <small>おもい</small> が懐 <small>あ</small> を感じ <small>た</small> しむ	豈 <small>あ</small> に但 <small>た</small> だ声 <small>こゑ</small> と音 <small>ね</small> のみならんや

図 7.10 曹丕. 夜構衣を聴く一首

(2) 万戸衣を構つ

李白りはく、杜甫とほの時代をみても砧打ちの詩には一種のエレジーが漂うのです。

李白 一子夜呉歌一

李白（西暦 701 年-762 年）の「子夜呉歌」を図 7.11 にのせます。出征兵士の妻の嘆きのうたです。長安の衛を照らす寒むざむとした月。どの家からも砧を打つ音が聞える。北から冷たい秋風。すべてが玉門関の彼方にいる夫への切ない思いをつのらせる。いつになったら戦いが終わり夫は帰るだろうか。

子夜呉歌 <small>しやごか</small>	李白
長安 <small>いっぺん</small> 一片の月	万戸衣 <small>ばんこころも</small> を構つ <small>こ</small> の声
秋風吹いて尽 <small>すべ</small> きず	総 <small>こ</small> て是れ玉 <small>ぎよく</small> 関 <small>かん</small> の情
何れの日か胡虜 <small>いず</small> を平 <small>こりよ</small> らげ	良 <small>りやうじん</small> 人遠征 <small>や</small> を罷 <small>や</small> めん

図 7.11 李白. 子夜呉歌

杜甫 一秋興一（一部）

読下文を図 7.12 にのせます。杜甫西暦 766 年の詩です。原詩は長いので一部を示しました。成都を去って放浪の旅にでて、はやくも二度目の菊の季節を迎えた。思えばいずれも

涙。一艘の船に身を託し、帰りたい一心で、故郷の空に心を繋いできたが、今年もまた冬ごもりの準備が始まったらしい。夕暮の白帝城の麓の村々からは気ぜわしげな砧の音が聞えると、安祿山の乱（西暦 755 年）を避け旅に出て苦労を重ねる杜甫の心を砧の音は慰めるのでした。

しゅうきよう	秋興（一部）	杜甫
そうきくふたた	叢菊	たじつ
かんい	寒衣	とうしゃく
うなが	刀尺	うなが
はくていじょう	白帝城	はくていじょう
つな	繋ぐ	つな
こえん	故園	こえん
ぼもん	暮砧	ぼもん

図 7.12 杜甫. 秋興(一部)

白楽天 一江樓で砧を聞く一

白楽天（西暦 772 年-846 年）の砧の詩を図 7.13 にのせました。暖かな江南地方といつても陰暦十月ともなれば寒さが身に凍みます。一夕高楼に登ると砧の音が聞こえ、故郷へのノスタルジーが脳裏をよぎるとうたっています。そのほか、唐詩には劉長卿「月下に砧を聞く」など沢山ありますが、昔を偲ぶ故郷の思を砧に託すものが多いです。

こうろう	江樓で砧を聞く	白楽天
こうなんじゆい	江南授衣の晩	十月
いちゆうこうろう	一夕高楼に上る	故園
こえん	千里の心	千里の心

図 7.13 白楽天. 江樓を聞く

4. 日本の砧の和歌、俳句

平安から江戸にかけうたわれた砧のうたですが、平安前期の『古今和歌集』には一首もみられません。しかし『新古今和歌集』には 11 首あり中国の白楽天に始まる漢詩の影響がみられるといわれます。広い読者層をもった藤原公任（西暦 966 年-1041 年）の『和漢朗詠集』の影響だろうといえます。

(1) 和歌

和歌はおもに峯村文人（1974）、新古今和歌集：日本古典文学全集 26. 小学館. によりました。

藤原雅経 構衣の心

正月の楽しい遊びに百人一首があります。その一つ、

み吉野の 山の秋風 さ夜更けて
故郷 寒く 衣打つなり

があります。参議藤原雅経、建仁二年（西暦1202年）の作といわれ『新古今和歌集』歌番号483に収められています。古京の秋の夜寒のわびしさを、山の秋風の音と里の砧の音の交響による流麗な声調でうたいあげているといわれます。

式子内親王

『新古今和歌集』歌番号484に式子内親王の

ち
千たび打つ 砧の音に夢さめて
もの思ふ袖の 露ぞくだくる

があります。砧の音に夢破られ、夢後の思いはただ悲しくてとうたっています。白楽天の「八月九月正に長き夜 千声万声了む時無し」を受けた詩といわれています。

(2) 俳句

江戸時代には、砧は、庶民の生活に溶けこんだ秋から冬にかけての風物詩であったようです。

まつおばしょう
松尾芭蕉（1644-1694）の

聲すみて 北斗にひびく 砧哉

いはらさいかく
同じころの井原西鶴（1642-1693）の

世に住まば 聞けと師走の 砧かな

よさのぶそん
与謝野蕪村と親交があり、京都島原の遊里に住んだ炭太祇（1709-1771）

ね
寝よといふ 寝ざめの夫や 小夜砧

など、班健仔の砧の賦の流れと異なった、俳句の世界の砧は、庶民生活をうたう師走の風物詩となるのでした。

繊細で柔らかく、しなやかで温かく、光沢のある美しい絹の本体フィブロインは、古代人の密やかな思いを託す格好の対象物であったようです。

第Ⅷ章 絲文字(1) — 古代繰糸の絵姿 —

昭和五十四年八月（1979）、中国蘇州絲綢工学院へ製糸技術の講義に行きました。最初の驚きは、製糸の基本用語、製糸・生糸・絹の文字が見当たらず、製糸工場は繰糸廠、生糸は絲、シルクロードは「絹之路」ではなく「絲綢之路」なのです。絹は生糸づくりの織密度の高い平織りの生絹一品を指す用語で、日本の「絹」のようにシルク全体を指す概念は、中国では「絲」文字にあるようです。ここでは、そのわけを絲文字に尋ね、繰糸技術の源を窺いたいと思います。

1. 『孫子算経』 — 繭糸の太さは長さの最小単位 —

繭糸は自然界から入手できる最も細い糸といわれますが、そのままでは細すぎて、織物用の糸に使うことができません。古代人は繭糸から程よい太さの織物原糸「生糸」をどう生産したかの繰糸技術の基本を度量衡の世界に尋ねようと思います。

(1) 忽 — 繭糸は究極の細糸 —

長さや重さの単位を記した、漢魏頃の度量衡の算書『孫子算経』は、「長さの最小単位を忽とする。一忽はカイコの吐いた繭糸の太さ。十忽を一絲、十絲を一毫、十毫を一厘、十厘を一分、十分を一寸、十寸を一尺……」と十進法で長さの単位を定めています（図 8.1）。

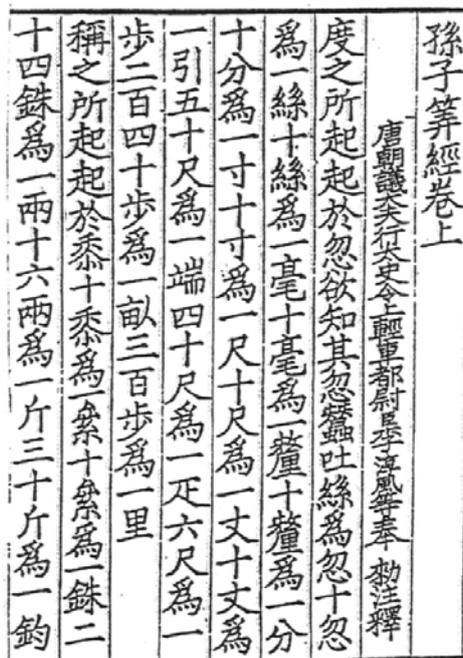


図 8.1 繭糸は長さの最小単位(孫子算経)

この基準によると、一尺は繭糸百万本を束ねた太さになります。昔、母が姉に裁縫を教
えていたころの一尺の物差が身近に感じ懐かしさが湧いてきます。そうした長さの基本単
位は「漢代、すでに繭糸は自然界から入手できる最も極細の糸」であることを、古代人は
承知していたことをまた伝えていると思います。

(2) 絲 一生糸の太さは繭糸十本合せ

製糸技術の基本は、織物原糸「生糸」づくりの標準太さの決定でした。『孫子算経』の二
番目の太さ単位は繭糸十本合せの「絲」の十忽です。戦前までの繰糸工は、繰られている
繭の数を数えて生糸の太さを管理する、定粒繰糸によっています。長さの単位の繰糸生糸
の標準太さは「絲」、すなわち繭糸十本合せの生糸を示唆しています。以下、手近な資料に
その適否を当たってみます。

(3) 甲骨文・金文 一絲文字は三千年前に出現

漢字が文字として確かな姿を現すのは、殷代の後期西暦紀元前一千三百年頃現れた甲骨
文、そのあとの金文といわれます。すでに解読されている甲骨文など一千七百文字ほどの
なかに桑・蚕・繭・糸(いと)・絲(いと)・紡・編・織・帛・紬など、桑から絹織物づ
くりまでに必要な技術用語のほとんどが含まれています(図 8.2)。殷代は、養蚕、製糸、
紡織の蚕糸絹業が生活や経済面で文字がつくられるほど社会の重要な位置を占めていたこ
とを語っています。三千年以上前、製糸業は繭糸十本を合せた太さの生糸を広く生産して
いたようです。

絲(絲) 甲骨文有“𦉰”、“𦉱”、“𦉲”等象形字, 𦉱金文有“𦉱”字。罗
振玉曰: “𦉱”, 象束丝状, 两端则束余之绪也。④ 契文同象丝二束之形。卜辞云: “争贞
令上丝众禾戾 𠄎”, “争 𠄎 上丝 𠄎 戾 𠄎 彘”, “甲子卜出贞丝两非祸”。文中“上丝”
与“禾戾”对文, 上冠以令字, 可能是指职官之称。“上丝”即管理丝帛业的部门; 同时还有祈
祷蚕丝丰收的含义。

丝字包括系、糸、𦉱、𦉲 等象形文字, 计从系(系)的字 81 个, 从丝的字 16 个, 从 𦉱
的字 3 个, 总共 100 个字。⑤ 可见蚕丝业在商代已经相当普遍。

図 8.2 絲は糸二つ束ねた繭糸十本合せの生糸 (陳維稷主編『古代部分』)

2. 『説文解字』 一五忽の糸は最も細い織物原糸

硬い銅線も限りなく細くするとたわみやすくなり、そよ風にも揺れる柔らかい糸になり
ます。同じ太さなら鋼鉄と同じほど強いといわれる絹フィブロイン糸は、その細さにより
柔らかくしなやかで光沢のある、しかも腰の強い糸です。『説文解字』は「徐鍇曰く、一蚕
せつもんかいじ じよかいわ いっさん

は吐くところを忽となす。十忽を絲、糸は五忽也」と伝えています(図8.3)。甲骨文の「糸」は繭糸五本合せの生糸で、織糸の最も細い生糸と定めています(図8.4)。『孫子算経』は、古代単位の系列を十進法で定めていました。五忽の糸は、それから逸脱した単位です。繭糸の性状をより絹織物へ反映させるために敢えて五忽の「糸」単位を定めたのです。

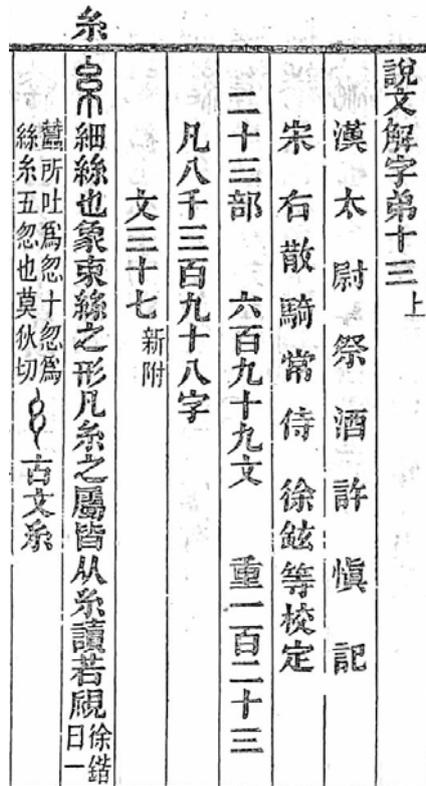


図8.3 糸は5忽(說文解字)

(二) 纒 紡 文 字

糸(糸) 甲骨文中“𠄎”、“𠄏”等象形字, 师奈父鼎、吴尊、邾公华钟、吉日壬午剑等上金文中有“𠄎”、“𠄏”、“𠄐”等九个。契文作“𠄎”, 实糸之初文。甲骨文中的“𠄑”、“𠄒”、“𠄓”、“𠄔”、“𠄕”等二十三字。毛公鼎、晋鼎、大保簋、质吊多父盘、孙陈猷釜等上金文中有八个字。“𠄑”实为丝字古文, ④实即“𠄑”之或体字, 或作二束“𠄖”象形字, 就是从蚕茧上纒出的一股生丝。

図8.4 糸文字は繭糸五本合せの最細の織物原糸
(糸は一般の織物原糸, 生糸の太さ. 出展は図8.2と同じ)

3. 糸文字は殷代繰糸の絵姿

糸文字の甲骨文（図 8.4）の下の「糸」は五粒づけ繰糸の姿を、その上のいと頭（^よ）の 8 の字は五本繭糸を仮撚する姿を、最上部のタテ棒一本は、仮撚りされた一本の生糸を示しています。また絲文字の甲骨文（図 8.2）は五粒付け生糸二本を合せた十本繭糸の生糸を象形しています。それらの関係を図 8.5 に示しました。

以上のことは、三千年以上前の殷代、古代人は、繰り繭数を数えて織物原糸生糸の太さを管理する定粒繰糸を会得し、さらに「最も細い生糸は繭糸五本合せの「糸」、普通の織物原糸の生糸は糸二本合せた繭糸十本合せの「絲」との製糸技術の基本」を会得し、後世伝えるべくその思いを糸文字に託したようです。

糸文字は、辛苦に堪え導いた殷代の定粒繰糸法を、後世に伝える先人の貴重なメッセージのようです。

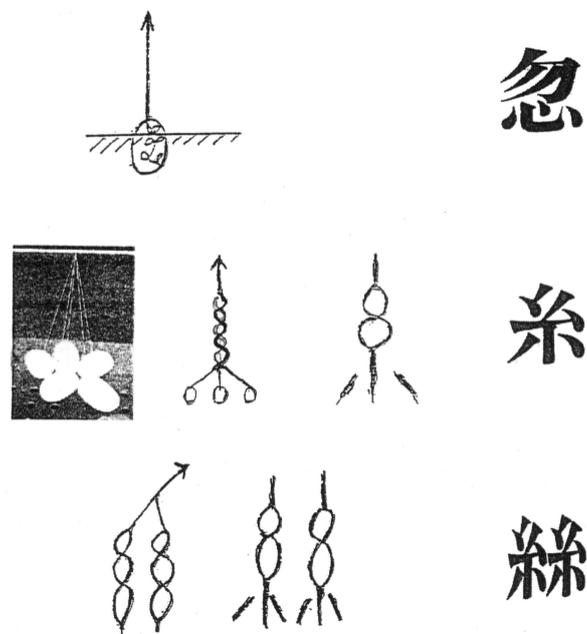


図 8.5 1 忽(繭糸の太さ)・糸(5 忽)・絲(2 糸・10 忽)(嶋崎昭典. 『真綿の文化誌』)

第Ⅸ章 糸文字(2) 股代繰糸の姿 ー糸偏文字の伝えるー

漢字は、一語が固有の意味をもつ表意文^{ひょういぶん}で、中国最初の辞典『説文解字』^{せつもんかいじ}に始まり部首によって分類されています。例えば、木偏^{きへん}の林・森・枝・枯はいずれも木の情報を示しています。「糸」^{べき}が定粒繰糸の絵姿(第Ⅷ章 51 頁)なら、糸偏文字には生糸の技術情報を与える文字があり、繰糸の基といわれる三千年前の股代繰糸の具体的な姿がそれらの文字情報を通して見付けられるかも知れない。そんなロマンが湧いてきます。

1. 輸出生糸の繰糸

日本は、明治二十六年代の終わりには欧米諸国の求める品質の生糸を経済的に生産する技術を確立して生糸価格一割高で取引され、明治の終わりには生糸輸出高世界一の座を占めるのでした。初めに、諏訪式といわれるその繰糸法を近代日本製糸の代表として文章化します。

カイコが糸を吐いて繭殻(繭層)をつくるときの外層はスベスベしていますが、糸を吐き終わるころの繭は一割以上縮み、皺だらけの繭になります。その繭から一本の繭糸を引き出すために、繭を湯で煮て膨化させ繭層繭糸の膠着力を緩めます(煮繭)。繰りよくなった繭^に(煮まゆ)を温水に浮べ小箒^{さくちよぼうき}(索緒箒)で繭殻の表面を軽く撫で^{さくちよ}(索緒)、絡みついた繭糸(粗緒)を手繰り^{しやうちよ}(抄緒)、カイコの吐き初めの糸緒(正緒)の出た正緒繭へ加工します。つぎに一本の生糸づくりの定められた数の正緒繭^{りゆうづけまゆ}(粒付繭)を集め繰糸します(定粒繰糸)。繰糸途中で、繭糸が切断(落緒)すると控えの正緒繭の糸緒を加え(接緒)、定められた繭糸本数の生糸を繰糸します(粒付け管理)。繰糸者は粒付管理をしつつ、繰糸湯の湯加減や繰糸全般に気配りしつつ作業を進めます(繰糸管理)。明治三十年代までには、そうした基本操作の技術用語が整えられました。

2. 糸偏技術用語の招集

糸偏文字は、長い時の流れの間に文字の作られた趣旨を離れ、日常生活に溶けこんで独り歩きしている言葉が沢山あります。ここでは前述の輸出生糸繰糸を手懸かりに呼び集め、股代繰糸の様子を糸偏文字で表示できるか試^{ため}してみたいと思います。

(1) 素 ーほどよい煮繭^{にまゆ}の目印ー

繭を煮過ると、外層の繭糸が煮崩れ、正緒繭づくりの屑物を多くします。未熟だと正緒が求め難く作業が困難です。ほど良い煮加減の判断は外層繭糸の煮崩れ具合です。それを示すのが繭から煮崩れたれ下がったままの糸の様子を象徴する「素」文字でした(図 9. 1)。

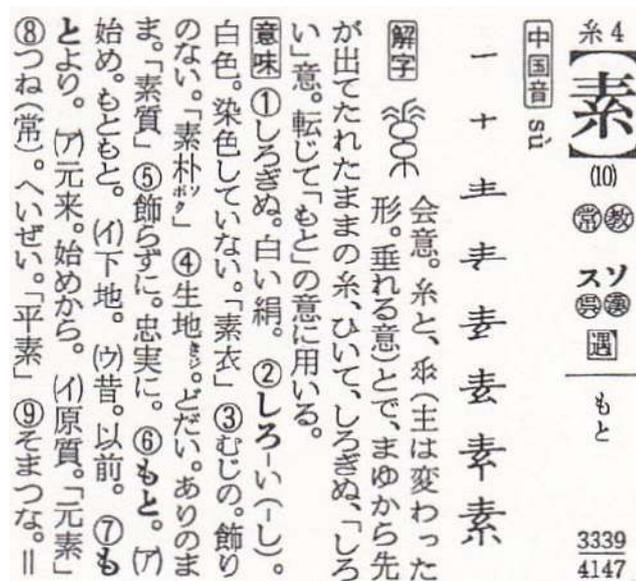


図 9.1 旺文社漢和辞典, 赤塚忠他編 (1994)

(2) 乱 — 正緒繭 —

三千年ほど前の青銅器に刻まれた金文の「みだれ」文字 (図 9.2、解字) の偏 (左半分) の上部の「手」は、カイコが 8 の字様にデタラメに吐いて造った繭殻 (繭層) 上の繭糸を索緒、抄緒して吐き初の繭糸の糸緒 (正緒) 求める操作を示しています。また下の「手」は糸繰り杵 (H) 回転用の手で、乱文の偏は繭層繭糸の乱れ状態を象形しています。旁 (右半分) の「おつによう」は正緒を求めて引き出した姿で、繭糸の乱れを治めた「正緒繭」を示していると『紡織史話』は語っています (図 9.3)。中国では、いまも「繰糸」を「治絲」と呼んでいるとのこと。また金文の偏を「乱」文、金文 (図 9.2) を「正緒繭、治」文と区別していたのが、いつの頃か「治」文が「乱」文と入れ代り今日に伝わっているとのことです (『紡織史話』)。

(3) 緒 — 繭糸の端緒 —

一諸・緒言・情緒・端緒と「緒」は、生糸に関わりなく使われていますが、糸偏文です。製糸では、索緒・抄緒・正緒・落緒・接緒・緒糸と、「緒」は多くの技術用語に繭糸の端緒 (糸くち) の意で使われています。

『説文解字』は、緒を「絲の端 (はじめ) 也」と説明しています (図 9.4)。幾本もの糸緒を一つにまとめるのが一緒であり、話の糸緒が緒言、心の動く糸緒が情緒です。繰糸技術では「煮まゆから大ざっぱな粗緒を引きだし (索緒)、手ですぐり抜いて (抄緒) 繭糸の初めの糸くち (正緒) を引き出す (正緒繭)」と繰糸の準備作業を示めす字「緒」は必須の技術用語です。

解字 会意形声。𣪠(みだ)と糸(ま)より。みだれた糸巻きを両手(二)で扱(あ)ぐして「乱」の原字(と)し(一)し。おさえる意(と)で「みだれる」の原字(と)し(一)し。おさえる意(と)で「みだれる」意(に)用(い)いる。一説(に)「みだれる」が原義(で)「転じて」おさめる意(と)もいう。「乱」は省略形(の)俗字(に)なる。

4812 (7) 常教
 502C
 ラン
 ロン
 翰
 みだれる
 みだす
 4580
 4070

図 9.2 金文の「みだれ」文字(旺文社漢和辞典)

𣪠 是 𣪠 的象形文字，其包含纒丝的意义：上方为一只手(𠂇)；从一撮茧子(8)上理绪；另一只手(又)摇转丝框(𠂇)。“亂”的意味：将乱丝经纒丝达到治丝目的。

図 9.3 乱文字の由来(『紡織史話』)

篆文 緒
 其他 緒
 形声 声符は者(者)。〔説文〕十三上に「絲の端なり」とあり、糸の末端をいう。〔詩、魯頌、闕宮〕「禹の緒を續ぐ」とは、その緒業を継ぐ意。者は土垣の中に祝禱を取めた器の臼を埋めて、そこで外から邪気の入るのをとめるもの。緒も糸端を結びとめる意で、糸をほぐすにはそこからはじめ。ゆえに端緒・緒余の意となる。緒言・緒戦・緒業ははじめ、緒余とは終わりをいう。また心をたとえて、心緒・情緒という。

14 緒
 15 緒
 ショ・チヨ
 いとぐち・はじめ・お

図 9.4 緒文字は繭から求めた糸くち(字統)

(4) 繰 —カイコの巢からの糸とり—

やり繰り・繰り言・繰り返しの「繰」もよく使われる日常語です。繰の旧字「繰」はカイコの巢(す)(繭)からの糸とりを意味する繰糸用語です。

『説文解字』は繰を

繭の端緒を抽出し糸にするなり。繹繭為絲也 [繭の糸口を引き出し(繹)生糸(絲)となすなり]

と伝えています(図9.5)。着物一着に生糸(絲)三十万メートル以上を必要とします。その昔、奴隷が朝から晩まで繰り返す繰糸作業は気の遠くなる根気仕事でした。いつとはなしに繰は「繰り返し」の日常語になったようです。

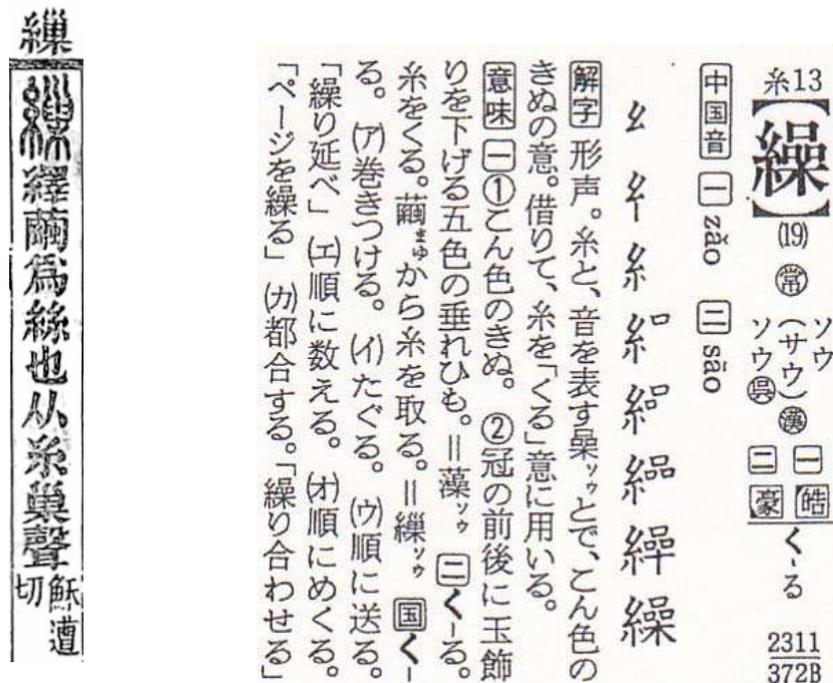


図9.5 繰は蚕の巢から糸を巻き取る。(『説文解字』(左)・『漢和辞典』(右))

(5) 給 —接緒—

月給・給食・補給の「給」も糸偏文字です。任克は徐顥『説文解字・注』の「給 本来の意味は、繰糸中の落緒に即応し正緒繭を付け加えること(意識)」を引いて「給は接緒」と記しています。白川静『字統』は、宋の戴侗『六書故』を引き「繭を煮て糸をつむぐとき、数糸を合せ取ることを給という。ゆえに給足・供給の意」(図9.6)と記しています。

「給は、繰糸中の落緒に即応して正緒繭を供給する接緒のために作られた形声文とのことです。




【給】
 12 キユウ(キフ)
 たす・たまう・すみやか

形声 声符は合。合に翁の声がある。
合* 合は金文において答の義に用いられて
 いることがあり、反対給付的な意味をもつものであ
 ったと思われる。「説文」十三上に「相足すなり」と
 あり、足らざるところに充足することをいう。戴
 侗の「六書故」に、繭を煮て糸をつむぐとき、数糸
 を合わせて取ることを給といい、ゆえに給足・供給
 の意となるとするが、賜給を原義とする字であろう。

図 9.6 給は繭糸の供給。(接緒)(字統)

(6) 紀 — 粒付け管理 —

紀元・紀要・紀律の「紀」も糸偏文字です。『説文解字』は「絲の別なり」、また『字統』は諸説をまとめ「紀は絲漉(糸すじ)の数の紀有るものなり。繰糸中の繭糸本数を一定に管理して生糸の太さを揃えることをいう(意識)」と一本の生糸を繰糸するに定めた繭糸本数を常に保持して生糸の太さを管理する、定粒繰糸の粒付管理の用語でした(図 9.7)。

(7) 統 — 繰糸工程の管理 —

統合・統計・統制・統一の「統」もよく使われる糸偏文です。『説文解字』は「統は紀なり」、諸橋の『大漢和辞典』は「親糸の繭糸の一つに会するところ(生糸)」と述べ、統は「生糸を構成する繭糸数を規定し、各繭糸の糸筋を正して生糸節の発生を管理する等、繰糸行程全体の管理法」を示す技術用語(意識)と述べています(図 9.8)。

3. 殷代の繰糸法 — 古代の技術語の語る —

殷代の終りころ出現した甲骨文、金文を用いて、輸出生糸づくりの近代の五粒付定粒生糸繰糸法を表現します。

煮まゆの煮上がり状態（素）からほど良い煮繭を定め、索緒・抄緒してカイコの吐き初めの糸くち（緒）の出た正緒繭（亂・乱）を集め五粒付け定粒繰糸（糸）づくり（繰）に入る。繰糸（繰）途中で一本の繭糸（忽）が切れると直ちに接緒（給）し、定められた繭五粒づけの生糸（糸）が繰られるよう管理する（紀）。常に生糸を構成する繭糸（忽）の糸筋を正しく整え（紀）、繰糸行程全体に目配りし統括管理しつつ運営（統）する。

近代製糸を代表する輸出五粒づけ定粒繰糸法が{素・亂・糸・繰・忽・絲・給・紀・統}の三千年以上前につくられた製糸技術語で表現できました。このことは、殷代すでに蚕糸業は社会の重要産業の位置を占め、技術が文字化されるほど広く普及していたことを窺わせます。

【紀】
9
いとすじのり・しるす

篆文 紀
金文 紀
その他 紀

形声 声符は己。己は糸をくりとる器の形。「説文」十三上に「絲の別あるなり」とあり、糸すじを分かつ意とする。「礼記、礼器」に君子の礼を論じて「衆の紀なり。紀散ずれば衆亂る」といい、その【鄭玄注】に「紀は絲縷（糸すじ）の數の紀有るものなり」とあり、糸数をそろえてまとめることをいう。ゆえに紀綱・紀統の意を生じ、また年に及ぼして紀元・紀年という。歴史の叙述において、ことこの経緯・本末を明らかにするものを紀事・紀事本末のようという。

図 9.7 紀は粒付け管理の意
（『字統』）

【統】
12
トウ
すべる

篆文 統
形声 声符は充。充は穿母の音。充に出に黜の声があるのと同じ。充は人の腹部の充盈する状で、充実の意がある。「説文」十三上に「紀なり」とあり、衆糸の集まることをいう。その系統をただし、全体を統撰・統理し、統括し、統一するをいう。綱紀を総べ、一統を立てて、万物みな一に帰するを統という。

図 9.8 統は繰糸工程の総括管理の意
（『字統』）

第X章 絲文字(3) 生糸は古代産品の首位 一糸偏文の独り言一

漢字の文字数に注目します。『説文解字』には九千三百五十二字、清代の『康熙字典』は四万七千三十五字、近年刊行の『漢和大辞典』には五万六千字以上収蔵されていると聞きます。時代に伴い文明はさらに開花し文化は進化し新しい文字が生まれています。ここでは糸偏文字数を通し、殷代における蚕糸業の位置づけをみたいと思います。

1. 糸偏文はシルク文字

初めに、甲骨文の造られた殷代のシルクへの注目度を、糸偏文の数とその語意に尋ねたいと思います。

(1) 純

純潔、純粹の「まじり気のない極めて潔白、心にけがれがなくきよらか」などに使われる「純」はシルクに直接関係ない文字と思われがちですが糸偏文です。しかも『説文解字』は一言で「純は絲(生糸)也」といっています(図10.1)。『漢和辞典』は「繭からとったままの糸、ひいてまじりけがない」意といっています。「純」本来の意は生糸そのもの示す文字でした。

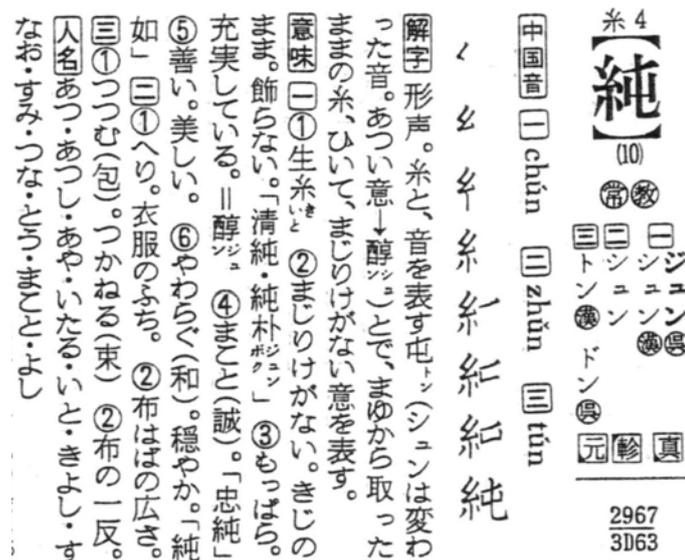


図 10.1 純文字(旺文社・漢和辞典)

(2) 紙

紙は植物繊維を煮て分散させ、それを漉いてつくるものでシルクとは関係ない文字なのに糸偏文です。『説文解字』、『後漢書』は「紙は真綿づくりの副産物で、屑繭・屑糸などを水中で叩き引き延し真綿にするとき千切れ水中に分散した繭糸を漉いた薄い敷物(紙)と

説明しています。元興元年（西暦百五年）、宦官の蔡倫が草や木の皮を材料に製紙法を發明してから安くて大量に作れる植物繊維の紙が広く流通していますが、文字はそのまま真綿紙の「紙」が使われていると伝えられています。紙は前漢時代までの人と深くかかわってきた真綿の副産物に名付けられた糸文字でした（図 10. 2）。

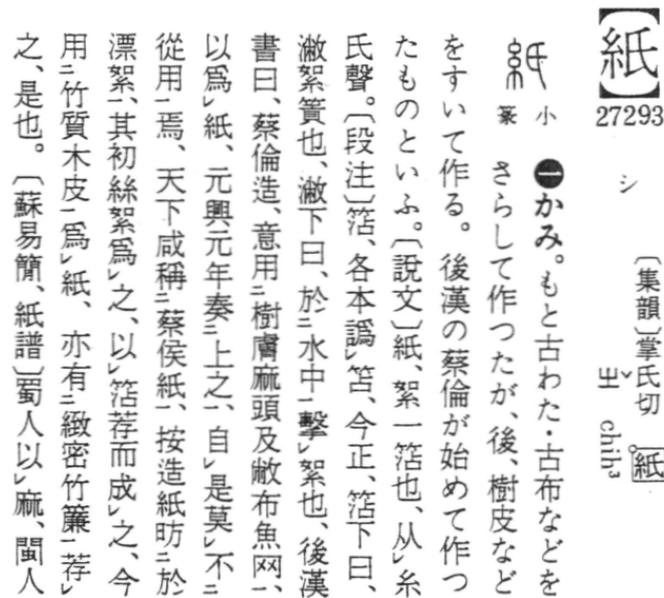


図 10. 2 紙は真綿づくりの屑糸を漉いてつくる
(諸橋・大漢和辞典)

(3) 索

繭からカイコの吐いた糸緒を索す「索緒」も糸偏文字ですが「草の莖や葉などを縄ない太い縄づくり」と辞典は伝え、シルク文字ではないのです（図 10. 3）。『説文解字』にその矛盾を尋ねると糸偏文に「索」はなく、探し尋ねると「南」文字の横に並んでありました（図 10. 4）。

(4) その他

シルクと関係ないと思われる糸偏文の検証を手元の辞典でしました。一例を次に記します。

- 絶・糸（生糸）と刀。刀で糸束を切る意。
- 総・糸を束ね一ヶ所で締め垂れ下げた飾り。転じて集め束ねる。すべて等の意。
- 編・文字を書いた竹簡を糸でつづり合わせる意。また編むの意。

で概括すると、糸偏文は糸文字とみてよいようです。

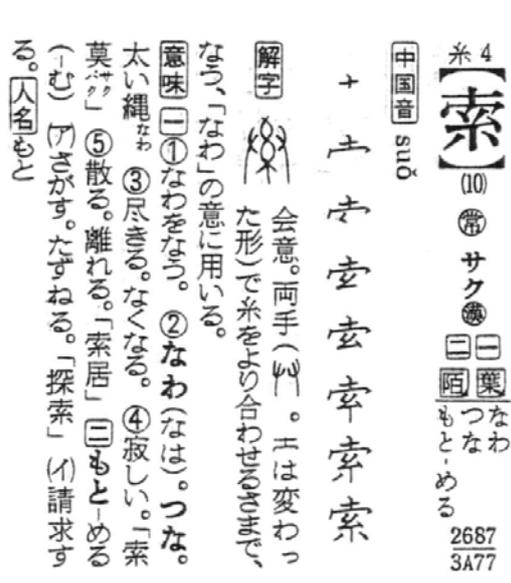


図 10.3 索は糸偏文字でない
(旺文社・漢和辞典)



図 10.4 許慎原著・徐鉉等校定
『説文解字』の「索」文字

2. 生糸は古代産品の首位か

漢字は一語が固有の意味をもっていますから、字数は意味世界の広がりや深さを表すと考えることができます。漢字辞典は『説文解字』をはじめとして部首で漢字を分類し利用者の便を図っています。同一部首の文字には、人間社会の親類縁者に似た共通の意味を含んでいるので、手許の説文解字・康熙字典・漢和大辞典（諸橋徹次）・漢和辞典（阿部吉雄）・現代中日辞典（香坂順一ら）について部首別文字数の相対度数分布を作成しました（表 10.1）。辞典により部首により変化がみられるので部種別相対比率の平均値を求め、大きさの順に上位十位を並べると、図 10.5 のように、「水・木・草・手・口・人・糸・金・（忄・心）」がえられました。自然物の（水木草）、身体に関わる（手口人）、工業産品の（糸金）次に（忄、心と言）となります（図 10.5）。もし文字数の多少が人間生活との関わりの程度を示すと仮定すると、糸偏文字数は金偏をこえて、古代産品の首位の座を占め、三千年前の殷代すでに産業・経済などの分野で主要な物づくりの役割を演じていたことを窺わせます。

表 10.1 部種別文字数の順位表

辞典	灬 (水)	艸 (草)	扌 (手)	心・忄 (心)	亻 (人)	糸	言	木	女	金	口
説文解字 度数 (文字)	487	471	278	278	267	266	261	260	245	204	199
順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
阿音苑辞典 度数 (文字)	366	267	269	265	257	184	182	377	117	132	245
順位	2	3	4	5	6	8	9	1	11	10	7
三省堂漢和辞典	1	3	4	(9)	6	7	10	2	—	8	5
角川漢和辞典	1	3	4	5	7	8	9	2	—	10	6
光生館中日辞典	3	5	2	(10)	6	7	8	4	—	9	1

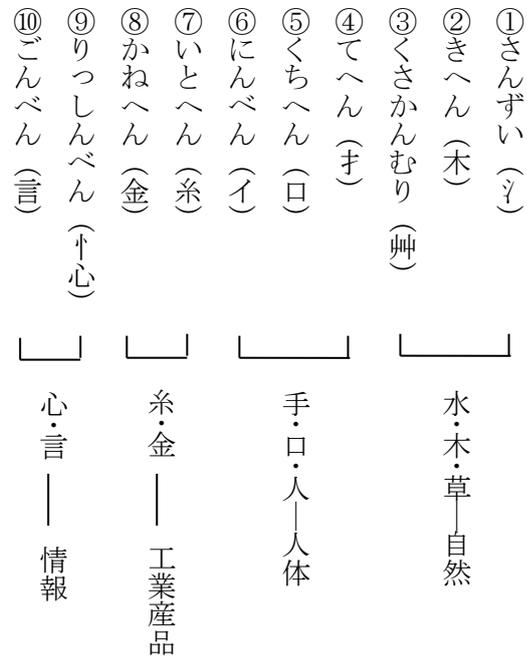


図 10.5 糸偏文字数は上位 7 位(真綿の文化誌)

第Ⅺ章 七夕（１） 一乞巧奠一

里芋の大きな葉に溜まった、少し粘り気のあるころころ転がる朝露を集めて墨をすり、折り紙に願い事を書き笹の葉に吊した七夕祭は、幼ない日の楽しかった思い出のひとつです。しかし七夕を「たなばた」ということや、天の神様に手習の上達を願うなど、七夕様には不思議な思いをしました。ここでは、その七夕様をとおした絹文化を垣間見たいと思います。

1. 乞巧奠

はじめに、三千年以上昔からという、中国の機織りや裁縫の上達を願う祭り、乞巧奠の言い伝えを、金銘子編文（1991）の『中国傳統節日及傳説』にある岳海波の「七夕的傳説」にみたいと思います。

牛郎

伏牛山と呼ばれる山の麓に、ふたりの親を早く亡くし兄夫婦に養われていた賢い少年がいました。兄嫁は厄介者の少年にいつも辛く当たるのですが、少年は朝早く起き「沢山の牛を連れて山に登り、夕方は柴を背に牛と帰る」厳しい仕事を真面目に黙々と励んでいました。村人はそうした少年を牛郎と呼んでいました。歳月は過ぎ立派な青年になった牛郎は古びた一間だけの小屋と年老いた一頭の牛とを分けて貰い独立しました（図 11. 1）。

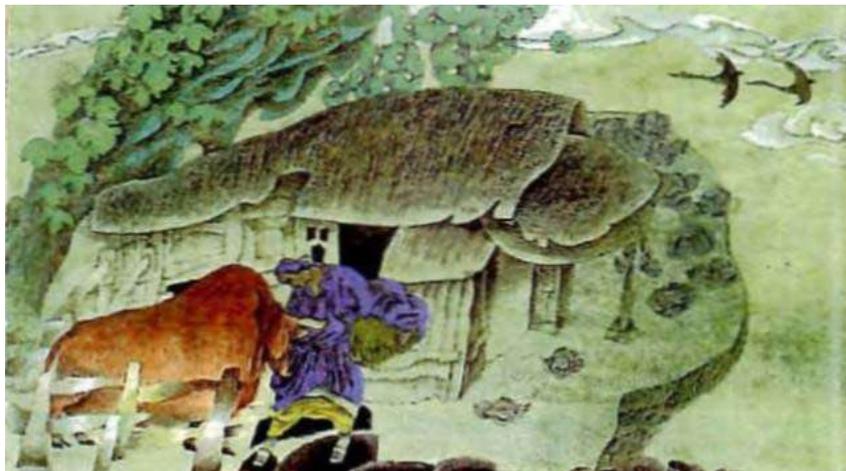


図 11. 1 牛郎は古びた小屋と老牛をもらい独立しました。

仙女飛来

ある日、牛郎は老牛と不思議な森に迷いこんでしまいました。緑の山に囲まれた美しい湖のある夢の国のような森でした。そのとき天から薄い絹の衣を着た仙女たちが湖に下り立ち、五彩の天衣を脱ぎ捨て水浴びを始めました（図 11. 2）。



図 11.2 仙女が湖で水浴を始めました.

美しい妻

牛郎は一番年下の美しい仙女を一目見たときから夢心地になってしまいました。突然老牛が「仙女は天上の織姫たちだ。その子の天衣を隠し妻にするのだ」と人間の言葉で言うのでした。昼近くになり皆は天に帰っていきましたが一人年下の仙女は残されました。牛郎は妻になって欲しいと熱心に頼みました。誠実そうな凜々しい青年をみて天上に戻れぬ仙女は承諾しました (図 11.3-11.4)。



図 11.3 老牛が人間の声で「天衣を隠し妻にしろ」といいました.

機織り

牛郎は老牛と外での野良仕事、美しい妻は家で絹機織りをする平和な生活が始まりました。互いに敬い愛し合い一男一女に恵まれ月日が過ぎました。織女は賢く、織り出す絹は煙か霧のように薄くて軽く、美しい錦は五色に輝き国中の評判になりました。伝え聞いた村々の娘さん達は競って巧わざの教えを乞こうのでした。織女は誰にも親切に優しく教え導くのでした (図 11.5)。



図 11.4 年下の織女は天衣をなくし, 留まり, 牛郎の妻になりました.



図 11.5 年下の織女は誰にも親切に織り技術を教えました.

離別

幸せは長く続きませんでした。織女が人間界の嫁になったことを知った天帝は大変怒りました。七月七日、命を受けた王母娘おうぼじょうは天兵を連れ織女を天上へ連れ戻すのでした。牛郎は一人ずつ子供を竹籠に入れ扁平な天秤棒で両肩に担ぎ、天上へ追いかけてきました。牛郎を見つけた王母は金の簪かんざしを牛郎の足下へ投げつけました。するとそこに一筋の水が湧き出し、やがて天の川となるのでした (図 11.6-11.7)。

再会

遠い川向こうの母を見て泣く子供たち。広い川に隔てられ声も届かず嘆く織女。天上の霊れい鵲じゃくたちは天の川にかきさぎぼし鵲橋を架けるのでした。親子は橋のなかほどで会うことができました。王母も七月七日の一夜だけ再会を黙認するのでした (図 11.8)。



図 11.6 それを知った天帝は織姫を天上へ連れ戻すのでした.



図 11.7 牛郎は子供を竹籠に入れ妻の後を追いかけるのでした. 鵲は天の川に橋をかけ親子の再会を助けるのでした.



図 11.8 天帝も七月七日の一夜だけ再会を許しました. 天の川の東に牽牛星, 西に織女星が輝いているがこれは牛郎と織女と語り伝えています.

牽牛星と織女星

陰暦七月七日ごろになると美しい天の川が見えます。その川の東に二人の子を平たい天秤棒で担いだ肩担星とも言われる牽牛星が見えます。また、天の川の西南の岸に緯糸通しの杼に似た四個の星を従えた、ひときわ明るく煌めく織女星がみえます。人々はこの二つの星は星になった牛郎と織女と語り伝えています。

乞巧奠

中国では昔から七月七日の夜は、瓢箪棚や糸瓜棚の下で耳を澄ませると、天上から子供の泣き声が聞こえると言い伝えられてきました。

七月七日の夜は三々五々子供たちは誘い合って糸瓜棚の下に集まり、母や祖母から聞いた牛郎や織女の物語をひそひそと語り合うのでした。

人々に分け隔でなく親切に機織りや裁縫を教えてくれた、優しく美しかった織女に感謝するために七月七日を乞巧奠(七夕祭)の日としてお祭りをするようになりました。また、母親たちはその日には、日ごろから作り貯めた自慢の作品を持ち寄り、互いに作り方の情報交換をしたりして、織女への感謝を表すのでした。

後漢の応劭撰『風俗通義』や梁(500~556)の宗懐撰の『荆訴歳時記』にはこの乞巧奠のことが詳しく語られているとのこと。

2. 七夕物語は三千年以上の昔から

牽牛・織女の物語は何時ごろからの話しか、中国最古の詩集『詩経』小雅の「大東」の詩(図11.9)は、

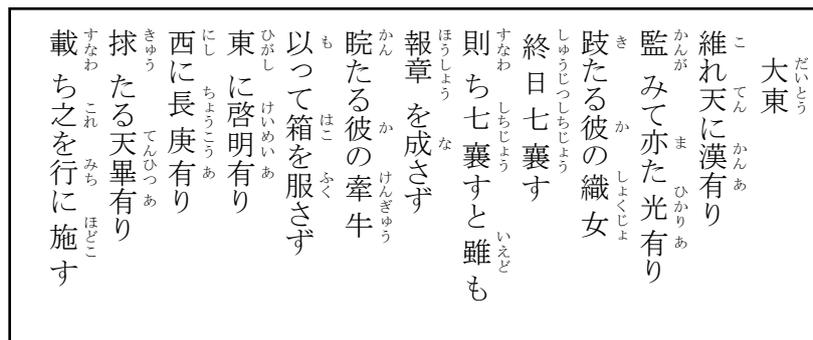


図 11.9 牽牛・織女の名が初めて見られる詩(詩経下. 学習研究社)

天上に天の川がキラキラ光っています
川辺で機おる織女 一日七回も忙しく繰り返すが
七回やり直しても絹機の模様織り(報章)が出来ない
対岸に煌めく牽牛星 お仕事の箱積みも気がそぞろ

東には明けの明星 西の空には宵の明星
其れを結ぶ道筋に 網を張る雨降り星 (後省略)

と歌っています。周王朝初期の詩と言われる「大東」に牽牛・織女が歌われていることは、三千年以上の昔すでに二人の悲歌は広く世間に語り継がれていたことを伝えます。そして、綺麗の語源を与えた、詩中に言う模様織り「報章ほうしょう(綺き)」の絹機技術は、腕は確かでも、精神を集中しないと織れない難しい機織りであることをまた伝えています。

2. 燕歌行 (抄)

三国時代、魏の初代皇帝曹丕（西暦 181 年-226 年）は、北征して戻らぬ夫を思う兵士の妻の気持ちを燕歌行（七夕歌）に詠んでいます。長い詩なので関係のところだけ載せます（図 12.2）。

なぜ君は何時までも他国にとどまるのか。私は寂しく空房を守っている。
君を思えば憂い積もり涙は落ちて衣装をぬらす。
耐えかねて琴を爪弾けば、澄んだ音に胸塞がり跡切れて唄にならない。
名月皎皎として独床を照らし、天の川はすでに西に傾く。
牽牛星と織女星は川に隔たれ遙かに見つめあうだけ。
貴方達は一体どんな罪を犯し、そんなに辛い運命を負わされたのか。

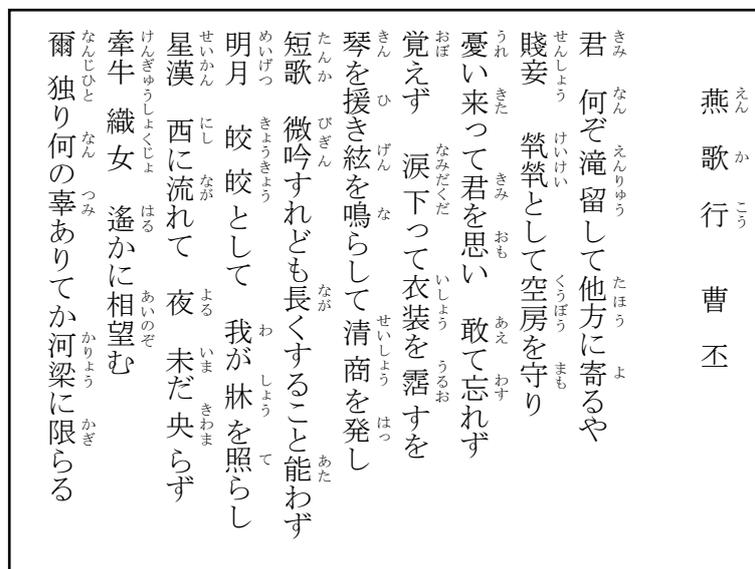


図 12.2 七夕を詠った魏の初代皇帝の詩
(中国名詩選. 岩波文庫)

3. 七月七日夜 牛女を詠む

謝惠連（西暦 397 年-433 年）の「牛女を詠む」の詩は、「七夕」詩の中でも二人の思いを格調高く詠んでいる事で有名といわれています。前唱句を省略し図 12.3 に読み下し文（学習研究社、『玉台新詠』）をのせます。

天の川に牽牛と織女が見える。この二星は一年に一夜しか逢えないという。
遥かなる広い川は二人を引き裂き、長い渚は清らかな影を隔てさせる。
織女は機織りの杼を操るが、心は乱れ模様織にならない。
さあ、再会の秋が巡ってきた。しかし、それもたったの一夜。

手綱をあげて車は急ぎ行く。ああ、天の川の運行はなんと速いことか。
織女の竜車は早くもかえっていく。ただ寂寥として雲の帷とぼりは垂れて。
織女は名残惜しく寝所を顧み、竜駕に身を委ねる。

二墨を哀れみ、物思いに沈めば、心はいよいよ重くなる。

(名文で要約は難しく 読み下し文から汲みとって)

七月七日夜しちがつなのかよるきゆうじよ牛女うしめを詠むよ 謝惠連しゃけいれん
 落日らくじつは欄檻らんえいに隠れかく 升月しょうげつは房櫳ぼうろうを照らすて
 团团だんだんたり葉はに満みつる露つゆ 析析せきせきたり条えだを振はらう風かぜ
 足あしを蹀ふみて広除こうじよに循したがい 目を瞬またたかせて層穹そうきゆうを曬みる
 雲漢うんかんに靈匹れいひつあり 年としを弥わたりて相従あしたがうことを闕かく
 遐川かせんじつ暉あを阻へだて 脩渚しゆうしよせい清容せいようを曠とおくす
 杼ちよを弄ろうするも彩さいを成なさず 轡たうなを聳あげて前蹤ぜんしやうを驚はす
 昔むかし離はなれてより秋あき已すでに兩ふたびなり 今いま聚あつまりて夕ゆべは双無そうなし
 傾河けいかは廻幹かいあつし易やすく 款顔かんがんは久ひさしく惊よろこび難がたし
 沃若ようじやくとして靈駕れいがかえ旋かえり 寂寥せきりやうとして雲幄うんあく空むなし
 情じやうを留とめて華寢かしんを顧かえりみ 心こころを遙はるかにして奔竜ほんりやうを遂おう
 沈吟ちんぎんして爾なんじが為ために感かんじ 情深じやうふかくして意いは弥いよいよ重おもし

図 12.3 七夕歌のなかで名文といわれる詩
(『玉台新詠』)

4. 七夕歌 (張 文潜)

元代おうげんの黄堅こぶんしんぼう篇『古文真宝』に、南朝けいそさいじきの『荆楚歳時記』「乞巧奠きつこうでん」を踏まえたといわれるもう一つの七夕物語、張文潜ちやうぶんせんの詩「七夕歌」(図 12.4) があります。蘇軾そしき(西暦 1036 年 -1101 年) が「故事来歴を踏まえている」と賞賛したと言うこの詩は、民間伝承の「乞巧奠」に対するもう一つの上流社会を舞台にした「七夕」物語といえるかとおもいます。

再び秋がやってきました。天の役人はかきさき鵲かきさきを召し集め、天の川に橋をつくらせました。もとはと言えば、天の川の西岸に天帝の子の織姫がいて、玉のような美しい指で、来る年も来る年も苦勞な機織り仕事に精をだし、天空に棚引くあの紫の薄絹を織っていました。

お化粧もせず苦勞の仕事を独り黙々と働き続ける織姫を哀れに思われた天帝は、

天の川の東岸で、牛を使って真面目に野良仕事に励む牽牛^{けんぎゅう}へ姫を嫁がせました。

ところが、新婚生活の楽しさに、機織^{はたお}り仕事をやめてお化粧ばかり。里帰りもしない二人を怒った天帝は、織姫を元の西へ連れ戻してしまいました。しかし、それではあまりにも可愛そうということで、一年に一度、陰暦の七月七日、鵲^{かささぎ}の渡した橋を渡って逢うことを許しました。

別れの時は長く、あう時間はみじかい。慌しい会う瀬で、思いの半分も言い尽くせないのに、銀河の役人は夜の明けぬうちにと、しきりに出発を促します。天帝の命令ばかりに忠実で姫の悲しみなど意に介しない。

悲しみの涙は尽きないようだが、姫よ、そう嘆きますな。天地は永遠に続くのだから、また逢う日がやってくる。あの不老長寿の夫の薬を盗んで月にとんだ常娥^{じょうが}が、毎夜独り月の宮殿で淋しく眠るよりは、まだ幸せですよ。

といい詩を閉じています。

このように後漢以後南北朝にかけて、国の公式行事に格上げされた「七夕祭」は、多くの詩人に注目され、文学の世界に華やかな彩りを与えるのでした。

ちょうどそのころ日本は中国へ遣隋使^{けんずいし}、遣唐使^{けんとうし}を派遣して国際交流を活発化する時期であり、七夕物語は日本の文化に大きな影響を与えるのでした。

人間一葉梧桐瓢	人間一葉	梧桐瓢	瓢
蓐收行秋回斗杓	蓐收	秋を行りて	斗杓を回らす
神宮召集役靈鵲	神宮	召し集めて	靈鵲を役し
直渡銀河橫作橋	直ちに	銀河を渡りて	横ざまに橋を作しむ
河東美人天帝子	河東の美人	天帝の子	
機杼年年勞玉指	機杼	年年	玉指を勞す
織成雲霧紫綃衣	織り成す	雲霧	紫綃の衣
辛苦無歡容不理	辛苦して	歡び無く	容は理めず
帝憐獨居無與娛	帝	獨居し	与に娛しむ無を憐み
河西嫁與牽牛夫	河西の牽牛	の夫に	嫁与す
自從嫁後廢織妊	嫁して	自從後	織妊を廢し
綠鬢雲鬟朝暮梳	綠鬢	雲鬟	朝暮に梳る
貪歡不歸天帝怒	歡びを貪りて	歸らず	天帝怒り
責歸却踏來時路	責め歸し	却つて	來し時の路を踏ましむ
但令一歲一相見	但し	一才に一たび	相見え令め
七月七日橋邊渡	七月七日	橋邊	を渡る
別多會少知奈何	別るる	多く會うこと	少なく知んぬ奈何せん
却憶從前歡愛多	却つて	憶う從前	歡愛の多きを
勿勿萬事說不盡	勿勿として	万事	說き盡さざるに
玉龍已駕隨義和	玉龍は	已に駕し	義和隨う
河邊靈官催曉發	河邊の靈官	曉に	催せんと催し
令嚴不肯輕離別	令嚴にして	肯せず	離別を輕んず

図 12. 4-1 七夕歌・張文潜(古文眞宝)



牽牛織姫七夕図（白倫）

便將淚作雨滂沱
 淚痕有盡愁無歇
 我言織女君莫歎
 天地無窮會相見
 猶勝嫦娥不嫁人
 夜夜孤眠廣寒殿

便ち涙將て雨の滂沱を作し
 淚痕尽る有るも愁は歇むこと無し
 我言う、織女よ君歎く莫れ
 天地は無窮、会ず相見えん
 猶嫦娥の人に嫁せずして
 夜夜孤り広寒殿に眠るに勝れりと

図 12. 4-2 七夕歌・張文潜(古文眞宝)

第 XIII 章 七夕(3) ー日本の棚機ー

日本にも、神話の時代から中国の「七夕物語」に似た「棚機物語」があったようです。推古八年（西暦 600 年）から宝亀六年（775 年）の間に行われた十五回に及ぶ遣隋使・遣唐使などの交流のなかで、棚機は中国の影響を受けて現在の姿へ推移してきたようです。幸なことに、奈良時代の万葉集（759 年）は万葉がなという漢字の表音かな遣いで示され、平安時代（913 年）の古今和歌集や鎌倉時代（1205 年）の新古今和歌集はひらがな表示です。七夕歌が棚機の歌に及ぼした跡をみることができそうです。ここでは日本の棚機物語りの歩んだ経緯を尋ねるなかに絹文化の一面を窺いたいと思います。

なお、本文中括弧の数字は小学館発行の『日本古典文学全集』の歌番号です。

1. 万葉集の時代 ー和風・漢風混在の棚機ー

「たなばた」の名前が初めて見られるのは、天照大神が天岩戸幽居のとき、天棚機姫神が「和衣」という柔らかく美しい絹づくりの神衣を織り奉った項の所です。棚機姫は天八千々嬪神といわれ高皇産霊神・神皇産霊神の子で高貴な一族の姫でした（図 13.1）。『古事記』には、天照大神の命を受けて天下った天若日子の葬儀のとき歌われた「天上界の於登多那波多（弟棚機）の項の首飾りの玉」があります。いずれも遠い神話の時代のことで棚機姫には美しい女性の姿をうかがえます。

奈良時代の万葉集には、遣唐使として入唐し慶雲四年（707 年）ころ帰朝した山上億良の「七夕の歌十二首」をはじめ山部赤人・柿本人麻呂など多くの人々による百三十二首ほどの棚機の歌がみえます。

織女と彦星

日本では古事記・日本書紀に「天なるや弟たなばた」の表現がみられ、機織り女性のところを訪れる男性とが契りを結ぶ古代伝説があり、この上に中国の七夕伝説は根を下ろしたといわれています。それを受けて万葉集では、「天照大神が統治している天上界の高天原では安の川を中に隔て向い合い、袖振り合い恋しく嘆く二人よ。渡し守は舟も用意してくれず、橋があれば渡って語りあうこともできよう。

第四節 天棚機姫神（天八千々嬪神）
附 機織諸祖神

天照大神天岩戸幽居の時 諸神種々の布帛を奉った すなはち
下枝懸一以栗國忌部遠祖天日鷲所作木綿云々（日本書紀卷一 一書日籙）

令三長白羽神種一麻以為青和幣一令三天日鷲神穀木種殖以作一白和幣一令三天羽槌雄神織一文布一
令三天棚機姫神織一神衣一所謂和衣也（古語拾遺）

などとする 天日鷲神は高皇産霊神 神皇産霊神の曾孫 即ち手力男命の子 長白羽神 天羽槌
雄神はともに天日鷲神の子である 天棚機姫神は高皇産霊神 神皇産霊神の子である

図 13.1 棚機の最初の記録
天棚機姫神. 村島渚(1933). 蚕神
考. 明文堂. 東京

なぜ秋に一夜の逢瀬か。うつせみの私達も不思議で、天の原を振り仰ぎ語りぐさにしている」とのべています(図 13.2・13.3)。また万葉がなは「織女」を「たなばたつめ」、「牽牛」を「ひこぼし」と読ませています(図 13.4)。天平八年(736年)、新羅大使として出発し、その帰路対馬で没した阿倍継麻呂の、歌番号(3657)は彦星を「比故保思」と万葉かなで記しています(図 13.5)。男子名によくある「彦」は「日子」の意で、優れた男子の美名とのことです。

4125
 天照らす 神の御代より安の川 中に隔て
 て 向かひ立ち 袖振りかはし 息の緒に
 嘆かす児ら 渡り守 舟も設けず 橋だにも
 渡してあらば その上ゆも い行き渡らし
 七夕歌一首并短歌

4125
 臣麻泥良須 可未能御代欲里 夜州能河波
 之 伊吉能乎尔 奈加加須古良 蘇泥布利可波
 布祢毛麻宇气受 波之太尔母 和多之弓安良波
 曾乃倍由母 伊由伎和多良之

図 13.2 万葉集には棚機物語が天照大神の時代からあったと伝えています。(詩抄)

1529
 彦星は 織女と 天地の 別れし時ゆ いな
 むしろ 川に向き立ち 思ふそら 安けなく
 に 嘆くそら 安けなくに 青波に 望みは
 耐えぬ 白雲に 涙は尽きぬ かくのみや
 牽牛者 織女等 天地之 別時由 伊奈牟
 之 河向立 思空 不レ安久尔 嘆空
 不レ安久尔 青波尔 望者多要奴 白雲尔 滯
 者尽奴 加是耳也 伊伎都积乎良牟 如是耳也

図 13.3 万葉がなは牽牛を「ひこぼし」織女を「たなばたつめ」と読ましています。

棚機は日本の風俗歌 一妻問婚一

牽牛、織女を「彦星、棚機津女」と読むことなど、棚機物語は中国の影響を強く受けていますが、詩趣は日本の風習を詠っています。例えば七夕歌では織姫が牽牛を訪ねていますが、棚機の歌は彦星が棚機津女を訪ねる妻問婚で、中国と日本の風習の違いを見せています(図 13.6)。

万葉集時代の棚機の歌

万葉集に収められた詩歌の詠まれた頃の中国は玄宗皇帝治世の盛唐期と重なります。そうした華やかな中国文明の影響を受け日本の文明もまた近代化した時でした。棚機の詩歌は山上憶良の帰朝から十数年経た「神亀元年(724年)7月7日に左大臣長屋王の宅にて」の歌会にみられるように王侯貴族の屋敷で詠まれ注目を受けます。天平勝宝七年(755

年)の七月七日、初めて清涼殿の庭で乞巧奠(たなばたまつり)が開かれ国の公式行事になり民間へ普及し詩歌の世界に定着して行くのでした。



棚機 ② <奥村政信画>

図 13.4 棚機. 日本大辞典刊行会編 (1980)小学館. 引用

<p>▼一年に 一夜だけ妻に逢う 彦星も わたしにまさって 物思いすることがあるうか</p>	<p>3657 母 和礼尔麻佐里弓 於毛布良米也母 等之尔安里弓 比等欲伊母尔安布 比故保思</p>	<p>3657 年にありて 一夜妹に逢ふ 彦星も我にまさりて 思ふらめやも</p>
--	--	---

図 13.5 阿倍継麻呂. 天平八年(736年)の彦星(比故保思)表示.

<p>1527 霧之立波 彦星が 妻迎え舟を 漕ぎ出したらしい 天の川原に 霧が立っているのを見ると</p>	<p>1527 牽牛之 迎レ 嬬船 己芸出良之 天漢原尔 霧の立てるは 彦星し 妻迎へ舟 漕ぎ出らし 天の川原に</p>
--	--

図 13.6 万葉集では、日本上代の風習による。彦星が織女を訪ねる妻問婚です。

2. 古今和歌集の時代 一万葉かなからひらがなへー

古今和歌集は平安初期、延喜五年（905年）後醍醐天皇の勅命で紀貫之・紀友則らの撰で編纂された延喜13年（913年）成立の一千一百一首ほどの平安期最初の勅撰和歌集です。詩歌は、例えば古今仮名序に「たらちめの 親のかう蚕の繭こもり いぶせくもあるか 妹に逢はずて」のように、ひら仮名遣りの歌です。歌風は優美繊細で理知的で後世に大きな影響を与えたといわれます。その三首を図13.7～13.9に示します。

万葉集と同じく漢字の七夕・織女を「たなばた」と読ませています。が牽牛や彦星の影がうすれてきます。

3. 新古今和歌集 「たなばた」表示は「七夕」に統一

新古今和歌集は鎌倉初期の、八番目の勅撰和歌集で歌数二千首、後鳥羽院の院宣により藤原定家などが撰し元久二年（1205年）成立しています。西行、式子内親王、藤原俊成・定家などの歌人の歌が含まれており、耽美的・情趣的傾向が強く、八代集の一つといわれます。

新古今和歌集では「七夕」を「たなばた」と読ませ、そのルビも無くなり、「たなばた」は詩の世界では漢字の七夕に統一されるのでした。また詩趣も万葉のいう牽牛織姫の世界から離れ詩者の情趣的表現を助ける例が多くなっています。事例を図13.10～13.13にのせます。

175	175
訪れる季節として 秋を特に待っている	天の川紅葉を橋にわたせばや七夕つめの秋を しも待つ
	詠み人知らず

図13.7 古今和歌集のひらがな遣いの七夕(1)

179	179
年一度逢つてはいるけれど それでは何といった つて たなばた姫が夫とともに寝る夜の数は少ないも のだ	七日の日の夜よめる 年ごとにあふとはすれど織女の寝る夜の数ぞ すくなくりける
	凡河内躬恒

図13.8 古今和歌集の織女と「たなばた」の詩

181	181
題知らず	題知らず
今夜私をお訪ねくださる方には 私は逢わないだろう うっかり逢うと 今後たなばた様のように長い間待つ ことはあっても 本当に逢えなくなるだろうから	こよい来む人にはあはじたなばたのひさしき ほどにまちもこそすれ
素性法師	そせい

図 13.9 古今和歌集のひらがな遣いの「たなばた」の詩

317	317
祭主輔親	祭主輔親
雲の切れ目から星合の空を見渡すと 落ち着かない で立ちさわいでいる天の川の川波よ 「しづ心なき天の川波」に 星合の時の近づくの にときめいている作者の心が生きている	七月七日に 七夕祭をする所で詠んだ歌 雲間より星合の空を見渡せばしづ心なき天の 川波
祭主輔親	〔輔親集〕

図 13.10 七夕の固有名詞が星合になる

319	319
小弁	小弁
夫である彦星の着物の裾は 気をつかって 吹き裏 返すなよ そうして帰すなよ 秋の初風よ 掛詞の技巧は抒情の支障になっているが 織女星の 心を思いやっているところ 作者のやさしさがうか がえる 「いく秋書きつ」に無限の思いを込め「露」 にはかなさをきかせ 哀艶な歌境にしている	七夕の衣のつまは心して吹きな返しそ秋の初風

図 13.11 彦星の名が表に出ない詩

321	321
式子内親王	式子内親王
しみじみと見守っていると わたしの袖のあたりも 涼しい 七夕の星の逢う天の川原の秋の夕暮れよ 星合の夜を迎える夕暮れの空を見守っているうち に いっしか 涼しい天の川のほとりにいるよう な感じになったのである 自然な美しい抒情	ながむれば衣手涼しひさかたの天の川原の秋 の夕暮
式子内親王	〔式子内親王集〕

図 13.12 天の川が天の川原へ

<p>323</p> <p>星合いの夕暮れ 涼しい天の川よ 星の渡る紅葉の橋を今 秋風が吹き渡っている</p> <p>を今 秋風が吹き渡っている</p> <p>本歌で想像した天の川の紅葉の橋を眼前にした趣 その橋を夕暮れの秋風が涼しく吹き渡るのほ 美しくはかない星合の夜を暗示し 余韻がある</p>	<p>323</p> <p>七夕の心を</p> <p>権中納言公経<small>ごんちゆうなごんきんつね</small></p> <p>星合いの夕べ涼しき天の川紅葉の橋をわたる秋風</p> <p>「七夕」の趣を 権中納言公経</p>
---	--

図 13.13 七夕は二人の棚機の世界から普遍化へ

第 XIV 章 桑葉の薬効(1) 一桑は仙薬の上首一

カイコは、三週間ほどの幼虫期に桑の葉六・七枚を食べ千五百メートルほどの細糸を吐いて硬い繭まゆという巢を作り、その中で蛹さなぎとなり雨露や天敵から身を守り羽化を待ちます。

桑の木は、湿地帯でも乾燥地でもまたやせ地でも育ち、南緯十度から北緯五十度の広い地帯に分布する環境の変化に強い樹木です。中国の『神農本草』の中品には桑の薬効が記され、そこには「天魔も避けて通る霊木」と伝えているとのことです。

承元五年（西暦 1211 年）栄西著『喫茶養生記』はまた『茶桑経』ともいわれ、多くの中国医薬書を基に栄西の経験を加え茶や桑の薬効を詳しく記しています。いまの時代の目でみると科学的でないとか迷信的といわれる表現も多々ありますが、ここでは故押金健吾おしがねけんご信州大学教授から贈られた井出二三子著『喫茶養生記之研究』（図 14.1）とその寿福寺本じゅふくじを中心に桑の薬効をお伝えします。

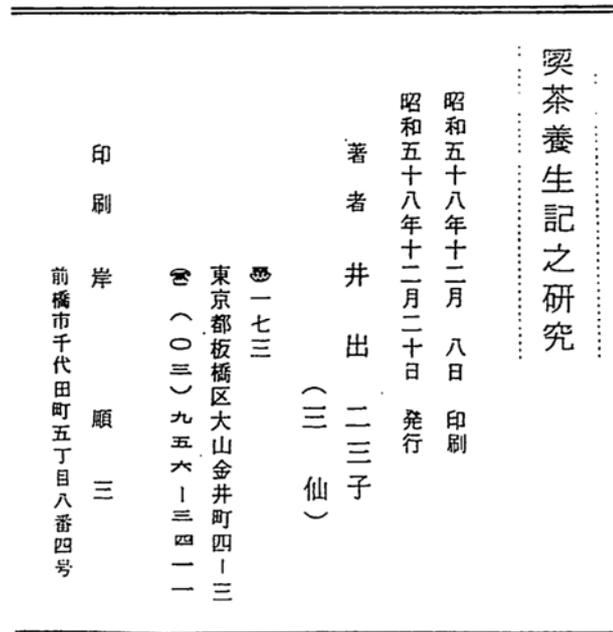


図 14.1 本文の主要参考書

栄西権僧正

栄西和尚（1141-1215 年）の生家は、備中国（岡山県）吉備郡吉備津神社の神官で、和尚は永治元年四月二十日出生、十才で安養寺に入門し十四才で比叡山で落髪しました。また伯耆国大山の基好上人ほうきのくにだいせんのもとで密教みつきょうを修め、さらに比叡山の顯意上人に師事し密教僧として頭角をあらわしてきました。二十八才で初めて中国に渡り半年たらずで帰国、その

後再入宋し天台山万年寺で虚庵懷敞上人に師事し印可を受け建久二年（1191年）七月帰国しました。和尚は九州筑前（佐賀県）背振山で持参した茶種の栽培を始め布教に努め正治元年（1199年）鎌倉に下り、頼朝一周忌仏事の導師をつとめました。さらに正治二年、北条政子から亀ヶ谷の土地の寄贈を受け寿福寺を建立し、健保元年（1208年）権僧正に任ぜられ、同三年六月五日、寿福寺で天命に伏しました。『吾妻鏡』によると、鎌倉幕府三代将軍源実朝（1192-1219年）に酒毒の良薬として「桑・茶」の効用と服用法を詳しく記した中国の薬書と自己の経験に基づく著書『喫茶養生記』承元五年辛未春正月一日（1211年）を献上し病の快癒に尽くしたと記されています。荣西和尚は、日本臨濟宗の始祖として、また茶祖として崇敬されています。

喫茶養生記

本書は源実朝への献上にあたり書き添えた序文と茶の薬効を述べた「五臓和合門」と桑の薬効を記した「遣徐臙魅門」とから構成されています。

序文

茶は現世における養生の仙薬で人の寿命を延す妙術です。人生にとって最も大切なことは健康に過ごすことで、その源は五臓（肝・心・脾・肺・腎）を健全にすることです。「五臓のなかで一番重要なのは心臓で、その心臓を健全にする妙術はほかでもありません、茶を飲むことです。『神農本草』にはじまる中国の医薬書を調べ、その訳を第一、五臓和合門（茶）と第二、遣徐臙魅門（桑）の二門に分けて説明します」と記しています（図 14.2）。

卷上 五臓和合門

「尊勝陀羅尼破地獄儀軌秘鈔」はつぎのように記しています。

1. 肝臓は酸味を好む
2. 肺臓は辛味を好む
3. 心臓は苦味を好む
4. 脾臓は甘味を好む
5. 腎臓は鹹味を好む

また、五味は

酸味はみかん、橘、柚酢のもつ味

辛味はしょうが、こしょうなどのもつ味

甘味は砂糖のもつ味

苦味は茶、青木香等のもつ味

鹹味は塩のもつ味

です。養生の基は臓器が好む五味を調和よくとることです（五臓和合）。四味は平常の食べ物からとることができますが心臓の望む苦味はそうはいきません。「五臓曼茶羅儀軌鈔」^{ごぞうまんだらぎきしょう}には、

心臓は五臓の君主に例えられ最上位の臓器で、苦味は諸味の最高位です。身体が弱くなり意気消沈する時は心臓が悪くなったと考え心臓の好む苦みを持つ茶を頻繁に飲めば気力旺盛になり快復します。

と記しています。『養生記』巻上には、茶の効用、その採取、調整の時期など六ヶ条に分けて説明していますが省略します。栄西和尚はさらに

「中国では、昔から帝王は忠臣には必ず茶を与え、僧侶が妙法を説けば茶が施^{ほどこ}される慣^{なら}わしがありそれは昔も今も変わらないのです」

といて巻の上を閉じています。

巻下 遣除魑魅門

巻下のはじめに、

来世（現在）、人の寿命がわずか百才の時代になったのは、山林・沼沢^{しょうたく}の精気からできる怪物、魑魅魍魎^{ちみもうりょう}が人を悩まし、国土を乱し諸々の病気をおこし広めているからです。このときこそ「大元師大将儀軌秘鈔」のもとにかえって、その本願を念じその妙術治療法を行えば魑魅は追い払われ^{けんじょ}（遣除）諸病は治ります。「これは私が入宋した留学中に得た伝授に基づくもので、私勝手な考えによるものではありません。」

と書き記しています。その内容は詳しくお伝えしたいので十五章にゆずりますが、巻末に桑の薬効を次のよう集約しています。

そもそも桑の木は仙薬です。仙人には苦行仙^{くぎょうせん}と服薬仙^{ふくやくせん}の二つの型があります。苦行仙は僅かな米やわずかな粟で生きながらえる苦行を積んだ仙人です。服薬仙は諸薬を服用して長寿を保つ仙人です。その中で「最も長生きするのは桑木^{そうもく}を服用する仙人」です。

と述べ、『仙経』のなかの一文、

「一切の仙薬は桑煎を得ざれば服せず。先ず桑煎を服した後に諸々の仙薬を服す。以って桑はこれまた仙薬の上首なるを知る。茶と桑に高下無く、二つ並び服するは養生の妙術なり。」

と述べています。「桑と茶は甲乙付けがたいが、どんな仙薬も、初めに桑煎を飲むのでなければ諸々の仙薬の効用は顕れない。だから桑は仙薬の上首といわれる。病気の養生に桑木を用いるが、桑茶とお茶を一緒に飲むのは養生の妙術」といい巻の下を閉じています(図14.3)。

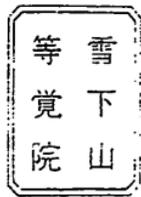
喫茶養生記卷上序
 入唐律師榮西録

茶也、末代養生之仙薬、人倫延齡之妙術也、山谷生之、其地神靈也、人倫採之、其人長命也、天竺唐土同貴重之、我朝日本昔嗜愛之、從昔以來、自國他國俱尚之、今更可損乎、況末世養生之良薬也、不可不斟酌矣、謂劫初時、人四大地、肉、骨、水、火、風、動、靜、力、堅固、与諸天身同、末世時、人骨肉怯弱、如朽木矣、針灸並痛、湯治亦不應乎、若好其治方者、漸弱漸竭、不可柏者欤、伏惟天造萬像、以造人為貴也、人保一期、以守命賢、貴也、其保一期之根源、在養生、其示養生之術計、可安五臟肝、心、脾、腎、肺、五臟中心臟、為王乎、心臓建立之方、喫茶是妙術也、厥忘心藏、則五藏無力也、忘五藏、則身命有厄乎、寔印土耆婆往而隔二千

図14.2 『喫茶養生記』序文. 茶は末代養生の仙薬なり.

耳、目、聽、明、令、人、光、澤、又、療、口、乾、矣、仙、經、云、一、切、
 仙、藥、不、得、桑、煎、則、不、服、云、先、服、桑、煎、後、服、諸、
 仙、藥、以、知、桑、是、又、仙、藥、之、上、首、乎、茶、與、桑、並、服、貴、
 重、無、高、下、二、俱、仙、藥、之、上、首、養、生、之、妙、術、而、已、此、等、
 記、錄、皆、有、所、又、稟、承、在、大、國、乎、不、審、之、輩、到、
 大、國、詢、之、無、隱、狀、今、依、仰、之、旨、錄、上、後、時、不、改、
 章、矣、

喫茶養生記卷下



承元五年未年正月三日、無言行法之次、自染筆
 謹書之、
 權律師法橋上人位榮西

図 14.3 佛經に云う、一切の仙薬は桑煎を得ざれば服せず。

第 XV 章 桑葉の薬効(2) ー桑葉の作り方ー

昭和十年ごろのことです。祖母の使いで街中の生薬屋さんへ、乾燥したセンブリやゲンノショウコ、ドクダミなどを求めにいきました。それらの土瓶で煎じた煮汁は飲んだり患部を浸したりしました。子供のころの薬といえば富山の置き薬か越後の毒消しに煎じ薬が普通でした。煎じ薬の独特な匂は、いまになると懐かしい思い出です。生菓を食べ口元におできが出来治らず困ったとき、ドクダミの煎じ汁を脱脂綿につけて一日三回ほど浸したら二・三日で跡形もなく治った薬効のすばらしさは忘れない驚きでした。ここでは悪病に効くという桑葉の作り方と使い方を『喫茶養生記』巻下を中心に紹介します。

1. 悪病と桑葉の効能

『喫茶養生記』巻下は、末世（現世）の悪病、飲水・中風・不食・瘡・脚気の五種をあげ、桑の効能を説明しています。

(1) 飲水病 ー糖尿病ー

飲水病は、いまの糖尿病ではないかといわれています。

水をいくら飲んでも渴きを覚え、飲むとすぐに小便にでて、また喉の渴きを覚える病です。濃味な旨い物の食べ過からおこる病で、塩からい物を摂るのは危険です。塩分を押さえて桑粥を服用すると数日で効き目が顕れます。一方、薤・蒜・葱は食べてはいけません。この病には、油っぽく、生臭い食べ物、野菜ではニンニク・ラッキョウなど匂いの強い辛味の葷腥品を避けることが大切です。

と説明しています。桑葉には多くのビタミンCが含まれています。昭和になってからのことですが、井上吉之ら（1938）は低温低圧下で乾燥した桑葉粉末を主成分に調製した試薬品を臨床実験したところ糖尿病が軽くなったと報告しています（桑の文化誌・千曲会）。一千年以上の昔、すでにそのことに気付かれていたことに驚かされます（図 15. 1）。



図 15.1 殷代銅器上の採桑図

(2) 中風

手足が心に従わない病気で、治療に針・灸はよくありません。湯治も危険です。

治療には桑粥と桑煎湯を服用します。髪や体を洗うときは、使う湯に桑を入れ、一・二桶で行水をし、数日に一度入浴します。湯加減は、汗が出ない程度のぬるま湯にします。汗が出るような熱い湯にすると食欲が落ち、よくないことがおこります。この病の治療は養生を長く続けることが大切です。桑粥と桑茶を飲みぬるい桑湯にゆっくり浸り気長に養生することをお勧めします。

(3) 不食病

この病はよくわかりません。卷の上に「心臓に病あるときは味が不調和になり、食べる
と吐き、時には食べ物を受けつけなくなります」とあり心臓病に関わる病かも知れません。心臓には桑の苦みが効きます。桑粥と桑煎を服用し続ければ効き目が現れます。と説明しています。

(4) 瘡病

瘡病は、癰・疔のような悪質のはれものでなく、ふきでもの総稱です。牛膝の根を突き砕いてその汁を腫れたところに塗り、乾けばまた塗るのがいいです。そうすると悪いところだけが一層はれ、そこから膿みが出て治ります。このときも養生に桑粥と桑湯を使用することが大切です。

(5) 脚気

中世では脚の病をすべて脚気といていたようで、いまのビタミンB₁の欠乏症とは違うようです。「この病は夕食の食べすぎの病で、朝は食べてもいいが午後は食を控えることです。これも養生に桑粥、桑茶を服用します。お茶との併用はなを効果的です。」と記しています。

2. 桑薬の作り方

『養生記』卷下は五種類の病に効く桑薬の作り方と服用法を詳しく述べていますので、ここではそれらの要約を記します。

(1) 桑粥の作り方、食べ方

『養生記』卷の下は、以上に述べた5種類の疫病のすべてに効く桑粥の作り方を次のように説明しています。

材料は一握りの黒豆と切りロ一寸、長さ三寸（小指ほどの大きさ）の桑枝。こ

の小枝を細かに裂いて、豆と一緒に三升の水に入れて煮ます。十分煮たら桑枝を除いて、米を一握り加え、浮き粥になるよう煮ます。

煮る時期ですが、夏は真夜中から、冬は午前二時から煮始め夜明けに煮終わるようにします。長い時間かけ煮た桑粥はいいですが、急いで煮上げたのは薬になりません。

服するときは、塩を添えず少しづつ小分けに食べ、その後お菜を食べます。これを毎日続けます。怠ってはいけません。桑の小枝はその年の新枝をつかいます。続けていくとだんだんと効果が現れてきます。

食べ方は、堅粥は効かないので注意して下さい。

と述べています。なお、文中の一寸は3.3センチメートル、一升は1.8リットルです。

(2) 桑煎の作り方

新しい桑枝を切り双六の賽さいのように小さく切って火にあぶります。木の角が焦げるほどにしたあと割って、それを三升から五升ほど袋にためておきます。日が経つほど効果がでます。煎ずるときは、水一升にその桑の木半合を入れてよく煎じた湯を服用します。桑木は生木のまま煎じてもいいです。桑煎茶そうせんちやは脚のむくみ、脚気、できもの、中風などの病気をすべてによく効きます。

(3) 桑抹茶の作り方と飲み方

『喫茶養生記』は「四月（陰暦）の初めに桑の葉を摘み日蔭干にします。九月になり葉三分の二が落ちたところで残った三分の一の葉（これを神仙茶と言いますが）を摘み日蔭干にします。干した葉は茶葉と同じように搗いて粉末にした後空気に当たらないよう保管します。服用は四月と九月の葉を秤で等分に計り一緒に合わせて服用します。量は、一寸四方の匙二、三杯に沸騰させた白湯を注ぎます。少し濃い目にたてるのがいいです。

と述べています。

桑茶は風邪や百日咳、高血圧の予防や滋養強壯剤として効用があるといっています。

(4) 桑の実の服用

桑の実くわいちごは苺に似ていることから桑苺とも言われ、熟すると紫紅色になり甘みがあり美味しいです。唐の陳臓器は、「桑椹そうじん（桑の実）、五臓、関節を利し血気を通ず。多く採取し曝さらし、末（粉）に搗き蜜を和して丸とし毎日六十丸を復すれば、白髪黒く変じ老いず」と伝えています。『喫茶養生記』は「桑の実が熟した時、日に乾かして粉末にした後蜂蜜を混ぜ丸めて桐の実ぐらいの大きさの丸薬とし保管します。空腹のときこれを三十丸お酒で服用します。毎日続けると体が爽快になり、病気にかかりません」と伝えています。

また、本草経の条中に桑の用途甚だ多いが、独り鳥榘（桑の実）を遣す。桑の精英尽くこの中にあり。（略）その汁を膏（ジャム）となし。食後また就寝時沸湯を注ぎ、服すれば口渴を治し、精神を生じ、小腸の熱を治す。」と桑の実の薬効を述べています。

桑の実は「赤とんぼ」の歌にも歌われているように、そのまま生で食べても美味しいですが、『本朝食鑑』には「桑の榘の黒く熟したる者一升を用い、好酒一升にいれる。一月を経て爛を研ぎ酒を漉す。冰糖末二、三斤をいれ、拌均（かきまぜる）し、三五日を経てこれを飲す」と桑の実の酒の造り方を示し、動脈硬化や高血圧さらに糖尿病に良いと記しています。

内藤風虎の『俳諧集 桜川』（1674年）には、

湯の山や中風よさらば 桑いちご 林 元

の句があります。昔から、桑の実は生食によく、ジャムや丸薬、薬酒など色々と形を変え、夫々の効用を発揮し、特に中風によく効くとされています(図15.2)。

(5) 桑木の服用

『喫茶養生記』には、「桑の木を切るときでる、おが屑の細かいものを五指で摘み、美酒に投じてこれを飲む。女人の血気よくこれを治す。身中、腹中の病をなおす。これ仙術なり。常に服すれば長寿無病をえる」とあります。

桑根白皮 一桑根酒一

『神藤本草』には桑根白皮（桑の根、少し黄味っぽい茶色の皮を薄く剥いたあとの白っぽい薄い皮）薬種と記されているとのこと。また「凡そ使うには、十年以上の桑木の東畦に向かった嫩根（若い根）を採り、銅刀で、青黄っぽい茶色の薄皮一重を削り裏の白皮を取り、乾かして用いる。皮中の涎を去ってはならぬ。薬効は俱にその中にある」と記されています。桑の薬効成分の多くがその白皮に含まれており、『本朝食鑑』には、

「桑樹及び根皮を用いた濃き煎じ汁に米麴を入れて醸造する。古酒を造る法に同じ」

とあり、桑酒は薬酒で特に中風、五体の麻痺、脚気、咳に効くとあります。また、『言継卿記』の天文22年（1553年）、4月5日の日記には

「申の刻ばかり、中御門より呼ばせられる間、罷り向かう。鯉の膾なますに桑酒あり。ことのほか沈酔す」

とあり、上流社会の人たちは、普段でも桑酒を嗜たしなんでいたようです。



図 15.2 山形県天童市の桑茶のラベル

第 XVI 章 桑葉の薬効(3) 一魍魅魍魎一

五十年ほど前のことです。乗鞍山荘での夏合宿のゼミナールに遅れてバイクで駆けつけるといふ一人の君を迎えるため、夜の十時過ぎ、乗鞍本道との岐路の山林で待ちました。待つ時間のたつにつれ、深山の夜気がかす静寂さに、山の霊気が妖気となって我が身をつつむ錯覚におそわれ、背筋の寒くなる怖さを覚えたことがあります。

中国古代三皇の一人神農が「百草を嘗め一日に七十毒に遇う。茶を得て解す」の危険をおかして得た医薬書『神農本草』はその後の加筆を含め一・二世紀ごろには『神農本草経』に体系化されたといえます。榮西はその『本草経』を基に多くの文献と自己の経験を加え、承元五年(1211年)『喫茶養生記』を記しました。それによると「国の乱れや病は山林・沼沢らの精気をつくる妖気(すだま)「魍魅魍魎」の仕業です。治めるには、桑の薬効にすぎり、まず妖怪を追い払うことでした(桑の薬効(1)・(2))。そのわけは「この世は二人の帝王が支配しています。昼の帝王は天子で、夜の帝王は魍魅などの妖怪を支配する天魔です。桑樹は天帝への道の門で、庶民は桑樹に雨乞いし、諸仏は桑樹の許で悟りを開く(諸仏成道)の霊樹で天魔もこれを避ける神木」と説いています。

ここでは、桑樹霊木を庶民がどう受け止めていたか、またその科学的成分などを尋ねてみたいと思います。

1. 桑樹は天魔も避ける霊木

大宝令(701)、養老令(718)には陰陽道を司る役所・陰陽寮がありました。ここでは易占の大家安倍晴明陰陽博士(921-1005)の活躍した平安時代を通して、桑樹霊木の受け止めようを日常生活のなかにみたいと思います(図16.1)。



図 16.1 平安時代の陰陽博士安倍晴明の名からつけられた「魔除」として用いられた清明鱗

2. 桑の杖

中風の不自由な身を守る杖は桑の杖が最高でした。浄瑠璃『鬼一法眼三略巻二』に、

いとど老木の身の上に さ、
いつ頃より中風の 病も重き桑の杖
すが 縫りよりそう片手業 かたてわぎ

があります。また俳諧『笈日記（下）』に芭蕉の

秋風に 折れて悲しき 桑の杖

があります。冬の近いことを告げる、肌を刺す冷たい秋風。頼りの桑の杖にも見放された老いの悲しさを伝えています。

3. 桑の箸

桑の箸も中風によいといわれていたようです。雑句『柳多留拾遺』に やなぎたる

遠くおもんばかって 桑のはしで喰う

があります。先き先きを考え、今から桑の箸を使い中風にかからないよう注意する意でしょうか。浄瑠璃『日本振袖始』には、

それがし はんしん
某 は中風の神 名は半身と申す者 桑の箸さえ左手で 口を歪めて入れ
にける

の一節があります。中風の半身神は右手が使えず、左手に桑の箸で口を歪めてやっとなると、中風に効く「桑の箸」で文を強調しています。

4. 乾椀飢饉を治める

桑の実（桑椹）の薬効はすでに述べたので乾燥した桑実が農作物の不作で食物の乏しい飢饉を助けた話を紹介します。

孝子蔡順、『後漢書』に前漢のころ、いまの河南省汝南県の人蔡順の注記に、

「王莽時代の終りころ天下が大変乱れた。順は桑実を拾い未熟の赤い実と熟した黒い実を分けて集めていた。悪事を働く赤眉の賊のなぜ二つに分けるか、の問いに順は、黒い実を老母へ、赤い実を私が食べると。賊はその孝心を知り米二斗と牛の足一つを与えた」（図 16. 2）

と伝えています。



図 16.2 蔡順桑子を拾う図(「養蚕秘録」)

楊沛魏の曹操を助ける『齊民要術』は『魏畧』を引用して、楊沛が桑実で魏の太祖曹操を助けた話をしています。

「楊沛 新鄭の長となる。興平の末 (195) 人多く飢餓す。沛、乾椶を蓄へ積椶千余石を得る。たまたま太祖 (曹操) 西して天子を迎う。所将千人。皆糧なし。沛謁見し乾椶を推奨する。太祖甚だ喜び沛をばってきて令とし生口 (捕虜) 十人に絹百匹与え乾椶に報いた」

と伝えています。以後、黄河以北では各家で乾椶を蓄え、子から孫へ「桑あれば荒飢無し」の格言が口づつに伝えられてきたといえます。

『喫茶養生記』は桑樹の箱枕について「桑の枕で休むと、魘魅魍魎が近づけないので、頭痛がおきず、悪夢を見ることなく安眠できるなど、桑の効能は多くて列記できない」と記しています。

5. 桑樹の薬効成分

人智がひらけ、文明開花のいまの世では一笑に付される話をしてきました。『神農本草経』にはじまる桑の薬効に注目した大石寅造は桑根の抽出物から血圧を一割から二割低下させる成分を抽出し、血圧降下を目的にした桑根酒製造法（特許 128115 号、1938 年）と桑根皮部より血圧剤の製造法（特許 140872 号、1940 年）をえています。また鈴木文助ら（1941 年）は桑の血圧降下成分は根皮と桑皮部にあり、エーテル不溶性物質の中に成分が含まれている報告をしています。

近年卯野忠子ら（1981 年）は桑根皮中に含まれる 5,7-Dihydroxy Chromone が血圧降下作用を示すと報告しています。また、桑から発毛成分が抽出され、それを主成分とするマルベリーヘアトニックが、昭和二十五年ごろは農林省蚕糸試験場の購買で自由に購入できました（図 16.3）。桑の不思議さが科学的に解明されるのが楽しみです。

明治三十五年二月発表され、人々の口ずさむところとなった矢野勘治作 あ あ 一高寮歌「嗚呼 あ あ 玉杯ぎよくはいに花うけて」一の歌詞五番

ゆくて
行途を拒むものあらば
き
斬りて捨つるに何かある
はじゃ つるぎ ぬ
破邪の 剣 を抜き持ちて
へさき われ
舐 に立ちて我よべば
ちみもうりょう かげ
魍魎ちみもうりょうも影ひそめ
きんばぎんば うみしず
金波銀波の海静か

の破邪の剣に桑樹を偲ぶこのごろです。



図 16.3 桑の抽出精分配合のクラブ マルベリーヘアトニック
(中山太陽堂謹製 蚕糸試験場所蔵)

参考文献一覧

(引用した文献は、本文中に記載してありますが、ここに一覧として掲載します)

前言

- ・大江憲成(2016)：酌流尋源. 在家佛教 65, 768 号
- ・陳維稜主編(1984)：中国紡織科学技術史(古代部分)、科学出版社. 中国北京
- ・上海市紡織科学研究院編写組(1978)：紡織史話. 上海科学技術出版社. 中国上海
- ・許慎撰(1987)：説文解字. 中華書局出版. 北京
- ・朱新予主編(1992)：中国絲綢史(通論・專論). 紡織工業出版社. 北京

第 I 章

- ・小倉和夫(2004)：名を残さぬ人々の育て方. 信濃毎日新聞夕刊
- ・色川大吉(1966)：日本の歴史 21. 近代国家の出発. 中央公論社
- ・三戸森確郎(1926)：生糸の織度偏差. 蚕糸学報 13 卷 10 号
- ・中川房吉(1930)：絲條斑向上製糸法. 明文堂
- ・嶋崎昭典(1973)：管理工学入門. 農林統計協会
- ・北條舒正編(1980)：続絹糸の構造. 信州大学繊維学部
- ・製糸技術検討会(2012)：よい糸づくりのための煮繭技術
- ・製糸技術検討会(2013)：よい糸づくりのための繰糸技術
- ・製糸技術検討会(2014)：よい糸づくりのためのセリシンと製糸精練技術

第 II 章

- ・嶋崎昭典(2011)：糸の街岡谷. みやび企画
- ・寺島良安(1712)：和漢三才図會わかんさんさいずえ(1906. 吉川弘文館)
- ・白川静(1984)：字統. 平凡社
- ・日本大辞典刊行会(1974)：日本国語大辞典. 第二卷. 小学館

第 III 章

- ・侯良編著(1990)：神奇的馬王堆漢墓・中山大学出版社
- ・井上孝編(1940)：現代繊維辞典. センイジャーナル(株)
- ・湖南省博物館・中国科学院士考研究所編(1973)：長沙馬王堆一号漢墓上・下集. 文物出版社. 北京)
- ・吉川幸次郎他(1984)：詩經国風上・下. 岩波書店

第 IV 章

- ・諸橋徹次(1976)：大漢和辞典. 大修館
- ・李蔚りい(1996)：詩苑珍品璇璣図. 東方出版. 北京
- ・前野直彬注解(1980)：唐詩選上. 岩波文庫

第 V 章

- ・倉野憲司校注(1963)：古事記. 岩波文庫
- ・陳寿ちんじゅ(233-297)：魏志倭人伝ぎしわじんてん

- ・新訂増補国史大係：日本書紀えんぎしき 延喜式
- ・源順編 (931-938)：和名類聚抄みなものしたがいへん わみょうるいしゅしょう

第VI章

- ・浦野範雄(1992)：日本伝統の色見本帖. 日本の色と紋様. 毎日新聞社
- ・竹内照夫(1977)：礼記. 明治書院
- ・阿辻哲次(1989)：図説漢字の歴史. 大修館
- ・宗應星原著藪内清訳注(1971)：天工開物. 平凡社

第VII章

- ・一勇国芳：砧打ち図. 信州大学繊維学部千曲会蔵
- ・宋徽宗皇帝(1082-1135)：摹張萱搗練図卷そうぎそうこうてい ぼちようぎとうれんずかん
- ・徐陵(509-583)撰：玉台新詠. 学習研究社じよりょう ぎょくだいしんえい
- ・藤原公任(966-1041)：和漢朗詠集ふじわらきんとう わかんろうえいしゅう
- ・峯村文人(1974)：新古今和歌集. 日本古典文学全集 26. 小学館

第VIII章

- ・嶋崎昭典(1992)：真綿の文化誌. サイエンスハウス

第IX章

- ・赤塚忠・阿部吉雄他編(1964)：漢和辞典. 旺文社

第X章

- ・香坂順一ら(1961)：現代中日辞典. 光生館

第XI章

- ・金銘子編文(1991)：中国傳統節日及傳説きんめいしへんぶん でんとうせつじつとでんせつ

第XII章

- ・石川忠久(1986)：玉台新詠. 学習研究社
- ・松枝茂夫編(1983)：中国名詩選. 岩波文庫

第XIII章

- ・村島渚(1933)：蚕神考. 明文堂
- ・日本大辞典刊行会編(1980)：棚機. 小学館

第XIV章

- ・井出二三子(1983)：喫茶養生記之研究.

第XV章

- ・嶋崎昭典(1992)：真綿の文化誌. サイエンスハウス
- ・内藤風虎(1674)：俳諧集. 桜川

あとがき

- ・柴田裕之訳・ユヴァル・ノア・ハラリ著(2016)：サピエンス全史. 河出書房新社

あとがき

日本の蚕糸研究、特に製糸研究は横浜開港の江戸末期以降外国消費者の好む生糸を安価に大量に生産することを目標に行われてきました。そのため、繰糸過程に生ずる屑物を極力押えて糸歩を高め、生糸一俵（60 キログラム）の生産に要する人数、対俵人員を少なくして能率を高め生産コストの低下をはかりつつ目的品位の生糸を生産する方向に進められました。

戦前の輸出生糸の主体、繭糸五本合せの五粒付け定粒生糸の品位は、繭糸特性がそのまま生糸へ移行したもので、製糸は蚕品種（繭糸特性）依存型生産ともいわれました。そして技術は生糸の中心太さ（平均繊度）と太さむら変化また生糸のずる節の減少といった生糸の形態管理に限定され、強力・伸度・生糸の吸放湿性、保温性などの質的特性は蚕の品種特性に依存するのです。

最近、柴田裕之訳、ユヴァル・ノア・ハラリ著『サピエンス全史』河出書房新社（2016年刊）は、「地球の頂点にいるホモ・サピエンス（現生人類）が一千年後まで生存できるかは怪しい」と述べ注目を浴び、現在世界のベストセラー書と伝えています。

反面、二十一世紀は人間生活の精神的面（文化）に科学の力を尽す方向転換の必要性を感じさせます。現在の文明社会の忙しさに疲れた人々の心を癒す「心の時代」に、古代王朝の時代から憩の文化を築きファッション心理を目覚めさせた絹文化がその人々を癒す一端を担うならば絹は再び人類にとり大切な位置を占めると思われます。

そうした絹文化を構築する素石を酌みとり絹の文化誌、文化史話を通して絹の文化史の構築されることを夢見てきました。ここでは、既刊例の一部を含め、絹文化の構成因になれると考えた16例について、なぜそう考えたかの訳を書き留めました。ご検討、ご批判いただければ幸いです。

平成 29 年 8 月 3 日 印刷

平成 29 年 8 月 3 日 発行

編著者 元蚕糸科学研究所客員研究員 嶋崎昭典
蚕糸科学研究所長 清水重人

印刷所 株式会社正大印刷社

発行者 一般財団法人大日本蚕糸会蚕糸科学研究所
〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-25-1
電話 03-3368-4891 FAX 03-3362-6210

